

川柳塔



No. 833

十月号

第2回 川柳塔まつり

＜平成8年度同人総会＞

と き 10月19日（土）午前10時から

ところ ホテル・アウィーナ大阪（なにわ会館）
（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車）

議 事 平成7年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成8年度事業計画・同予算案・役員改選・その他

＜各賞表彰式＞

路郎賞・川柳塔賞・澎湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時から行います。

＜記念句会＞

各賞表彰式に続いて開会。午後4時半終了予定

兼 題	「はがき」	川 柳 塔 社	西 出 楓	楽 選
	「漫 画」	川柳塔鹿野みか月	森 山 盛	桜 選
	「 扉 」	竹 原 川 柳 会	小 島 蘭	幸 選
	「 力 」	川 柳 塔 み ち の く	齊 藤	昴 選
	「 啖 呵 」	川 柳 さ さ や ま 社	遠 山 可	住 選
	「 繁 盛 」	川 柳 塔 社 主 幹	橋 高 薫	風 選

◎各題2句 出句締切午後1時半

会 費 1000円（記念品贈呈）

＜懇 親 会＞

と き 同日午後6時から同会場で開催

会 費 5000円 宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪

◎懇親会および宿泊は、人数に制限がありますので、
9月30日（月）までに氏名を明記して川柳塔社事務
所へハガキまたは電話でお申込みください。

主 催 川 柳 塔 社

三十二年への出発

橘高 薫風

昭和40年10月1日、川柳雑誌改題第一号『川柳塔』が発行になった。それ以来十月が来ると、三十一年経った今もなお誕生月の感慨に身の引き締る思いがする。中島生々庵主幹の巻頭のことば

『川柳塔』が産れた。実はまだ哺育室で静かに生活を送っている未熟児である。未熟児といっても、早産児でもなく奇型児でもない。四肢五臓五腑完全に整い生活力も旺盛である。ただ体重が25キロ以下であるために医学上国際的約束で未熟児と呼ばれるわけである。未熟児といふかよわい生命力をどう護ってゆくかに就いて小児科医にはきびしく申し渡されている心構えの条件がある。その中の二つ三つをあげて見る。

○弱いとしびに、いろいろ処置をすれば却つてもしびが弱くなったり時と

すると消えることがあり、栄養も過剰に与えることは意味のないばかりでなく栄養不足よりも危険なことがある。

○「生命を救うこと」の方が「急速な体重増加」を考えるよりも重要である。

○いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしようとか、そうしたあせりや功名心を出してはいけない。

『川柳塔』を逞しく明るく育ててゆく上には示唆される点が多々あるように思う。宿命におろがみながら子を育て

三十一年を経て66頁の雑誌が110頁になつても、この自覚の自戒は寸分違わない。心して時勢に即応した体制で確実な歩みを続けたいと思う。三十二年への出発に当り第二回川柳塔まつりのご支援を心からお願ひ申し上げます。

この『川柳塔』第一号の表紙の絵は、直原玉青画伯の筆で、松の太幹に両脚を踏まえた大鷲が今にも飛び上りそうな前傾姿勢で、眼光炯炯と行手を見据えている。雑誌の門出にふさわしいものであった。爾来三十一年、九十四歳の画伯の恩を受け続けている。

日本南画院会長の画伯は誕生日の八月一日を期に、画業七十年・玉青館五周年記念画集『句画禪』を出版された。

田辺聖子先生が「ホンモノの心のときめき」と題して序文を書かれている。

画伯の絵のホンモノのもつ光芒には排他的な孤高の気配はなく暖かできとろつとしたやさしさに充ちている。墨の濃淡でこんなにも駘蕩たる世界が表現されるとは、と述べ、画伯の作品に勇気づけられ慰められる、と結んでおられる。

尾形怱氏は、画伯の揮毫中の襖絵の梅の枝先に蝶が舞ったり止まったりした事実から、物我一如の東洋独特の宇宙観の具現で「入神の境」と賞讃を惜しまない。

また七月には句画集『早春譜』が六百部限定で出版された。俳誌『早春』への七十年に亘る句の集大成で、年代別の、清閑抄、真観抄、自然抄の三部から成る。

紀伊の燈の銀河の果に走りある

母の日や生涯母を恋ふ子たれ

句画禪の一如確かむ花の宵

僧帽も杖も身につき風薫る

春寒やドラマでありし九十年

座右の句

一日の重さ軽さよ日記帖

私の句

子を叱り子に叱られる齡となり

(薫風)

池田善守

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 三十二年への出発……

雑感……

川柳塔（同人吟）……

自選集……

川柳の群像……

水煙抄……

平成八年度

秀句鑑賞

大空のこころ (69)

橘高薫風……(1)

奥田みつ子……(2)

橘高薫風選……(4)

東野大八……(46)

高杉鬼遊選……(50)

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞……(74)

茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞……

八木千代……(48)

同人吟

水煙抄

川端一步……(80)

橘高薫風……(112)

雑感

奥田みつ子

朝日新聞夕刊の「食楽考」に「文化の伝達役は若い女性」という一文が載っていた。

ある島に住むメスの子ザルが初めてサツマイモを海水で洗って食べ、その習慣が群れ全体に広がった。塩水にイモをつければ泥やゴミが洗い流され、適当に塩味もつくという天才的な発見は、まず若者ザルの間に伝わり、かなり後になってから年寄りザルもそれに倣うようになったという。その話に続けて、いろいろな例をあげて、若い女性の方が文化の享受に積極的であるとも記されていた。

同じような話が他の本にも載っていた。

何世代かにわたって研究されているザルの居住区で、ある賢い若いメスザルが小麦と砂粒を区別する新しい方法を考え出した。サルたちは浜辺で小麦を手えられるが、小麦は小さすぎて他の食物のように両手で拭いて砂を落とすことができなかった。偶然であつたかも知れないが、このサルの女の子は小麦を水に浮かべれば砂が落ちることを発見した。水に浮いた小麦をすくって食べれば、歯に砂が挟まることもなかった。他の若者ザルもこの

渺湖抄

茴香の花

「兄弟」

一路集「待つ」

「珍しい」

各地柳壇（佳句地十選／赤川菊野）

■各地句会だより 川柳後楽吟社

初步教室「白」

九月本社句会

■句集紹介

『吐来の川柳教室』うしろのき

柳界展望

樫谷寿馬さんさようなら

十月各地句会案内

■編集後記

小出智子選 …… (81)

西出楓楽選 …… (84)

藤田頂留子選 …… (86)

板垣草丘選 …… (86)

森井菁居選 …… (87)

花田たけ志 …… (101)

吐田公一 …… (102)

塩満 敏 …… (108)

松川杜的 …… (109)

高杉鬼遊 …… (113)

高杉鬼遊 …… (113)

高杉鬼遊 …… (113)

高杉鬼遊 …… (113)

高杉鬼遊 …… (113)

座右の句

無事越えた山の高さを振り返り

（紫 香）

私の句

平凡な幸せなのだ米を研ぐ

小 熊 江 美

やり方を取り入れ、間もなく若者サル皆が小麦を洗うようになった。その後、徐々に徐々に母親たちがそれに倣った。しかし、父親サルは歯に砂が挟まるのに困りながらも、今までのやり方を決して変えなかった。何世代か経った現在、小麦洗いは一つの慣習になっている。また、サルは陸の動物であるが、海の中で遊ぶと面白いことを知って、水浴びを覚えたり、海草を少しずつかじり、そのおいしさが分かって、食物の範囲を広げた。

人間の文化と同様、サル文化でも、若者の大胆さと年輩者の用心深さは、それぞれ長所があり、危険な遊び、有毒な海草には適当にブレーキがかかり、大胆さと用心深さの両者の間でバランスを保ちながら、慣習も変化してゆくものであると結んであった。

老人は若者についてよく愚痴をこぼす。しかし、「今の若者は」という言葉はいつの時代でも繰返されてきた。確かに若い世代を見てみると、目に余ることも多い。年輩者はすぐ無難に型にはめたがるが、型にはまった優等生からは、新しいものは生まれにくいような気がする。目に余るような型破りの中からキラッと光るものを見つけて育ててゆくのが年輩者の務めなのであろう。

それにしても、人間社会でも、頑固で保守的なお父さんの何と多いことか。これもまた大切なことなのだろうか……



橘 高 薫 風 選

下関市 石 川 侃流洞

松原市 小 池 しげお

ふんころがし地球を守る緑の下
餌みんな小河豚にとられ寄る市場
ビル天へ伸びて太陽みな吸われ
アトラクタ終つてもとの茶の間の灯
合縁奇縁おかめひよつとこ五十年
大根を煮ている妻に牙がない

倉敷市 小 野 克 枝

縁側の陽ざしの中で和解する
待針に女らしさを貰う指
白い杖 微笑む花に耳を貸す
いろはから出直す海の音優し
物言わぬ仏にせめて生きた花
待つことを教えて回る花時計

蜂の巣を見付けてからの一か月
夏好きが大きな西瓜下げてくる
練習はしない樞のはいり方
ホツチキス思い違いをしてしまう
俎に乗ったら臍を上にする
どうしても許されないが盆がくる

堺市 桑 原 道 夫

くちばしで突っついていいる議題かな
襟首をつかむ八月の大きな手
幕間のロビーで「御無沙汰しています」
旅人寅さんに妹という故郷ありき
踊り子のいま美しき鼻の穴
かなしくて亀を何度も裏返す

和歌山市 西山 幸

生き感うことが始まる目覚めかな
今日も晴雨兼用傘を持つて出る
去ってゆくひとの砂漠を見続ける
燃え尽きた花火とマッチ棒がある
灯の下でひとりに還りゆくばかり
立秋やまた落書きがたまりだす

黒石市 相馬 一花

ヘア写真ずらりと飾る理髪店
点滴が効いてエンマが待ちぼうけ
この度はムニヤムニヤだけで済むお通夜
つけ届け不要と入院説明書
8の字で客を集める大バーゲン
0157 出番を祈る正露丸

鳥取県 鈴木 公弘

關魂は老いることなし五十歳
真心のこもった嘘をついている
突き出した口に激しい風当たり
焼くごみの嘆きに耳を貸しなさい
面白くないのに笑う部下なれば
左遷地へ槍一本を提げてゆく

弘前市 高瀬 霜石

引き返す勇氣を持たん九十九里

権力と孤独同意語かもしれない

正義とは何ぞや拳擦りされる

どこまでが仮面 どこまでがわたし

コンピュータ様あなたにはかなわない

烏帽子からちよいとはみ出ている驕り

仙台市 川村 映輝

満ち足りた一日猛暑気にならず

体重に増減が無く三十年

古日記に優る読物吾になし

男居て女居るから艶がある

七夕に帰省子の呑む缶ビール

人間を揶揄いながらカラス生き

唐津市 久保 正剣

雪椿女やさしく恐ろしい

霧囀気をまづい男にリードされ

一途さを知って非礼を咎めない

負け越して金星二つ鉛色

年金で頭脳道楽しています

み仏は許すポーズで見つめてる

和歌山市 山田 高夫

ひと雨が欲しい心の渇きにも

肅々と行く炎天の葬の列

何一つ遺すでもなし父眠る

もう邪魔は誰にもされぬ墓の石
一本気 種も仕掛も無い両手
興味だけそそる相談欄のうそ

和歌山市 牛尾 緑 良

夏越して命ますますたくましい
いい子いい子 母の時間は流れない
ポケットをさぐって捜す幼い日
先生の年齢を追い越しそうになる
八月の雲は祈りで重くなる
コーヒー一杯みんな孤独に耐えている

和歌山市 田中 輝 子

たじろがず夏の暑さに抱かれおり
心の荷を攫ってほしい満月よ
達筆の心の底が読めぬまま
便箋が満ちて漂流するわたし
雨音を拾い続けてなお孤独
人形も私も翼ほしい時

米子市 政岡 日枝子

エンピツをずっと味方につけておく
鉛筆にはっぱをかけて走らせる
削っても削っても芯の芯は謎だらけ
女の児というに6Bのような首
子を産んで鉛筆正確に削る
色鉛筆で塗っていく女の子の未来

豊中市 安藤 寿美子
送り火の送るも送られるも独り
八月十五日 窓から明りがもれて来る

二十一世紀も夏は暑かろう
考える事とまらず台風裡
台風はどないしてると起きてくる
浴衣着ると踊りの振りになってくる

鳥取県 土橋 螢

声出して笑う貴様は豪傑だ
待たされる人の立場を考えよ
自己陶醉の幸せにちびりちびり
忍という美学畳を拭いている
負け癖がついたアキレス腱を撫で
この山の秋の匂いと獣のにおい

鳥取県 土橋 はるお

男盛りの真空管が切れている
東京からガス栓締めに戻す
男盛りの四十八手の裏表
歩くたんびにガス漏れがするお爺さん
べしやんこに家を踏まれたかたつむり
忙しい割に貧乏しています

今治市 矢野 佳 雲

八十になったと俺に言い聞かす
どう見ても元教員とわかる顔

堂々と職業なしと書き慣れる
私ならあはしないと姉の恋

非行記事人ごとにせぬ孫が居る

パイナップル生れもつかぬ穴があき

和歌山市

堀畑靖子

思いきり走り負い目を振り払う

わたくしの手綱自分で引きしめる

根まわしはクライでいつも体当たり

千仞の谷が進路に見えてくる

無気力なままひとまわりした時計

さざ波は君との愛の二重奏

川西市

氏林洋敏

目覚めると命は浄化されている

赤い血の流れる命信じ合う

ひぐらしや耳の奥まで聞き惚れる

さびしい人がいつも見ているテレビ

ふるさとでうまいコーヒーを飲んでいる

夢という色紙疲れたときに見る

茨木市

井上森生

パソコンをやるなら超々遊び風

母上よお迎え悠々待ちましょ

蟬時雨 昔に返る墓碑の前

飲みこめぬ話はそつと灰皿に

西瓜割る楽しみ奪う菌の夏

宮仕えラストサマーを海と山

香川県

木村あきら

エンジン快調ハードル少し上げてみる

矢も弾も飛んでは来ない無位無冠

晩成が実らぬままに黄昏れる

後のない土俵で今日も果し合い

栄転はローカル線に乗ってゆく

酸性雨 六地藏さんに降りかかる

大阪市

稲本凡子

癒えているはずだが薬まだくれる

目の位置を上げると幸せが逃げる

順番に生れ順番に死なれない

夫の遺影と孫の遺影が同い歳

記念写真となりのひとが美人すぎ

ポケットの小銭が誘う屋台酒

神戸市

山口美穂

復興の槌音蟬の声に負け

ほんの少しの蔭のある方を歩き

震災をくぐった物で捨てられぬ

繰り言を犬が相手をしてくれる

消費税のアップすんなり決められて

寅さんにききたいことがあったのに

砂川市 大橋 政良

聞く方も話す方にも嘘がある

紋黄蝶 恋のエンゼルかもしれぬ

影法師お前も弓を引くだろう

心にも四季あり風の便り来る

遠花火きゅっと胸が痛くなる

弘前市 斉藤 嘉

書齋からのそのそ降りて昼御飯

名馬碑の除幕安らかに安らかに

牛の子に逢いたく草を刈っている

寅さんが逝く寅さんを観てる日に

昇龍の松のすっきりした手入れ

弘前市 中山 雅城

朝顔は隣の喧嘩聞かされる

氷山の一角ひやつとする話

おふくろの味は地酒で整える

白鳥はパンを貰ってお辞儀する

ブーメラン道草食って戻らない

弘前市 高橋 岳水

天に唾すると山背が牙をむく

辻褄を合わせて寒いものを抱く

頼るなら大樹に限る蔦かずら

ひたすらに生きた二つの欠け茶碗

プライドを捨てると見える手暗がり

弘前市 一戸 ツネ

音もなく遮断機降りる八十路坂

真夏日や写楽も食うた冷奴

耄けそめてことばの積み木裂けてくる

これからの残る命は花時計

いろは四十八綴るに難し十七字

弘前市 佐治 千加子

山高帽の賢治の影に見送られ

そうです空の傷口見たのです

碧瑠璃の天ふるさとの墓まいり

月見坂 義経というそばどころ(中尊寺)

寅さんの立っていいような村祭

弘前市 小寺 花峯

飲んで呑んで呑んで騒いだ夏終る

イチローとノモになりきったドロコン

気にしない床屋の親父無精髭

働いて働いて蟻の目から汗

二次会の銚子に揺れる蜃気楼

弘前市 岡本 花匠

針穴に通せぬ我執悟れぬ掌

あるがまま生かされいきて今日の無事

寅さんの風格なりに白い道

炎昼の風鈴死んでかき氷

昭和史をよみがえらせる原爆忌

青森県 諏訪 柳 々

古代ハス縄文の色で咲き上がり

おにぎりの真ん中辺に居る平和

恩師からのお便りウソ字ひとつ見つけ

五十なかばへそのあたりにうずくもの

母の忌を妻に尋ねる息子です

青森県 西谷 大 吾

少年は草笛吹いて明日を呼ぶ

夏の夜の佞武多囃子に燃える恋

愚痴ひとつつと堪えて冷奴

四捨五入してもやっぱり庶民です

人間に厭きて猿語を聞きにゆく

横浜市 菱 田 満 秋

献酬の中で体調たずねあい

一円を拾って家計簿へ記す

奥様の紅鮮やかに喪が明ける

燃えた夜の跡を藪蚊にのこされる

このたびはむにやむにやと悼みけり

町田市 竹 内 紫 靖

天にいるアベベ表情くすす刻

神に謝し覇者トラックにひざまずく

集団死出番の電子顕微鏡

電顕像 血を吸う虫のつらがまえ

白樺の壮観バーコードを想い

静岡県 蘭 田 蓼 沓

大輪の朝顔 日除けしてもらい

空調の効いた会議で風邪をひき

齢なりの夢追いかけて今日も出る

ラーメン屋なれど嬉しい子の誘い

あれこれと頼めば婆ちゃん嬉しがり

富山市 舟 渡 杏 花

君ひとりしか見えぬ見えぬと迷惑な

寄ってたかつてみんなで「運」にしてしまふ

真剣な顔 間抜けた顔や籤の列

再婚をしてよかったと言うひとと居る

思いきりひとを騙してみたい日も

富山市 酒 井 輝

降格で気付いた箸の上げおろし

弁護士もひとと人並みの嘘も言う

まだ母に似合う口紅母と買う

鉢植えの位置決めさせる五十肩

新体操毬がおとめを手放さぬ

富山市 島 ひ かる

心まで写すあなたのカメラアイ

網のないトマト親子の雉子の物

ばっさりとカサプランカの雌しべ切る

干上がった大地に掘った水の跡

どつと切ってまた来年よどつと咲き

京都市 都 倉 求 芽

どれもみなボスのつもりのかぶと虫
海へ出て太陽少しゆとり持つ
人々の汗を称えて陽が沈む
大津絵の鬼になりたいこの暑さ
波がひく浜辺の夏を連れ去って

京都市 山 海 友 熙

小瓶で酔うて人生楽しけれ
糸電話言葉優しくする残暑
人生の喜怒哀楽へピカソの絵
甘えたい人あり秋が深くなる
母ひとり残して亡父の舟が着く

京都府 稲 葉 冬 葉

一つ許してすべてを許す落し蓋
みんなあげて新しい通帳を持つ
身軽になって友達が出来ました
過ぎざれば水の滴もなつかしい
究極の選択ガムを噛んでいる

大阪市 西 出 楓 楽

タコヤキがサムライボールとは笑止
世渡りの足を引っぱる正義感
震度計に胸のときめきバレそうな
歳かいな一日置いて疲れ出る
おしゃべりを手玉にとっている無口

大阪市 榎 本 蔭 児

ペンキ塗りたてそんなあんたが立って居る
病床で美味札賛を読んでる
ゴッホ画く裸婦は緑に染まらない
印籠で丸く治まる世もあった
古希すぎてまだ現役と言う芸妓

大阪市 神 夏 磯 典 子

快便が嬉し〇一五七
主婦業をクビになりたいこの暑さ
ど忘れをするのに軽く約束す
色気ない人から恋の悩み聞く
入門をしたらとたんに出た個性

大阪市 清 水 利 武

口下手がたまに褒めたら叱られる
飛行機で帰り祭りの輪の中に
だんじりの声で寝られぬ祭り好き
筆まめで恋の代筆頼まれる
兄弟はや初盆がやってくる

大阪市 上 田 柳 影

点滴でのばす命に爪がのび
うつとりと爪つんでいるなつの昼
真夜中の帰省名知らぬ山の月
漫才にしばし暑さを忘れてる
ふる里の水はつめたい昼の水

大阪市 津守柳伸

ご静養一週間の従者たち
ずぶ濡れの汗さわやかな万歩計
寝不足が一喜一憂するテレビ
土用丑めざす空輸の活鰻
右折する携帯電話鳴っている

大阪市 板東倫子

新盆の友へ純白の胡蝶蘭
床料理 貴船の鮎は気品あり
古時計止ったままの熱帯夜
アトランタ美女のいくさは苛酷なり
ニューモードまるで昔のアッパツバ

大阪市 大塚節子

物入が多い今年も達者です
見合い写真をお通夜に飾るところでした
佳い国で四季の行事に追われます
原爆記念大典主賓の胸のバラ哀し
風鈴も義理で時々鳴っている

大阪市 玉置英子

四季咲きの薔薇も暫く夏休み
店先へ花つけたままきた胡瓜
スーパ―に無い声溢れている市場
平凡のなかでうれしく茗荷買う
これからは鯖よむ齢は多い目に

大阪市 渡部さと美

大阪市 北勝美

南からシケ0一五七地震
目の粗いザルで大きく言いふらし
俄人気住持のはなし青くさし
ブンブンとうなり草刈り唄はない
ここ一番負けてたまるか蟬しぐれ
妻哀れ盛夏も重ね着車椅子
七色の薬飲ますも己が役
お漏らしも忘れはじめた羞恥心
句会へも遠のく足のわれ淋し
妻病んで枯らしてしまった鉢二つ

大阪市 辻川慶子

カサブランカ一輪残り匂う部屋
自己主張ときどき意見合わぬ時
さるすべり立秋なれどこの暑さ
改革の手拍子何も変わらない
アップルバイ好きだった人思う盆

大阪市 河井庸佑

労力は無駄でもいつか生きてくる
言う前に動く機敏さ見込まれる
虚栄心もろに嵌まった落とし穴
交渉へ攻めか守りか思案する
軽はずみ動き裏目になった悔い

大阪市 川端 一步

古本を山ほど売って稀観本
齒がたたぬ本かじりだす老いの意地
平凡な暮らしそれで十分ではないか
夕焼けを背にして孫とだまし舟
だれよりも妻が喜ぶ次の職

堺市 板尾 岳人

父の死後母のサイフが見当らぬ
父の死後母を騙したことがない
父の死後鯛を一匹釣りました
父の死後海がだんだん深くなり
父の死後母の鏡は曇らない

堺市 中野 櫨子

入院で大事な命洗ってる
小さな幸明日明後日と数珠つなぎ
知恵袋 夢の袋に替えようか
プレスレット老いには勇氣いるおしゃれ
カタカナ語お菓子か花か単語かな

堺市 吉本 菁風

白味噌を吸って落着く旅帰り
難しく堅く冷たく社説欄
沈黙と言う攻撃を受けている
病人を診ずにデーターばかり見る
死火山と高を括って裏切られ

堺市 山本 半銭

御霊膳わたしも同じお精進
盆三日緑茶焙じ茶湯気供え
描き上げた菩薩は母のまなざしよ
据え膳の有難さから旅となり
嫁達に土産そろえて旅おわる

堺市 近藤 豊子

朝顔の上にエブロン干してある
ネクタイを締めてすずしい顔になり
夜の蟬 迷子のようになきはじめ
クレイン車の入道雲へもの申す
干し竿のはや秋風を知っている

高石市 浅野 房子

男運悪くて未だ母を恋う
抜けられぬトンネル檜山へつづく
道一つ隔てて届かない思い
よい方に解釈すれば眠れます
カラオケのマイク突きつけられている

豊中市 田中正坊

中途半端な年だと思ふ七十四
戦死した兄が小遣くれました(特別弔慰金支給)
国債をもらい余命を考える
竹光でない真剣を持っている
私より弱い敵とはたたかわぬ

豊中市 滝北博史

参加することに異議ありオリンピック

祖父夢中シンクロナイズド スイミング

原爆の日から私の腹に虫

原爆忌だけはしません朝寝坊

親友の孫の顔あり甲子園

豊中市 吉田 あずき

洗いたてのカーテン風も洗いたて

熱帯夜何を思いて眠らんか

炎天をスロービデオのように行く

ぬれ衣を着たカイワレの大合唱

玄関を留守待ち顔の蚊がまとう

豊中市 井上直次

おしほりを畳みなおして待つ返事

ネクタイを締める背筋を伸ばすため

腹満ちて善からぬ事を考える

町内の世話を焼いてて無位無冠

世話好きは妻に興味だと見られてる

豊中市 江口 明光

銭の世だ弱気禁物馬と株

奉仕して恩にきせない勇気持つ

しっかりとんだめて楽にしてあげる

土砂降りの雨でも犬は宛てがある

しりとりのはんではしめくくる

豊中市 稲葉眞郎

夏花火 南十字の星ダブル

入れてくれと三つ指揃え座る猫

磯の波 生命のリズム刻みでる

温泉場杖ついてみな急がない

温泉場 絵馬びっしりの薬師堂

池田市 岡本 吉太郎

生涯を時の流れにまかせてる

恩かけて見返り待たぬ温い人

疑いがお詫びする度深くなる

氣くばりが過ぎて気まずい思いする

しもじもは親しいお言葉には弱い

箕面市 岩津 ようじ

友が友 肴に集う暑氣払い

お位牌と一緒に朝の蟬を聞く

衆寡敵せずら抜き言葉に慣らされる

正座する日本人になる修行

閑日月 働いてきたご褒美だ

摂津市 井上源一

貧血の蟻もせつせと冬仕度

冷奴 古稀の砦を守り抜く

盆踊り紅緒の下駄に誘われる

包丁も針も手にして鰯夫なり

終戦のドラマを語る父の義齒

吹田市 茂見 よ志子

夏の汗少しゆるめる塩加減

ニラの花線香花火の型で咲き

駄馬なりに出直しきかぬ今を生く

手をつなぎ肌触れあえば熱きもの

負が並ぶのは意気込みの差だろうか

吹田市 山本 希久子

美わしき哉 弟兄をかばうなり

朝顔の返事ピンクのぼかし模様

自戒する夕べの朝顔のように

西陽さす部屋で暑さを口にせず

やさしさも毒もありますバラの朱

吹田市 瀬戸 まさよ

東北の祭り噴き出すエネルギー

雨中の太鼓さんさ踊りに酔い痴れる

風鈴の優しい音色旅の駅

放送の誤読いまましいテレビ

お喋りの長電話ですスカッとす

吹田市 古川 喜美子

風化した恋乗せている観覧車

知らん顔してたお蔭で今日がある

おしぼりでついでにバッグ拭いておく

松茸とメロン定位置確かなり

もう一人の私ピンクの服着てる

茨木市 藤井 正雄

美しい水の近江の月明かり

母親を真似て起こしにくる長女

新人紹介メモのとおりにはばされ

旅便り書く気にさせる夜の雨

変化球妻が苦手を突いてくる

茨木市 堀 良江

傘さして大夕立の軒の下

一言も言わず雨足見てる軒

ヒロシマの人とテレビで黙禱す

揚げたてのコロッケ供えてあげる盆

名ばかりの立秋なれどありがたし

高槻市 川島 颯云児

息子より嫁が頼りという余生

ちよつといい話心に書きとめる

妻の舵信じて余命預けます

馬鹿になりきるとこの世も面白い

読むほどに腹の立つ本読んでいる

守口市 結城 君子

山の辺を秋蝶に道ゆずりけり

今日は処暑 萩の約束出来ている

半額になるのを待って夏帽子

秋立つ日ホットな味がなつかしい

間違っても笑みで迎えられる歳

寝屋川市 江口 度
曲がつてゐる方が素直な胡瓜かも

似た者夫婦いつも何かを探してる

倦怠期 他人の顔の妻が座す

店仕舞セールの臆面もなく続く

雲西に流れるおいでおいでして

寝屋川市 柴田 英壬子

この浦舟に花嫁の指美しい

お迎えの茄子おかえりの胡瓜よる

回り行灯ともすと心くずおれる

ひとりでも包丁といできざむ葱

眼科の廊下に鈴虫鳴かせてる

寝屋川市 堀江 光子

大夕立 水上バスの四方から

夕立を切り裂いて行く救急車

夕立の来て上がる間のかき氷

幻の母を追うてゐる桐の花

ふり向かぬ母呼びかけて覚める夜半

寝屋川市 岸野 あやめ

身のこなし男社会の自信見せ

愛の鞭だと感じては居りますが

年金の引算をして生きてます

美し国捨てて便利な国となり

意地ももう忘れて買ったアッパツパ

寝屋川市 後藤 黎之助
更地での線香花火が眼にしみる

祇園ばやし桂小五郎どこに居る

酒飲みのあの友達があんな趣味

好きな色添えて出せよと冷やつこ

ストレスか妻大根を真つ二つ

寝屋川市 太田 藍子

寅さんの理想はさくらだったはず

楽しみがまだまだあった病み上がり

この年でけんか別れのクラス会

あら楽し文具売場で若返る

割引の客へも丁寧なホテル

枚方市 前 ともつ

布団かぶりクーラー付けて平和なり

定食へおしほり添えて北新地

持病一つしつかり守り生きている

恐い菌 防ぐわが家の七ヶ条

体調を計るお酒を呑んでいる

東大阪市 森下 愛論

ご意見の程有難く腹を立て

喋り過ぎ盃回すのやめて置く

招かれて義理で飲んでるぬるい酒

真昼間会うホステスのくそ真面目

二等兵の頃に買ったアウトドア

藤井寺市 吉岡美房

鎮魂歌 簾のような蟬しぐれ
古井戸で死んだ蛙の平和主義
今更の二人無言のところてん
カーテンが動いて僕も風になる
御近所の顔が見送る救急車

藤井寺市 田中透太

五十年語り続けた黒い雨
置手紙 亀裂の深さ知らされる
酸欠の川で泳いでいるめだか
もう一度転ぶと後がないのち
鈍行で男盛りが旅に出る

藤井寺市 中島志洋

秋風がすだれの髪に戯れる
忘れてはいない貴方の罪な嘘
運不運 茨の道と花の道
正直な男がついた下手な嘘
あつさりとハッピーエンドにせぬドラマ

羽曳野市 榎本吐来

腰低い男が抱いている野望
優先席に自若と座る齢となる
結論を言えばお金が要るんです
ノーイエスどっちなんです大阪弁
割り込んだ席後味がつき纏う

羽曳野市 吉川寿美

器用には生きてゆけない太い指
原爆忌つらい記憶がかけぬける
戦列を逸れ寂しき靴すべり
ある予感ときめきを抱く萩の道
赤い気炎はいて女の大ジョッキ

羽曳野市 酒井一壺

橋一つ離れて住んで睨み合い
欄干にもたれて話決まらない
人間の最後の芝居お葬式
母親の笑顔 千両役者です
無器用で芝居の出来ぬ深海魚

八尾市 宮西弥生

あの人もこの人にも会える盆供養
夏の絵に夏と向き合う模様替え
湖に映るころの透明度
小さい秋見つけた地球は病んでない
窓ぎわで心開いている勇氣

八尾市 宮崎シマ子

金儲けしみじみ汗の炎天下
湯通しした野菜は老いの口によし
暑うおますなあと花に水をやる
字の太い男に人生かけてみる
よく寝て食べて〇一五七に備え

八尾市 山下 美津留

表札が邪魔して気儘まだ出来ぬ

あれこれと思案した末冷奴

久しぶり水虫様のお出ましだ

壁一つ隔ててやけに景気よい

御先祖の額 飲めそうな顔ばかり

八尾市 吉村 一風

老いても母一人ひとりに小言言う

花瓶にも氷をひとつ入れてやる

酒うましはける間もなく古希越える

倅せになりたい汗はうんとかく

新聞を読まずに済んだ休刊日

八尾市 高杉 千歩

地球規模 恐いことが起きている

一年生 自分の切符離さない

金婚へ平均寿命気にかかり

おのろけを聴かせ珈琲代割勘

白木槿 冥府へ旅のあとやさき

八尾市 高橋 夕花

残暑きびしく煩惱が攻めきたる

梅しやうが漬けて愛しき娘たち

朝顔 夕顔 妻も元氣になりました

空はからっぱ 鬼灯が熟れている

萩焼きを買って久しき茶のころ

八尾市 大内 朝子

母になる瞬間神の手をつかむ

打ちあげの乾杯ころ束になる

四万十はムカシトンボの住めるとこ

朝顔が命を唄うひとときよ

海の泡きつと魚の夢のあと

岸和田市 芳地 狸村

末席でじつと見守る子の舞台

母からの免許が光る梅の味

お茶漬けに馴染んだ舌を自慢する

クーラーに弱い私の扁桃腺

金婚を祝ううれしい招待状

岸和田市 岩 佐 ダン吉

夢にでる僕まで愛想笑いする

フルマラソンこの汗命だと思ふ

朝一番母さん気合い入れている

沖縄を売った歴史が裁かれる

税率を上げて総理が笑つてる

岸和田市 島 崎 富志子

血祭りにあげられたのはカイワレで

すぐむきになる不器用な私です

用はないけどと前置き母の声

ふり向かぬ涙壺持つ過去だから

寅さんが死んだ正月淋しいね

岸和田市 寺 田 甚 一

ビッグニュース孫がひとりでやって来た

お帰りはしっかり供を連れて行く

銀で泣き銅が喜ぶアトランタ

プールなし合宿なしの中毒禍

顔知らぬ電話の声に惚れている

岸和田市 田 中 文 時

老人会這入り葬儀の多いこと

酒飲まぬだけで真面目と受け取られ

善人を貶す井戸端会議中

末席に下戸集団が屯する

三回忌 亡母の演歌のテープ聴く

岸和田市 長谷川 呂 万

嘘ついてごまかす嘘をまたついて

どの指にたかろか次の総選挙

壺一つうこんの布に桐の箱

弥生人たたずんでいる石舞台

遅くともたゆまず進む趣味の道

富田林市 松 本 今日子

スーパの入口ふさぐ立話

瀬戸大橋 蛸一匹をぶらさげて

坂の上冷たい風やぬくい風

泳げないプールも水が満々と

まだ元気だなども老いたとも思い

富田林市 片 岡 智恵子

修羅越えた安堵の老母の美しき

ゆつくりの歩幅で見えてきた余生

こだわりは直線ばかり引く父だ

年月へ土は裏切ることはない

私と心と語り合う散歩

河内長野市 井 上 喜 醉

人生の真ん中を過ぎ竹を踏む

ストレートぶつけた言葉消えません

マスコミが騒ぐと動く大腸菌

酔い覚めて急に話が畏まり

六十路越え医者と仏の板ばさみ

和泉市 西 岡 洛 醉

体重計老いのグラフは異状無し

住所録 昔々の恋も有り

午後三時 愚妻も昼寝しています

風向きが変ったぞ妻が向くそっぽ

牛歩戦術 年寄りの知恵生かす

生駒市 北 山 悟 郎

義肢鍛え敵は幾万ありとても

君も来い告げて去り行く霊柩車

精神が限界越えて翔びすぎる

自分が自分騙して耐えている

貪欲に生きて来たのに金が無い

生駒市 麻生 アート

和歌山市 桜井 千秀

補聴器へ昔ながらの雀鳴く

補聴器で今ききなおす風の音

地獄また面白からんこの暑さ

ニヒリズム若さと共に消えました

化石になっても仏さまにはなれまへん

大和高田市 岸 本 豊平次

花好きで朝顔数え古稀の朝

白寿すぎ女も歳を誇らしげ

子が二人 夫れ夫れ他人がついて

生真面目でカメラに笑顔つくれない

アトラント黒人パワーの大写真

大和郡山市 坊 農 柳 弘

旬旨いとなり松茸うち秋刀魚

目を細め月見団子を下戸の父

菊愛でる親父立派な日本人

月見草あなたの愛をもう一度

天高く見合い間近なダイエツト

大和郡山市 榑 原 慧 心

衣食住足りて定年忍び寄る

サイコロを振るに振れないゴール前

代筆に慣れた手つきの勧誘員

酒が出て攻守がかわる下戸上戸

卒業はできたが街はカラッ風

つらつらと思う冷房車の中で

拒否されて傷付くよりは泣き寝入り

釘一本打って緩んできた砦

弱音吐く息子の墓石洗いつつ

こばれ萩 世の移ろいに遠くいる

和歌山市 池 永 正 雄

ひと夏を蛭よ蟬よ有難う

梅干のこの一粒の郷愁よ

たこ焼のように世の中丸くなれ

麗人の会釈クルマも道あける

とこてん素直な顔で押し出され

和歌山市 堀 端 三 男

マジシャンと握手するのが怖くなる

太平洋を借景とする駅に降り

ハワイまでわざわざ焼きに行くらしい

五月病すめば解った社の派閥

〇一五七日焼けをしない夏休み

和歌山市 福 本 英 子

喜怒哀楽口で言うほど易くない

初盆を迎える柳友の指を折る

朝ごとの鉦に遠慮のいらぬ盆

日の丸をいびつに染めたアトラント

半白髪へ舌かみそうなキューティクル

和歌山市 宮口克子

プライドを高く持ってたときの覇氣
タグボートこんな男を求めてる
生きるには切り捨て御免する時も
何しても良い齡ですとアドバイス
その油断とても可愛い魅力です

和歌山市 福井桂香

行く夏を束ね朝顔乱れ咲く
お行儀よく給食たべて血を吐いた
泣き砂に民の嘆きが滲みとおる
揺り鉢の中を転がっている政治
稜線に甘えるように月昇る

和歌山市 青枝鉄治

溜め息がもう出つくした政治劇
輪の中で空咳をする自己主張
友の傷触れねばならぬベンを折る
出血という商魂に踊らされ
郷土芸 古老の意地で守り抜く

和歌山市 細川稚代

亡父さんに供えてやりたい氷水
絵日傘も三尺帯もある実家
泣き顔を隠す蛇口を全開に
あの日から片翼飛行つづけてる
川下に住んでやさしい風あたり

和歌山市 川上大輪

仰向けに死ぬ虫ケラの宿命か
齒の抜けた鬼はちっとも恐くない
薬局に毎度と言われ治らない
消去法そろそろ俺が消える頃
通りゃんせ怖いものなど何も無い

和歌山市 川上富湖

天秤座生れで支点疲れきり
微塵子の親分にならなれそうだ
井の中で蛙筋力付けはじめ
入道雲のてっぺんの顔怒ってる
詫び状を寝っ転がって書きました

海南市 三宅保州

風船の中で主張をする空気
群衆の海に溺れている個性
人間に振り回されている地球
惚れたのはどちらが先か揉めている
恋をしていますと顔に書いてある

神戸市 木村貴代子

カーテンで仕切り私の城と言う
黙想の父うかびくる敗戦忌
西瓜切る父の手際にとどかない
埋め立てた海辺に光る大プール
萌ゆるもの内にみどりよくねむる

尼崎市 春城 武庫坊

へそ出しルックで平和が街を闊歩する

本物の胡瓜は少し曲っている

ユーモアを少し溶かして生きてみる

男女 区別をせずに老いてゆく

冷房と炎暑交互に日を送る

尼崎市 春城 年代

喜寿の関所 目の前にして充足す

姉妹 仲良きことのむつかしさ

のど飴と睡眠薬に紛れこむ

人生のパズルを埋めるひたすらに

乱視では世間の嘘を見抜けない

尼崎市 田中 薫

喉の穴さびしくあれば嘘を吊る

胸薄き日や絵本つぎつぎ裏返る

けだるさを照り返す渋滞三キロ

どこへゆくのですか さびしいかもめたちは

マンボウの唇重き天の川

西宮市 奥田 みつ子

泳ぎ疲れポツカリ浮いて空を見る

稲光 わたしの鋳型こなごなに

時は夏 命の夏は過ぎ去りぬ

筆太の父の手紙を読み返す

淋しさがずっと秋の胸の底

西宮市 林 はつ絵

引き出しのピエロの絵から汗にじむ

庭木二三 罹災空地の蟬の声

虫がいて言葉へ毒を入れたがる

老婆よと齡を聞いたら同い年

無視という最後に残る術がある

西宮市 秋元 てる

ミスしても気付かない振りされる年齢

今朝の夢 人は夢から老いるのか

遠ざかるねぶたの熱気夢に追う

文庫本リユックサックとよく似合う

内定へ孫より親の声弾む

西宮市 山本 義子

不器用に三分の妥協のみこんだ

山を下りコーヒー店に直行し

ワープロよ お前もわたし操るか

あの人の芝居がかりに合せとく

流れ雲 人の輪廻は重たいか

西宮市 亀岡 哲子

誰とでも合わす和音を持つピアノ

少しずつ毒を与えて子を育て

オーイオーイと流されてゆく月の海

カーテンへ知らんぷりする風見鶏

旅立ちの濃き口紅を見送りぬ

西宮市 久保 まさお

かき氷 石焼きいもの声で来る

正と邪と二人の私摺み合う

あの世までついて来そうな影法師

心中の鬼とときどき妥協する

いつの日か便り下さい流れ星

芦屋市 黒田 能子

ワントッチ颯爽として雨の中

最終へ電車は雨に濡れて着く

雨の日は好きなショパンと本の中

マンネリに目覚まし時計鳴っている

輪の中でたった一人の好きな人

伊丹市 山崎 君子

絵日記に陽の雨を画く夏休み

花びらのような月見る海の家

カラフルな浜辺哀しい桜貝

夏の蟻 涼しいみちも知っている

阿波踊りテレビに映る友の顔

宝塚市 嵯峨根 保子

はね橋を妻が下ろさぬ日がつづく

ばあちゃんとこっそり舐めた蜜の味

おみやげに四条小橋の漬けもの屋

寺子屋をみてそれから芝居ずき

転ばぬよう母へ便りのしめくくり

宝塚市 中田 純次

覚えたり恥ずかしながら杖の味

無事離陸おしほりぬくし旅たのし

おしほり屋夕刊のころ走りだす

有森のラストシーンに涙あり

大統領ドラマのラスト死刑とは

加古川市 吐田 公一

寝姿を最後に見せた母の棺

嫁って欲し嫁けば淋しくなる我が家

話し合えば意外に素直茶髪族

コスモスの風に靡いているばかり

一粒のルビーを探す都市砂漠

相生市 中塚 礎石

黒髪がはさまっていた借りた本

蠅たたき殺意はないが殺さねば

風化した噂が届く僕の耳

定年の手持ち無沙汰が爪を切る

紫陽花の色がきまらぬ梅の雨

岡山市 井上 柳五郎

建て替えて生家の匂い消えてゆく

香煙が拝むこちらへむいてくる

探しものふたり重なる物忘れ

カバン背に背囊重い遠き日が

今生きる精一杯の蟬しぐれ

倉敷市 田 辺 灸 六

ワッハッハ娘五十の誕生日
夏バテを防ぐ昼寝に精を出し
老いの肌汗には縁のないやつれ
生きている限り供養の墓掃除
寅さんもつらいつらいと旅発ちぬ

岡山県 小 林 妻 子

身を粉に登る坂道喜寿傘寿
自由化の米もおんなじ値でつくる
言い負けて尻尾巻いてるのがくさい
土壁の存在価値を垣間みる
墨糸のゆがむ話を聴かせとく

岡山県 山 本 玉 恵

芽の出ないまま振ってみる種袋
宿命と手を組んで行く白い道
脇役も主役も果たす母の椅子
佳い事に出会った靴の軽い音
何回も鏡を拭いて来た命

岡山県 二 宗 吟 平

柳友が私の句碑に花を立て
何も彼も鬻り昼寝の閑がない
着飾って訪えば貴方はどなたです
鶯も夏ばけしたか藪に来る
クーラーをつけてわが部屋いつも春

岡山県 岩 道 博 友

謝罪する嘘の言葉が綺麗過ぎ
長生きの本が目立った古本屋
蟬しぐれこれも讃美歌かも知れず
夏季バーゲン余生の実力買って来る
墓掃除 黙って日曜日に出かけ

広島市 森 田 文

昆虫好きが虫けらのごと原爆死
十五歳いい子だったよ原爆碑
あれからは母といっしょか碑へ祈り
亡ぶかも知れぬ地球へ身を委ね
会えたならいっしょに歌おうアベマリア

呉市 横 田 英 詩

七十路坂 白寿に遠し息を抜く
枯れすすき元氣を出せと言われても
ご自由に噂をしておと遺影笑む
こつこつと貯めても浚う波がある
爪剪ってさてとやる気の背伸びする

廿日市市 林 野 甦 光

研修会帰りの酒にみな忘れ
機嫌直す鏡が床に置いてある
どこのお方か僕に手を振る電車窓
古里に近い所へ巣を構え
物申す人 裁判所繁盛記

竹原市 小島蘭幸

古い机にワープロが置いてある

ハガキ待つあわてることはないだろう

美術館の下で句会をしています

待っているうちに眠ったことがある

古本市で一冊買つて来たところ

竹原市 森井菁居

人生は奇なり最後は亀が勝ち

無一物だったに気付く野のけむり

アトランタ完敗 評論は要らぬ

格式で田舎侍負けている

理路整然とつまらない事を言う

竹原市 岩本笑子

ビーチバレー夫はボールを見ていない

酔っている昔話をまた始め

いい話 雲もにつこり聞いている

驚いているのはムンクだけでない

あと五キロやせよう着たい服がある

竹原市 時広一路

続編も欲しい嬉しくなる噂

あれも無駄これも無駄でも駄馬の汗

からっぽの空が眩しい山の果て

楷行草 朝昼晩と使い分け

二百歳そう見えませんお地蔵さん

広島県 藤解静風

オウムまだ傍聴席をジャックする

基地に背を向けて平和を享受する

毒が消えてつまらなくなったあなた

葬儀屋の頭は次の方に向き

ぜいたくなアビール ビール冷えすぎだ

宇部市 平田実男

闘病の長さへ千羽鶴も褪せ

悪女にもなれる才女にある魅力

制服を脱いでも刑事刑事の目

妻に寝込まれると時間止まる僕

お世辞っていいなこんなに弾む毯

鳥取市 両川洋々

温暖化地球も汗が止まらない

辛口と薄口されど夫婦です

重い日も軽い日もある靴をはく

烙印が疼く背中で見せられぬ

失業の海で大卒浮いている

鳥取市 武田帆雀

怖いのは機械に化した人間だ

目の上の瘤から先に退治する

ここら辺りに敵は居ないぞ羽根を干す

部長より旨い酒呑むキープ棚

鮎を焼き今日一日は留守の番

鳥取市 西村 黙光

虹架けて友と競り合う同人誌
先生と呼ばれ提げてく同人誌
盆供養疎遠な絆手繰り寄せ
汚れてることに気付かぬ色眼鏡
自販機も寝不足だろう熱帯夜

鳥取市 美田 旋風

譲られた席で明治は眠れない
パソコンの世が年寄りを黙らせる
運命と思えば空も澄んでくる
ひと昔前のバズルがふと解けて
城を手にはすれば若さが欲しくなる

倉吉市 淡路 ゆり子

故郷の在る方向は忘れまい
花火ばんぼり夏の祭りの立て役者
わたくしが少し変って家族の和
方言で肩を叩かれ旅樂し

仏壇の位牌の位置は変えられぬ

倉吉市 松本 よしえ

丸い石とても過去など語れない
ふる里に揚げる花火は出来ている
賑わった祭の後は掃いている
夏バテに食べ放題のチラシ来る
浜木綿が咲くころ逢いに行くつもり

倉吉市 米田 幸子

厄介なことは何時でもど忘れる
へそくりを隠した場所もど忘れる
火を点けて引くに引けない負け戦
我慢することを蛙に教えられ
母さんの前では父も空威張り

米子市 林 荒介

石段を数えて登る寺の坂
バラ銭を賽銭箱に響かせる
六十の男盛りを見てもらう
老人を見殺しにして低金利
山門の抹茶に今日を癒される

米子市 林 瑞枝

貧乏を発条にしやさし眸で生きる
友と会う明日が鞆に詰めてある
薬玉の割れて一通の絵手紙
樟脳の匂う確かな影という

シルバークガイド軌道に乗った生き甲斐よ

米子市 石垣 花子

雑巾を縫うのに都合良いミシン
だんだんと戦の嘘が美化される
八月の空シベリアの傷新た
尖った声も丸く聞き取る母の耳
踏み台になる父の背がたのもしい

米子市 金山夕子

アトランタに負けない熱い日がつづく

中途半端に読みそびれての読書中

私を軽く見る人お断わり

そうめんと梅酒で繋ぐ命かな

商い中 貼ってほとほと人恋し

米子市 光井玲子

まだ神々しい私たちの二重橋

Uターンの約束先が見えてきた

鉛筆が尖ると私まで尖る

精いっぱい見るもの探す冬の汽車

生きている塩に大きな恩がある

米子市 青戸田鶴

早起きの私は朝が大好きだ

不揃いの眉を毎朝かいている

本心はなかなか見えぬ森の中

一枚の絵と向き合って長い時間

完璧な友が時々うつとしい

米子市 白根ふみ

天青く袴りは遙かきのご雲

炎昼の形而下にある羽化のとき

八月の老母 水琴窟に入りびたる

百合の雄しべを切つてみんながさみしそう

幼稚園 花壇が炎える夏やすみ

米子市 中井ゆき

秋が来てまた人間が好きになる

酔ったかな月も銀河も下りて来い

バッグ押えピザをかじったサンマルコ

砂山の孤独を海が抱きよせた

泣きすぎたホクロが少しくすくなる

鳥取県 新家完司

朝寝坊しながら街の音を聞く

雑草も油断している雨上がり

嫌われているのか誰も叱らない

俺に似た奴が仁王の足の下

日記には一行今日も暑かった

鳥取県 谷口次男

ガス灯が郷愁そその茜雲

温暖化怨み骨髓北極海

運のいい方角さがしサイ投げる

きれいごとっぱい並べ人集め

弱虫も威張った奴もやがて骨

鳥取県 西原艶子

ほんのりと汗の匂いが届く位置

叫びたい言葉を胸に詰めている

花生けてみても消えない今日の鬱

首切ると言われた日にも句を作り

いい風に口笛吹いてみたくなる

鳥取県 乾 隆 風

可燃物になるまで村を離れない
あいまいな指の握手はよく判る
柿の木に賞味期限がぶらさがる
ゆっくり煮こむ黒豆の味が好き
人妻に頼ると悶着がおきる

鳥取県 乾 喜与志

噎れごえ張り上げている万歩計
愚痴を言うようにお経を上げている
祭り太鼓うっかり歳を忘れてる
外遊に巣立つ曾孫を祝福す
洩垂れも今卒寿なり白寿なり

鳥取県 幸 家 単 車

美しい女にバトンタッチする
高級車乗り回しても銭はない
他人様の都合は聞かぬ神仏
今日の夫晴れているからねだろうか
高速をゆっくり走り叱られる

鳥取県 石 谷 美恵子

賑やかな客へ忘れた偏頭痛
運のない汗を夫婦で慰める
なぜなせと問う澄んだ目に狼狽える
小さい乱マンネリ防止剤にする
麒麟獅子背に伝統を負うて舞う

鳥取県 津 村 八重子

いい心抱いた素顔は美しい
熱い脈とくくと打ついい素顔
もつれ糸ほぐし昨日を忘れよう
食べざかり箸も器用におどつて
好ききらい言ってもくもく食べている

鳥取県 石 尾 かつ乃

ひと夏を頑張りました夏帽子
ほどほどに粧して残り火を燃やす
里帰り荒れ田が見える秋淋し
裏切りを知らない影がついてくる
双方の鼻ちよんぎって和解する

鳥取県 田 村 きみ子

向日葵もわたしも少し夏疲れ
頼むことばかりで神を困らせる
笑い合う友はわたしのエネルギー
逃げ道に母の笑顔はきつとある
秋祭り顎ゆるませて孫を抱く

鳥取県 土 橋 睦 子

野仏のうしろに母の影がある
簡条書きの世渡りでした父の背な
孫の手も届かぬほどの五十肩
地藏さんの片目が光るラブシーン
音痴でも小学唱歌なら歌う

鳥取県 岩崎 みさ江

一日を大事に生きると灯明
白い歯が抜け落ちてから好々爺
親看取る影かもしれぬ窓灯
溜め水に母の化身か赤とんぼ
野仏もいっしょに濡れた黒い雨

鳥取県 さえき やえ

この家継ぐ孫のあごひげたのもしい
電話のお礼 長い手紙を書きました
女医さんの言葉にささるものがある
愚痴る酒 呑まない人とのんでいる
やがて来る終の日までの長談義

鳥取県 上田 俊路

さよならの数だけ愛に強くなる
ご先祖のロマン相聞歌に惚ぶ
どの花もひと癖あつて迷わせる
銀行の看板かえるやわらかさ
沖縄の海から届く鎮魂歌

松江市 柳 楽鶴丸

九月生れが一番美男美女
一番おいしい妻と飲むビール
この世では自筆ワープロは天国で
三途の川下ればどこの海へ出る
悪妻になるも愛情かも知れぬ

出雲市 竹治 ちかし

算数も出来ぬ子供が持つ財布
死に際を考えている老母の暇
記憶などない大連にある想い
ああ言えばこう言う奴の無責任
カラオケに行つて酒だけ飲んで去に

出雲市 伊藤 寿美

一旦緩急まだ蔵にある蕎麦袋
ムーミンの大好きな孫と絵本読む
五分五分の手術へ老姉は掌を振つて（大動脈瘤手術 二句）
生還の老姉が握りかえした掌
寒々とした法廷の偽証罪

出雲市 吉岡 きみえ

健やかを喜び合える友に遇う
平和の灯じつと見守る千鳥城
ネクタイを締めると映える旦那様
嫁してより畳半畳の座りだこ
会者定離またも計をきく流れ雲

出雲市 岸 桂子

孝行も出来ず身替りにもなれず
母の壺底が深くてとどかない
置き去りに慣れて可憐な水中花
束の間の命と思う生タマゴ
よその猫 愛の証を産みに来る

出雲市 小玉満江

しっかりと塩をきかせて子を送る

夏バテをせぬようコンと生玉子

「戦友」を全部唄って亡夫偲ぶ

原爆の語りべも古い国平和

落人のルーツはらはら萩こぼれ

島根県 堀江正朗

生き抜いた恐さを思う長い闇

雨降らすこと忘れても風は秋

妻の掌のぬくみ握ったまま眠る

よそ事に聞いて我が身を振り返る

いい月だそうな窓から観る妻と

島根県 堀江芳子

頑固さにちらつく幼顔いとし

すぐばれる ないしよないしよを孫とする

川柳らしきもの書き耐えている疼き

喜寿そこに望み小さく刻みいく

謎めいた言葉眠れぬ夜のクイズ

島根県 小砂白汀

蟻地獄 走れば走るほど地獄

風上へヨットが走る物理学

こんなにも真珠ちりばめ蜘蛛の網

流灯は核へ抗議の行列か

こんなとき力を貸さぬブルータス

島根県 西村早苗

日に二度を掃く清張の碑ねんごろに

稲を刈る無駄な会話はないことに

十円のお魚が二ツ夏越えた

変りばえせぬ染めかえた夏帽子

沈思黙考ことさらに早い秋

島根県 松本文子

魂を探す本屋のずっと隅

出雲弁 優しい顔を返される

独りで見るもの名月もモノリザも

哀しみの更なり 遠き祭り笛

カブト虫おとこはすぐに角を立て

島根県 藤原鈴江

幼顔残して孫は新夫なり(孫成婚)

美しい想い出たぐりたぐり生き

沖繩に散りし夫を偲べども

湖南病院老いた私の休憩所

これからの余生せめても美しく

香川県 山地マツエ

明日こそいい日にしようバラ活ける

扇風機クルクル避暑地に縁がない

泣いているらしい受話器を置きかねる

老姑がまた無口になって経上げる

窓際に居ても遠慮のない意見

香川県 川崎 ひかり

あるがまま時の流れに身を置こう

真実の姿見て欲し蝶の羽化

真実を知っているから落着かぬ

繁栄を支えた蟻の底力

罪深い話だ他社のボーマス日

松山市 白石 春 嶺

傍目から見ると楽でないピエロ

家計簿が内出血で悩んでる

病室の寝息もチェックする天使

永田町の本音測定器が欲しい

逢えるかも知れぬ予感のペンを持つ

西条市 片上 明 水

もう一度嬉しいことは聞きかえし

花つけているから草が見逃がされ

空財布いまだに枝で揺れている

ご詠歌も経も木魚にピタリ合う

人の金だけどひととき夢を見る

今治市 越智 一 水

お若いと言われ幼稚と答えとき

百姓はぬぐいぬぐって汗みどろ

交通違反ミミズ堂々やつのけ

風鈴は鳴っても世間住みにくい

風鈴よ自分の力でなぜ鳴らぬ

今治市 野村 京子

さわやかな少女へ仮面はずかしい

想い出へ古い鏡を磨いてる

信号の青に気を許さない犬

線香花火と行きたい村がある

貧しさをのぞかせたりはしない紅

唐津市 田口 虹 汀

壁に来て豆秋の本出して見る

冷房はなるべく避けてかき氷

何もかも五十点なら好い米寿

蘊蓄の手毬が弾む空の青

肩腰に湿布貼り貼り越す猛暑

唐津市 仁郎 四郎

良識に届かぬ知識溜めている

九十の枢賞状みんな詰め

生徒数百卓球に優勝す

成り行きを見ていたらしい賛助金

脇役の代役そこで芽に気づき

唐津市 山口 高明

故里は鍵屋造りの藁の家

横文字で書かねばならぬ子の任地

八月のトランペットは泣き上戸

違反車のバックミラーで髪を撫で

良い婿が来たと他人が褒めてくれ

唐津市 浜本 ちよ

お迎えの準備哀しやわが妹よ
だらしない山茶花 椿見習おう

数多の修羅乗り越え頂上見えて来た

日々新花は次々交代し

万緑に時々目にも深呼吸

唐津市 山門 幸夫

将を射て馬連れ戻る未熟者
嘴はまだ黄色いよ句集繰る
空高く煌く雲の力瘤

灼熱に耐えて迎えた青い空
女湯の窓から見える庭師さん

唐津市 山門 タミ

海辺ではパラソルの下羅漢様
土用丑ボチもうなぎの頭あり
艶々とうなぎ焼いてる若夫婦
油蟬ワシワシ上げる温度計
嫁や娘にいたわり受ける夏休み

熊本市 永田 俊子

球児入場 揃わぬ歩調にはっとする
かぶと脱ぎたい時もあろうに甲虫
白い錠剤がころがっているドラマ
活断層の上でとつて腕相撲
啼くことは生きていること蟬しぐれ

弘前市 蒔苗 果林

昼寝するそよ風を老い信じつつ
疲れきった僕から僕が逃げたがる
無味無臭の白湯が美味しい雨欲しい
麗しいことに触れたい今日も徒歩

弘前市 肥後 和香子

わたくしの男と言わせる 夜は降る
秋の気配うなじで感じる四十代
いざという時恋はバカ力
マドンナも酔う時がある屋台裏

弘前市 相馬 銀波

立秋の日から除袋の桃りんご
出穂日記 秋への土台組み立てる
傾穂だ秋の期待を脹らます
児と指を赤いりんごに指を折る

弘前市 須郷 井蛙

成人病とうとう粗大ゴミになり
残りもの炒飯にして生き返り
白旗は見せない母の帆前掛
朝野球プロに負けないユニホーム

黒石市 千葉 風樹

青空と苺が好きで父になる
ネクタイの真ん中にあるスベリ台
目隠しをして欲しい日は亡父を恋う
あの日以来 君の筈を待っている

十和田市 阿部 進

土いじり好きな娘が嫁にくる
こだわりを捨てあるがまま生きる倅
我が家の倅 米寿の母がまだ元氣
初デート遊ぶつもりが遊ばれる

十和田市 小笠原 敏人

墓参り祭りの如し人の群れ
墓参り珍しくもあり妻の家
惚けぬよう働きづめでエンドレス
芝刈りの音が熱さに拍車かけ

東京都 山口 新子

来客数ゼロの本日雨しきり(店オープン
立ち仕事 座る時間の長いこと
新盆の父へ無沙汰の手紙出す
荷の重さ負うまで軽いはずだった

静岡市 安本 晃 授

同期の桜またひとり減る戦後録
その先は誰も知らない天の川
是々非々で生きた父には四季はない
一日の錆を落として飲む寝酒

富士宮市 渥 美 弧 秀

母を追うカルガモ水に馴れ初める
音楽と詩 富士と奏でる終章よ
梢ゆれてしみじみ時の流れなど
寝転べば涼風の中鳥うたう

大阪市 松 尾 柳 右子

息ぬきのつもりパチンコ勝ち出した
人生のきめ手にお金つきまとう
大嫌いな視線合ふなり吠えられる
秘密なしの夫婦にもある過去の事

大阪市 町 田 達 子

海の日の夕日 天保山で見てる
ビール党を魅惑 雷雲もりもりと
空も川もドンドコ船も燃えている(船渡御)
盆行事へ外野のママもお手伝い

大阪市 本 間 満 津 子

自信過剰の鼻を老化にへし折られ
頑張るという字を私の辞書から消す
病床二十日 学びしことの多かりし
越し方を思えば総てありがたき

大阪市 藤 田 頂 留 子

ゆで卵かしてごらんとむいてあげ
貧富など言わぬ焚火の火が温い
余命表見ぬことにして夢芝居
飽食へ0157の釣り書き

大阪市 井 上 白 峰

雑草の意地 倒れても天を向く
背伸びして新世紀をも見る構え
日は巡る兎小屋にも雪月花
頼られて頼って回る夫婦独楽

大阪市 清水絹子

雲流れる今日あるように明日もまた
お見舞いに行っておそわる健康法
寡婦の意地 一本の箸串にして
フルムーン宿も着替えも妻まかせ

大阪市 奥田良子

還らぬ機 知覧の浜に今も立つ
夕立にひまわりもまた生き返り
お写経に心洗えずなお暑き
好ききらい似たもの夫婦氣にとめず

大阪市 川原章久

霧吹いて炎を無理強いの蜚籠
夫婦仲 古茶には古茶の味が出る
汗かいて踊る阿呆が暑さ除け
浴衣 下駄 日本よいとこ盆踊り

大阪市 中田あい子

夏休みわやにしましたO一五七
足病む身 足ばかり見たアトラクタ
リストラと聞いて思わず首に手を
町を行く軍歌ちよっぴりなつかしい

堺市 柿花紀美女

雑音が多くて余生ゆすぶられ
ふる里の心を許す波の音
大阪弁で友の毒舌あたたかい
人生の節目節目をよくぞ越え

堺市 一瀬福一

画まんだら極楽の風法念寺
身の程を知れと期日の手形くる
死に触れる対話さらりと身をかわす
秋風に稲穂の波のサーフィン

豊中市 月原方郎

飽食の盲点ついた大腸菌
ランプの灯丸く囲んだ影法師
やんわりと言われた皮肉忘れない
勲章を素直に受ける大博士

豊中市 湯浅馬洗

これからの四年見詰めるやわらちゃん
サングラス掛けて一日吾を捨て
気持だけ若くて体前のめり
書いた字に愛想が尽きる芳名簿

豊中市 三宅つえ子

再会に躓きそうな車椅子
おばはんで誰のことかと車椅子
長生きも誤算で見栄は捨てました
青鳶と夏の暑さを楽しんで

箕面市 椎江清芳

鍋の底生きる浅蜷が潮を吹く
もう十年あと十年と生きる欲
辞書にない新語先生持て余し
独り者 猫と孤独の四畳半

吹田市 栗谷 春子

妹と話すや犬が割って入る
桃ひとつ話はつきず盆の月
ちぎれ雲ひとつひとつは想い出か
再会にひとしおつのる淋しさは

茨木市 島元 ふみ

美しい傘寿明日を励まされ
真夏日の町にこたりの音もなく
一日一個りんごお腹の薬とし
今よりももつさり見える古写真

高槻市 井上 照子

さくらんぼ皿に幸せ盛り上げる
こうなれば陽気に命樂しもう
懸命に生きて横道ちよつと見る
自己に勝て起きる朝には喝唱う

高槻市 芦田 静江

瓦礫から這い出て妻の舵の中
笹揺れて叱られにゆく羅漢寺
南禅寺 豆腐に呼ばれ秋の道
哲学の道さりげない茶の心

守口市 森川 まさお

奥の院 地獄極楽遠い道
古い店デザートに出る真桑瓜
石垣の隙間の草をなぜ抜くの
檀林の女王の墓は苔と羊歯

寝屋川市 富山 ルイ子

淋しさをか細い声の電話口
来てほしい母の言葉に逆らえず
病院のお喋り病氣翔んで行く
母の古い我が身の老いをだぶらせる

寝屋川市 籠島 恵子

めいめいが生活百科読む家族
元氣だと今日は思われたらこまる
助手席で起きてるふりをしています
ときめきの中でよぎってくる不安

枚方市 海老池 洋

酒が好きだったと見える兵の墓
おしぼりで不快指数を拭いてやる
台風一過しわくちやになる森の顔
万歳三唱 励ましも冷やかしも

枚方市 八田 敏

さるすべりあの八月がめぐり来る
また来ると言っで見舞はもう来ない
生き甲斐を思う暇なし妻の世話
兄が逝くいくさの語り部またも消え

交野市 福崎 しげお

時差なんのテレビ機軸のアトラクタ
原発をノーと言いつ切るさわやかさ
遅々として五十一年核廃止
石油出ぬ国に車が溢れてる

東大阪市 安永 曉子

いろいろとあつてはならぬ深情け

鍵かけぬ家は幻ダムの底

宝箱の亡母の便りを出して読む

逆らわぬ孫なるほどに良く育ち

東大阪市 指宿 千枝子

ちらちらと見てる目好きな人が居る

シャイな人好きなお酒でよく喋り

駅のベンチ人ひと人のウオッチング

一日を市場に行つただけのこと

松原市 玉置 重人

暑いな暑いなと言ってくるビール

階段を仇のようにして上がる

同居してああクーラーが効きすぎる

僕が辞めても地下鉄は走つてる

藤井寺市 福元 みのる

父知らぬ吾に欠くるは父の威厳

今にして才能の差と努力の差

舌肥えて値の張る方を孫選ぶ

弁解がしどろもどろのお上どの

藤井寺市 高田 美代子

小器用で道具屋筋へ足が向く

段取りを狂わす雨が上がらない

しらじらと明けて戦がはじまりぬ

うっかりと揉める話に参加する

八尾市 生嶋 ますみ

いい汗がうまい麦茶をまつている

待合室軽く会つたり別れたり

同居して流れのままに添うかたち

朝市の鰯の眼には海がある

岸和田市 高須賀 金太

あの味はどこへ消えたか真桑瓜

句ができん前頭葉も狂つたか

広島 長崎よ八月の苦い風

頭蓋骨にギンギン響く原爆忌

岸和田市 原 さよ子

残り火を温めあつて老夫婦

すぐ顔に出て悪女にはなりきれず

脇役でいたい私に役がくる

あれもこれも持つて帰れと包む母

岸和田市 古野 ひで

この猛暑少しのずばら許されよ

脳味噌が渴き始めた物忘れ

子測よりはるかに永く生きてます

お迎えの花駕にのり母逝きぬ

岸和田市 井 齋 一 齋

匂わない造花へ蜂も寄り付かぬ

贅沢な暮らしになれた無神経

留学生金髪の娘を連れて来る

新党へふらふらしてる顔が寄る

貝塚市

池田 寿美子

マンガ読む子等にまかせせる来世紀

筋通し静かに燃える人を恋う

インパクトにびくともしない蓮の露

寅さんのキラッと光った自然体

和泉市

岡井 やすお

空襲はなくても地震 菌が来る

JRキセル退治に二百億

狭い檻 動物ヒトのエゴに泣く

八月八日野球する幸見れる幸

富田林市

池 森 子

一匹の蟻が格闘した正義

輪を描いてみーんな丸くしてあげる

真っ直ぐに返事を返す青林檎

日々好日 笑い袋が膨らんで

河内長野市

植村 喜代

夜中音 遠くで消して救急車

簡単にぶつつり切れる脳の怖さ

少しよくなれば人間に戻る

神様のお目に届いた私の心

大阪府

靱山 隆

十月に入り十月の酒を選る

秋の旅十国峠から箱根

緑日の香りお醤油焼けている

緩急の自在ふたりは心得る

大阪府 八十田 洞 庵

チェーンソーの音が林の叫び消す

てんのじ村で稽古をつけてもろた人

門柱に居間に亡夫が生き続け

ノラになる靴は新品履いて出る

西宮市

門谷 たず子

老いと道連れ亡母の偉さを思う日々

古里の野仏の前 荷を下ろす

遠く近くの火振り太鼓に夢破れ

夫はクイズわたしは桃を剥く平和

西宮市

西口 いわゑ

大空にパワーをもらう手を広げ

すんなり伸びた少女の足に風遊ぶ

逃げ出せばなおハードルが高くなる

海の夕日と只ひたすらに歩いた日

西宮市

菊池 トミエ

風呂敷の解けてころがる大西瓜

西瓜食う顔そっくりの親と子が

石仏が亡父に似ているいかり肩

カンナ咲く焼けつく街の医者通い

西宮市

牧 渕 富喜子

煩惱やまだ鍵束に鈴つけて

魂の置き所なし画布の白

八月よ広島発の鳩が飛ぶ

無駄なもの何一つなし爪を切る

西宮市 池田善守

おしぼりをタオルのように使う人
ゆつくりの仕切りの中に散る火花
ピリオドを打ちそこなって三次会
蚊帳の裾ゆれてうちわの母が居る

西宮市 刈田泰司

金借りて大きな話して帰り
金借りに来ている方が高級車
借りて来た言葉は後が続かない
貸し借りをどうつけようか雨が止む

宝塚市 吉田笑女

母と子の想いたち切る飛行雲
子に乗せた飛行機ガーナへ旅発ちぬ
筆まめな友が気になる片便り
何時見ても心が晴れる黄門様

宝塚市 丸山よし津

正体のわからぬ事件また起こる
複雑な世をすいすいと泳ぎきる
虚実相半 女優の書いた半生記
老いて知る間を置くことの大切さ

伊丹市 小熊江美

パソコンに夢中の時だけ夫静か
修羅越えた母には文句など言えぬ
艶消しの話ばかり老人会
捨て切れぬ思いで溜る古着かな

川西市 松本ただし

老人の資格みたいに医者通い
腹八分言いたいことを噛み直す
負の遺産ばかり増える世紀末
泥舟に何度も乗ってへこたれず

奈良市 宮口笛生

酒ビール夏痩せ知らず夏を越し
0157子達つまらん夏休み
石に水しつかりとやる盆の墓
豊作を約して夏が照りまくり

奈良市 天正千梢

手を病んで受話器重たいものと知り
余花一輪 何か私に言いたげな
残雪が山の深さを物語り(日本百名山)
うしろの正面だあれシャッターチャンス見のがさず

奈良市 米田恭昌

熱湯のシャワーに耐えている包丁(0157)
カチワリも熱気に溶ける甲子園
寅さんが雪駄を履いて行つたきり(寅さん 二句)
均等法 男はいつの世もつらい

和歌山市 玉井豊太

好調な波にのつてる腹の減り
幸せのパリッと洗う白いしゃつ
目の前を目映いほどに夏の胸
のんびり屋を親の翼は持ちこたえ

和歌山市 木本朱夏

果てしなく飢えてカインもコンビニへ

男の傘を返してからの道が長い

見送った背の記憶もあやふやな

鷺草の手弱女ぶりを見習わん

和歌山市 田中みね

ありがとうそして元気で居て欲しい

無条件で好きだと言えるひとが居た

茄子胡瓜いろよく漬かり朝が来る

お言葉ではございますがと思ふ事

和歌山市 玉置当代

艶のあるルージュわたしの恋の彩

生きるため蟻になります炎天下

泣き笑い人生 寅さんありがとう

寅さんのいない正月は寂しい

和歌山市 岩本美智子

ひまわりの燃え滾ってる八月の忌

広島も長崎も忌は蒼く澄み

平和日本 和食器の美をテレビから

雨戸繰る一瞬浸る蟬時雨

岡山市 時末一灯

気の細り人生の車庫近いのか

昔なら有無を言わせぬ奴に笑み

焦点の違う人からもらう知恵

遅まきに健康が沁む骨の髄

岡山市 花田たけ志

誰もする違反が気になるま正直

昼風呂で余生の汗を流す幸

洗うほど中味も悪に長けて来る

余所事でない何んと出る基地裁き

岡山県 荻野 鮫虎狼

老妻を再度見直す夏姿

自主規制 古いネクタイ締め直し

名無草 花一輪で生き延びる

貧乏に慣れて二人の旅日記

岡山県 矢内 寿恵子

寺の鐘鳴り止むまでは善人に

音程がずれた夫婦の隙間風

明日の絵に泣いた昨日が納まらぬ

落日がせわしく消していく余生

岡山県 福原悦子

根回しが過ぎて反旗の風にあう

仏にも鬼にもなれずおんな道

よちよちの裸笑顔の手で誘う

心まで繕い合っている夫婦

岡山県 江口 有一朗

何処へどう腹を立てるか考える

十四億の脳細胞をもて余し

私より不幸な人の背を拝む

野菜畑に農夫足音聞かす朝

岡山県 大石 あすなろ

鳥取市 春 木 圭一郎

笑い袋の種がしめつて笑えない
絵葉書を書いてわたしの草枕
夫婦して堪忍袋につき当てる
自信過剰バラの蕾が天をむく

竹原市 古 谷 節 夫

消夏法 写経の墨を濃ゆく磨る
ご先祖と絆を戻すお彼岸で
兄弟の絆が揺れる相続で
ほどほどの酒で明日の夢を見る

竹原市 石 原 淑 子

炎天に命をつなぐ冷やつこ
秋の天まだ翔ぶ夢を抱いてます
恋心月には見せぬおみなえし
白百合を笑顔のうれしい娘にもらう

柳井市 弘 津 柳 慶

仲よしの彼があっさり裏切つて
退院後は一緒に旅行約束し
風呂焚いた事懐かしい外は雨
台風がそれで真夏がぶり返し

美祢市 安 平 次 弘 道

ねぎ坊主お前は少しはしやぎすぎ
変換キーあつと言うまに消えちゃった
花咲いて散って謙虚さ教えられ
その先を言うからバカにされるのだ

スナックへ行けば元気になる私
気に入ったママがいる店だけへ行く
キープしたボトルへ一句書きとめる
スナックで息子と嫁へ乾杯だ

倉吉市 野 口 節 子

火遊びのめっぽう好きな血が騒ぐ
なるほどと思うお灸の跡がある
世渡りに絹の衣が邪魔になる
ねじれ草 堪えた姿で咲いている

倉吉市 最 上 和 枝

鬼も蛇もいる世渡りがおもしろい
石橋を高下駄穿いて世を渡る
斜陽の街に輝いているパチンコ屋
スポーツの祭典眠い日が続く

米子市 木 村 富 美 子

父の背に汗を流した河がある
台所 昔 女の城でした
泣く時は蛇口をあげた台所
手伝って邪魔にされてるお父さん

米子市 澤 田 千 春

かたつむりつらい噂に耳かさぬ
突風に絆ふかまる縄電車
なにごとくもプラス志向に替えて生き
捨てた鏡のぞきこむのは空の青

米子市 寺 沢 みど里

追肥して匂を先取りして置こう

孟蘭盆会 酒はほどよく冷えている

箒目をつけるに丁度よい晴れ間

宵寝するわたしに辛いアトラント

米子市 野 坂 なみ

アンパンもいいがケーキを待つ地蔵

ナイフ フォーク 何が匂だかわからない

気がつく私の汽車は西へ行く

向う岸わたしの浜で見える日も

米子市 茂 理 高 代

知らなんだ貴女がわたし好きだとは

笑わないから皺ばかり多くなる

恐れまい何時か来る日の暗闇を

呆けるより化けて真つ赤な服を着る

鳥取県 林 露 杖

半世紀痛み新たに原爆忌

かたつむり殻の哀しきまでに透け

梅干を欠かさず八十路暑に耐える

まだ杖は要らぬバイクで散歩する

鳥取県 羽津川 公 乃

病根を土用干しして断ち切ろう

体当りすれば意外と薄い壁

我慢した過去は語らず陽に当てる

長電話友は健気に独り住む

鳥取県 黒 田 くに子

音もなく流れを替える嫁がくる

おとなりは流行色の家建てる

年金の出る日いいそ出ていった

年金の財布プライド持っている

鳥取県 西 川 和 子

食材を操る主婦のロマンかな

冷房の部屋で鼻水止まらない

大切な人としている口げんか

低い鼻広げ勝利を誇示してる

出雲市 板 垣 草 丘

盆供養 田舎の珍事聞きながら

摂生を怠け者だと見る人も

道聞いた家から妻が出てこない

台風が白菜まけとやって来た

出雲市 板 垣 夢 酔

ホテルから出勤させるはしご酒

貧しさになれたか妻の下手な唄

独り寝の男を笑う月明り

行き違い列車で帰る酔いつぶれ

出雲市 園 山 多 賀 子

掴みたいものが掴めずパーを出す

頑固さも取柄で惚けも寄せつけず

剩え目出度く出来て敵がない

肩の力抜いて快哉余生樂

出雲市 久谷 まこと

短足の歩幅は数でついて行く
ありがとう一度も聞けぬ老夫婦
旧姓で呼びあう話いい笑顔
旅終わり薬袋も空になる

出雲市 富田 蘭水

一隅を照らす一步の灯を信じ
華燭の典これがすべての世であれば
スマートなさざぎと畑でよろこびを
ピカドンも風化しそうね夾竹桃

出雲市 石倉 芙佐子

女として真剣勝負弁える
夫婦塚平和な眠り掘り起し
なるほどと得心がつく長者様
表面は美し過ぎる秋の月

出雲市 小白金 房子

土用ばし梅減塩の香を貰う
星満ちて母子で和む涼み台
孫料理ロールキャベツを盛り立てる
原爆忌思い新たに書く便り

島根県 佐々木 鳳笙

雨乞いをして横たわる野菜達
耐えてきた磯辺の松の怒り肩
姿見へ気取って見せる姉妹
幸せがこうも続くと怖くなり

香川県 工藤 吟笑

栄転は母住む里に近くなり
ナースの胸見てる間に注射すむ
当てつけに死んでは意地がなさすぎる
バアさんだけにだけはホントに頭が下がる

松山市 丹下 美津子

輪島塗 嫁に土産のペンダント
ボケ予防 皆熱心に夏季講座
0157大阪に住む娘を思う
八月十五日痛さがもどる兄の足

高知市 北川 竹萌

夕顔に咲かず落花す花もあり
程々に木陰憩うて炎天下
祖父善意 石ころ除けて道諭す
よさこい踊り孫の自慢へついて行く

高知県 赤川 菊野

土佐の夏 鳴子の音で炎えつきる
編直し糸糸は過去を語らない
一筋に生きて貧しさ恥とせず
苦勞した掌をふとこころで温める

北九州市 梅田 宣司

浮動票などと言うから棄権です
足を崩して下さいそんなおもてなし
禁酒から外で飲むこと覚えたり
静けさが重くて声を出してみる

八戸市 島田昭治

これからは泣くまい句を作れ句を作れ
句にかける情熱燃やせ果てるまで
おならまで同室のよしみで我慢する

大阪市 寺井東雲

水上スキー エアバックいる遊泳者
ピアホール コギヤルが泡を飛ばして
一流の板場は句を押し立てる

大阪市 小糸昭子

無駄話少し酔うてる怒ってる
ああ家が一番良いと言ってくれ
目の前にリモコンずらり混乱す

豊中市 松岡久留美

老いた祖父友の訃知らず返事待ち
清潔なシャツで人柄惚ばれる
石垣の積み目に萩が顔を出し

寝屋川市 平松かすみ

誕生日しゃきつとしろよ影法師
自由化にサービス品を付けて米
サークルを休むとくしやみ続けさま

寝屋川市 北岡波留吉

正直を北山杉になぞらえる

人前では妻に勝利をゆずつとく
夢にまで妻の手を取る一人旅

枚方市 二宮山久

内定の息子ようやく高いびき
初孫の話はないぞ里帰り
病む僕へ中元届く缶ビール

岸和田市 藪野けい子

マドンナの無茶をおおめに見る祖父
市役所の食堂から消える冷奴
寅さんが逝く肺ガンに力つき

宝塚市 上田佳秋

冷しソウメン亡妻と一緒に盆の膳
マドンナを残し寅さんグッドバイ
年金へ不安が募る消費税

奈良県 長谷川春蘭

新茶を甘しと思う齢になり
朝発ちて夕べ異国のつばくらめ
夏ふとんきちんと掛けて老いたもう

鳥取市 岩原喬水

夕立を浴びても地蔵あわてない
我が家には貧乏の木が植えてある
老いてなお男盛りだまだ燃える

鳥取市 前田一枝

変りばえせぬ椅子なれど待つて居る
星が降る今宵は星も群でふる
転勤の尾灯の雨が物淋し

自選集

月 原 宵 明

辻 白 溪 子

喉仏 男はここで耐えている
割烹着 貴男にこれから着て貰う
風の日パチンコへ行く漁師町
盆帛省 茶髪が村を驚かせ
大売出し何度潰れたこの会社

野 村 太 茂 津

小 西 雄 々

筆忠実に妄想を書く銷夏法
支離滅裂五体噴き出る汗ばかり
正座瞑目 妄想楽し銷夏法
ナツメロの流れ妄想聞き流す
補聴器を外し手の内読んでいる

波 多 野 五 楽 庵

藤 村 女

花石榴 風の噂に揺れ続け
立ち読みの医書に悩んでいるのです
孤独から孤独へ酒を注いでやり
鳥の羽根ほどの悩みにひしがれる
追伸の中で寂しくなる手鞠

伝言板少うし嫌味書き添える
京料理風味ただようすだれ越し
みそ汁の味に年寄りうるさすぎ
困っても義兄に頼ったりしない
責任が軽くてどっちへでも転ぶ
赤い帽子の欲しいシナリオ持っている
しやれこうべ怨念があり眠られず
骨壺にかなしい嘘を満たしとく
浴衣の蝶も飛び出してみる盆踊り
親しさをよそおい疑似餌まいてくる
おだやかな寝顔 妹先に逝く(妹を亡くす)
ひまわりの影うつむいて風も秋
秋ざくら四十九日を越える坂
休閑地 泡立草の波が立ち
故郷の祭ばやしを恋う月夜

正 本 水 客

ひたすらにひたすらに自分をおさえとく
木洩れ陽の下のこみちをいとおしむ
母からの手紙をためて淋しがり
叱られるたのしさを心の底におぼえてい
独り芝居とだんだん自分でもわかり

野 田 素 身 郎

秋の風障子に穴があいていた
何時でも何処でも迷惑かける後遺症
退院近く暮の好敵手に巡り合い
参観日孫はやっぱり内弁慶
クロスワードパズルここは愚妻の知恵を借り

黒 川 紫 香

うつむいて歩いてるのに蹴つまずく
尼さんの素顔はいつも童だな
五十年目の出会いは亡妻の妹と
さよならのえくぼにふっと亡妻の顔
縁側を開けっぱなしにしてる秋

藤 井 明 朗

一日を無事もつたいなし合掌
豊作の兆しへ安値動き出す
金運はなかった長生き授けられ
過疎型の汽車見えて思い出は夢
地球の隅に平和を乱す音絶えず

金 井 文 秋

ガタガタになった話で古い二人
頑張つて暮しても古い迫る
酷暑の街へ二の足を踏む八十路
体力の弱りを知つた熱帯夜
医療費はもう要らぬのに置薬

久 家 代 仕 男

斐伊川の淀みへ愚痴を捨てにゆく
夜祭りに客が蠢く無人駅
かいわれが元凶だなんて洒落臭い
野仏のおつむに止まる赤トンボ
夾竹桃 不倫の仲に似て激し

松 川 杜 的

乾杯はジュースで済ます病み上がり
松の木一本それなりの蟬しぐれ
朝蜘蛛だ そつと逃がしてやりました
パン屋さんの前をチヨコチヨコ子雀が
ほおずきが一際目立ち盆仏

恒 松 叮 紅

成る程と頷いてやる処世術
渋滞を避けた余生のサン格拉斯
家の恥さらした愚痴を聞かされる
うっかりと自動ドアと思いつめ
農耕の生まれで老いの鋏弾む

遠山可住

祭り鮎どの娘も母を継がぬまま
定年へ僕の上には妻がいる
白と黒の間で生きる彩がある
老い二人いやな予感ほ口にせず
醉生夢死 某年某日の煙

小出智子

秋は突然に來て利き腕を掴む
傷口にしみ込んでゆく初秋の雨
言葉の一つにこだわって秋を嫌う
影を重ねて終焉の日を想う
送り火を二人で焚いて旅の果て

小林由多香

原爆忌黙祷の背を汗つたう
熱帯夜節電なんて言うといれぬ
武士という先祖売る田も山もない
うちのよりデカイ看板倒産す
迎え火に初盆の父顔を見せ

高杉鬼遊

お茶だけで恋の手続き終わらない
留守番の土産へそれでいいだろう
老兵にいやな想いの天皇旗
万灯会あの世へつづく火の流れ
日の丸を嫌うわたしのあまのじやく

西田柳宏子

送り火の煙に亡父居る亡母も居る
地藏盆までも子供姿見す
輪の中でチョコンと傘寿照れている
少し名が通り変えてるペンネーム
残暑もう見切りつけたか蟬の声

橘高薫風

雲と征くあれは唐三彩の馬（嗚呼 櫻谷寿馬さん）
襖絵に龍虎相撃ち春の雨
白い雨 半世紀経た原爆忌
頬杖もつかい棒よ秋の雨
クリスマス豚まんを買う雨の街

定本 西尾葉句集

橘高薫風・東野大八 序文

B6判・248頁・布装上製本

頒価 3000円（〒340円）

柳歴六十五年 西尾葉川柳の決定版

発行 川柳塔社

川柳太平記 (221)

川柳の群像

森

東 魚

東 野 大 八

「九月も末の雨のしょぼつく日に、私は帝大前の古書市をあれこれと漁っていた。その中に『俳諧和羅飛多留』という古ぼけた本が目についた。

『旦那、それはバレ句でござんしょう。』

本屋の主人は、それを手にした私の興をそそるかのよう、声をひそめて言った。

そんなものではない、といったとはじまらぬが、とにかくそれを私は言い値で買ったものの、これまでこんな川柳本は見たことも聞いたこともないので、とりあえず入手早々に今井卯木に聞き合せてみたが、『そんな古川柳本など見たこと聞いたことない』との返事に、私の興味は倍加した。とにかくその序文を掲げよう。

『此世に行わる、処の(欠字二字)多か

る中に、柳樽こそめでたけれ、されば予もその風流にならつて、わらいたるの初篇撰としやれ申す。是なることは、いまだ是ならず、たゞ初心小児の腰おしとならん。

安永四年乙未暮春

とある。これでこの本発刊の主意は明らかである。柳樽が好評な売れ行きなので、その類似品とみたが、やはり柳樽の敵ではなく、発刊いくばくもなく消滅した残本らしい。

この書の編者は、東都下谷江月庵慶柳とあり、奥付が失われてしまつて、版元の手がかりはない。一丁十六句割に刷つてあり、その装幀からして柳多留そっくりである。

じっくり読んでいくと、おどけ句、一歩あやまれば天保調のくすぐりに堕すような句がかなりある。詠史が比較的多い。

ふくろく寿 もも引程な頭巾を着
こぜの灸たにしのような目をひらき
最明寺その夜うかうか眠られず
巴御前よく鳴りそつな名なりけり

(以下、二十数句引用されているが略)

これらの句は、柳樽の佳句の部に入れてもおかしくないが、とにかく珍しい古川柳本としてご紹介しておく。(昭和2・12・9夜)
『やなぎ樽研究・第33号』岐阜市柳書刊行会刊・森東魚

川柳史上有名な右は、古川柳研究誌『やなぎ樽』古本の一冊の掲載文である。この筆者の森東魚は、明治・大正期に、世に知られた古川柳研究家であることは衆知のとおりである。

本名栄一。明治22年3月28日東京神田生れ。十七歳で川柳に興味を持ち作句。久良伎の『川柳梗概』が川柳人への手引書となり、大正5年久良伎門に入り、師匠から東魚の柳号を頂く。東魚とはタコのこと。この頃、東京帝大建築科を卒業直後で、叔父の経営する土木請負業有馬組に入社。朝鮮・九州を歩くが、学生の頃は子規の俳句と明星派の和歌に心酔した由。

大正7年30歳の頃、柳人たちと『川柳花束』を創刊。間もなく結婚(夫人菊子)。二年後、

柳友の伊藤夜叉郎と図り、『川柳花束』を『川柳詩』と改め、同志を募って約三年間健闘したが、関東大震災により休刊。

この間、震災による東都復興には、松村組社員となり活躍。このあと麻生路郎の『川柳雑誌』創刊に参加、有力な不朽洞会員で生涯賛助をつづけ、今井卯木の『川柳江戸砂子』の発刊に尽力。古川柳研究家として川柳界から注目される。

この頃、飛鳥組に転職し、名古屋に在勤中、川上三太郎、前田雀郎、塚越迷亭らとJOAK常任川柳選者として活躍。やがて飛鳥組大阪支店長となり、大阪府豊中町桜塚に一家を挙げて移住。東魚の助力により、この頃、『川柳江戸砂子』が発刊され、古川柳研究の第一人者と目される。

大正年間、武玉川研究論稿を、秋農屋、蛭子省一らと、昭和18年末まで『川柳雑誌』に連載。その後、間組大阪支店重役に就任。『やなぎ樽研究』『番傘』『三味線草』等に古川柳研究の論稿を続々と執筆。昭和8年末設定された関西川柳学会の責任者となり、ますます古川柳研究の重鎮たる貫禄を発揮した。

昭和15年9月、五十一歳を迎えるや、北支那間組支店長となり北京へ単身赴任。次男修二君が二十歳で永眠したのを悼み、『偲び草』

を発刊。同20年10月2日、敗戦の北京の騒乱の中で北京北池子の間組支店宿舍で脳溢血のため死去した。享年五十七。

この天下の古川柳研究の大家森東魚来燕というので、勇み立った当時、華北交通参与だった石原青竜刀が、欣喜雀躍の態で筆者を加え、三者水入らずの歓迎の宴を張ったのは、忘れもせぬ昭和15年9月の、北京秋天の美しき北京の盛り場王府井のとある酒房であつた。

「東魚先生、いまお幾つになられる？」

「半百の齡、つまり五十一歳です」

「わしは四十すぎの厄年。厄なんでものはあてになりませんがね」

と壮年期の青竜刀は、丸いアゴをますます丸くしてごきげん。この二人を見比べながら、まだ二十歳末の若僧の筆者は、他愛もない顔で畏まっていた。

「この春、満州奉天の弘報主任で満鉄鉄道総局にいたので、自称チンドン屋のポストだけに、ムリをして川上三太郎センセを大陸へ招待して、腰巾着で満州主要地を飲んで回りました。この仁、若いころ天津にいたので飲むのは高粱酒ばかり、觀光より飲む方が忙しかった。このセンセの胃袋はゴム長ぐらい丈夫だった」

この話のあとをうけて当方、

「和田黙然人さんが前門でナニワホテルを開業されていますので、まずは同志五、六人を集い、北京川柳会を作りました」と割り込めば、東魚大人、目を輝やかして大喜び。

こんな楽しい川柳談義の中で

「中華民国の古都北京にいろのをさいわい、中国人に川柳を宣伝して、中国古典の文叢の中から川柳的な詩文を発掘したい」

との東魚センセの御托宣に、青竜刀コックリして大賛成の態であつた。

このあと、筆者が赤紙応召で戦地に赴いた直後に北京入りした川柳界のウルサ型品川陳居らの活躍で、大陸初の「北京川柳展」を開催している。このことが青竜刀一代の快事であつたらしく、戦後の彼の出版刊行物にはもれなくこのことにふれ、

「魯迅の実弟周作人先生が『古典に還れ』をスローガンに、中国軽文学発掘に熱心だっただけに、全力投球の御支援をうけた」

とこの川柳展を大いに持ち上げていた。この歓迎会三人の酒席の東魚大人は、うらなりの冬瓜みたいで、内心失礼ながら（この人、長くはないな）と予感しきりだった。

▼次号は「金子 香風」

秀句鑑賞

同人吟 八木千代

— 9月号から

ずつつとは川柳はわたくしにとつては神でした。それから月と思つようになりました。このころから「川柳さん」と心の底から敬慕しました。今でもその気持は変わりませんが、いつの夜も月の下ですから、照らされて恥ずかしいことはしたくないとばかりに、いい格好の句を作り続けていたような気がします。

もつとも、もともと我が儘なわたくしの日常と心。美しい作品を残したい理想との葛藤や揺れから生まれた川柳もあることもあるのですが、今から考えると自分の姿を美化しようとしていたきらいがありました。

歳月の流れは私の主観をも移らせてゆきました。今は季節のうつろいに添って月の夜も闇の道もあるがままに受け入れて、というよりもいつでもその大きなものの中のある一部として呼吸できるような感触を抱きかけています。わたくしにとつて川柳はとてつもなく大きく深く、そのほんの端つばにすっぽりと包み込まれた宇宙になってしまいました。

それにもつ少し生きねばならぬようですか

ら、自我も弱みも隠しきれぬものではありません。ありのままを書くということがどんなに大切なことか、またそのありふれたことがどんなに難しいことかという、人生の基本に行き当たって、行き詰まったり引き返したり開き直つたりというところでずすから今度の秀句と向かい合つては何度

もくちずさんで、皮膚から沁みてくるような句ばかりを頭でなく呼吸の合つたとき一氣に書いてみました。

母乳呑むまるで太鼓を打つように

政岡 日枝子

なんとも不思議なものを抱くという気持を先頃詠んでおられましたが、可愛く生長されて個の意思を現してきて、健やかに強く母の胸から湧き出る母乳を本能ながらも吸ってゆくのがお互いに噛み合ったとき、この太鼓は打たれはじめます。

素晴らしい感動がこちらまで伝わってきて生きた絵をみるような、飲むの調べとなって自然にうたいあげられました。

踝を愛しと思う旅半ば

桑原道夫

くるぶしという小さな突起、人間の身体の中でも普段気にもしない小さな骨だけれど、全体重を預けられての働きは足首の要でしよう。坂を上がるとき峠を越えたときこの骨に掛けた負担の、どれだけ苛酷であつたかと、私もこの歳になってから愛しくて済まなくて手を当てたくなっています。「踝」という部分にポイントを持って来られて、来しかたを振り返り、その小さな踝から人生を凝視していただけるのが、大きな世界を覗かせる鍵となつています。

蟻が書くシナリオセッセッセッセ

尼 れいじ

蟻のシナリオという表現には別に目新しい気はしませんが、カタカナのセッセッセのリズムがお洒落でスマートで、そのくせ熱い呼吸が通っているのは、蟻の生息に寄せての自分への問いかけだからでしょう。

命まだ捨てきれないでいる埴輪

牛尾 緑 良

そう言えば埴でつくられた俑は、目も口もくりぬかれて穴だけの表情なのに、妙に生を感じます。出土してからもですから土中ではさぞ不本意な捨て切れぬ念だったと思います。

掘つて見よう　ぬるま湯くらい湧くだろう

石垣　花子

淡々とした呟きに聞こえますが、毅然として物ごとに当たっておられる日常を知っているだけに、この心境には教えられます。いつも前向きで意欲に満ちた姿勢の作者ですが、その場その時に応じて、応分な対応も出来るどころか、我武者羅もなく気負いもなしに「ぬるま湯くらい湧くだろう」と希望をつないで、先ず掘つて見ることに行動する生き方に深い感動をおぼえます。たとえぬるま湯が冷水であろうとも後悔はなく、あつさり諦めて、掘つたということに満足されるでしょうから。しなやかとも言えます。

綱文も弥生もほんの昨日かも

池　永　正　雄

そうです。ほんの昨日でしょうね。目の前の出来事も過ぎてしまえば遠いとおい昔と同じこと。今から5500年も以前の人々が今より貧しい文化だったとは思えませんもの。ほんとうに昨日だったかも知れません。

ただし書きいっばいつけて生かされる

西　出　楓　楽

こともなげにすばつと言いつちられていて心地よいです。ただし書きの第一条はストレスだとおもいますが、大丈夫の感じですね。

天寿全う　本人もそう思うのか

三宅　保州

ご挨拶をいただくたびにいつもそう思うのです。いったい何歳が天寿なのか、果たして本人が納得しているだろうかと考えていました。ところが次々近しいものを失ってみしたら、殆どの場合「せめてもう四、五年は」と本人も思っていたようでした。いつがいかのか何年延びても一緒でしょうが、毎日密度濃く生きていればお迎えがあつたときが、天寿のわけで、難しいことだけれども本音を隠さないで生きてゆけませんかみたいです。

悪役は自分の顔に惚れている

榎　本　路　児

なにか切れ味のいい刃物の切り口みたいな。こんな本音のペンで斬られたら悪役も本望でしょう。つらつらがええと、一昔前の二枚目が芸はあるけれど主役をはるには年齢が過ぎたという際に、悪の利いた役柄につくと光ります。味のある語り口です。

美しい言葉をみんな忘れたり

安　藤　寿美子

このところ開き直りの作品ばかり採りあげていますが、いろいろな過程を経たといつてもこの境に達するのは並みの人ではありません。言葉の美しさなどもつ不要なのでしょう。

妻が見ているお醤油はひとしずく

江　口　　度

どこの家庭でも見られるちよつとした一酌ですが、力量のある作家はこんな軽いタッチの微笑ましい川柳に仕立てます。川柳塔の旅の一つで、栗先生の隣の席で朝ご飯を頂いたことがあります。あつという間なしに浅漬けにお醤油をたらたら。たしか奥様はお留守番のはずでした。栗先生、バラシましたよ。

水筒の水は帰りを知っている

小　池　しげお

他の四句はこまやかで優しい句が並んでいますが、この水筒の作品だけは独立した格を持っています。活字の中から立ち上がって目に飛び込んできました。水筒には計算と経験で必要量が入っていたはず。その水もあとの事も考えながら飲まれたはずでしょうから帰りは熟知しています。あつさりと平明に書いてありますが、流石に男性の句です。

心機一転　空はわたしの上で夏

牧　　渕　富喜子

仰げば空は夏、この「わたしの上で夏」という箇所がぐつとききました。構成が夏なのが爽やかです。傷はまだ痛むけれど、どうかしで立直ろうとする姿が透けてみえます。そして静かな秋がきて心も癒えてくるでしょう。



高杉鬼遊選

今治市 村上久美子

逆転もあるサこの世は面白い
うの目たかの目ここで泣いたら思うツボ
飽食の時代に芋の値が高い
進化論この後 人は何になる
消費税 三途の川までついてくる

鳥取市 倉益一瑤

目覚しに低血圧が駄々をこね
脳回路 時々ショートして困り
海開きモンローがいる りえもいる
ひまわりに負けぬ野心が炎えてくる
大の字で自分の位置を確かめる

静岡市 佐藤次枝

遅刻した人に上座が空けてある
いたいけな孫にまさかの癌告知
試験受け母は気丈に立ち向かう
父の日の祝いどころか子の病
無事手術 先ずは一山越え安堵

河内長野市 木太久 正一

素麺でだましだまして秋の風
嫁と孫のためにも元氣長く生き
畑仕事シャワー昼寝とつづく夏
敗戦と経済成長 生きて古希
前評判無くてよかった金メダル

和歌山市 木村親路

正直に言えば傷つく人がいる
適当に曲って屏風立っている
老いらくの恋も芽生える医者通い
結ばれて周りをホッとさせた恋
クーラーに褒美あげたい夏でした

東大阪市 谷口義

渋滞の橋の上から月見する
負けてから日本明るくなりました
義理の仲いつも負けてる振りをする
薄情な家やと猫も思ってる
子が出来て外で飼われることになり

尼崎市 田 辺 鹿 太

羽曳野市 西 村 りつえ

吊皮に夏の疲れがぶらさがる
空腹の時ほど蟬がやかましい
健康が買える薬のコマーシャル
変り身の早さで飯を食べている
逼迫の財布へ税の待ったなし

堺 市 宮 本 かりん

甘えまだ残した靴のでかいこと
親思う意見反論してしまふ
影ぼうしのろまな僕といてくれる
糠床の中でなすびの衣替え
父の目で睨む真っ赤な信号機

羽曳野市 芦 田 絢 子

この滝に打たれ女に戻りたや(浄蓮の滝)
バスジャックのビデオ見ているバスの中
戸籍調査オウム手配書置いて行く
盆提灯お茶入れましょか酒ですか
シルバーの席から呼びにきてくれる

横浜 市 清 水 潮 華

話し方習ってますとしゃべり過ぎ
勉強も手伝いも嫌 夏休み
炎天に税務署の道尋ねられ
几帳面に土用のうなぎ買ってくる
解約に用途しつこく訊ねられ

生ビール乾く心に吸いこまれ
憎いほど白が似合って近寄れぬ
肩の力抜けばストスト溶けていく
白桃の優しい肌にひそむ棘
山に惚れウエディングベル聞きそびれ

尼崎市 岩 倉 キク子

空想の世界トイレの窓にあり
我がまをちよっぴり残す片えくぼ
飲み込んだ言葉が喉にひっかかる
漁火がゆれる心を呼んでいる
小さい事言うでないぞと富士の山

鳥取 県 原 みさを

むぎわら帽 亡父の匂いが少しする
子は産まぬつもり白い夏帽子
内定をもらい残暑が苦にならず
ゼンマイのゆるい時計がある実家
憎しみのナイフがさびる小引出し

今治 市 中 村 好 恵

鯛雲あなたに聞いてほしいこと
炎天下ビールが駆けるお中元
もらい物で夕飯がすむ二人きり
街路樹が切られて天が高くなる
たくあんが繋がっている妻の留守

鳥取市 藤 ふうこ

父の日は意識ないまま過ぎてゆく
じれつたいそやナそやナと許す癖
長生きし旬のうまさに逢う至福
大きくてあたたかかった父の掌よ
にんまりと笑う女が鍵を持つ

和歌山市 楠 見 章 子

四世代つかれを見せぬ黒電話
ビルまたぎブルドーザーの昼休み
バイキングあれもこれもと食べ残す
五パーセントの前に車を買ひ替える
還暦の夫へサボテン贈りましよ

和泉市 中 川 楓

恋文を知らぬ携帯電話達
エリートもキョスク傘の俄雨
晴雨兼用ぱつと女を演じ分け
いつからか息子の傘にいる私
これが礼儀 言いたい事を言える仲

大阪市 尾 崎 黄 紅

剣術と薙刀いまは杖という
竹光と解ってしまう羽目になり
人と逢う日は丹念に歯を磨く
病棟の窓 陽は昇り沈むのみ
非常口の鍵錆びたままよしわるし

八尾市 平 川 幸 枝

物忘れ金庫の数字貼ってある
どう見られようともペアの老夫婦
若者が違いを見ぬく戦争展
定年の駅でレールが交差する
白桃に指触れさせず包みけり

八尾市 與 田 明

もうよりもまだで生きぬく老いの意地
そのうちに空気に税をとるだろう
ガン憎しお前も一緒に火葬する
欠伸には負けぬ前座の玉の汗
噛むように自動改札切符取る

富田林市 藤 田 泰 子

アツパツバこれが私の分相応
〇一五七から逃げる御身大切に
孫の恋どうか異性であるように
明るくて化けて出るにも憚られ
仏壇の扉は締めて酌み交わす

兵庫県 北 川 とみ子

もう後へひけぬ軍手を洗うてます
耳打ちが耳うちでないお人好し
狙へいちにち愚痴で猫と留守
きれいな事はかりが通る空財布
他人には見えない虹の割烹着

鳥取市 坂田 和歌子

富田林市 大橋 鐘造

食べ歩き行き着く所亡母の味
郷に入り気楽に呼吸しています

ほろ苦い別れが似合う桜貝

短針がゆっくり動く炎天下

珍味だが私はお酒飲めません

鳥取市 岸 本 宏 章

登山靴 山の機嫌を知りつくす

働いた汗は自慢をしたがらぬ

ポイ捨てを恥と思わぬ世が怖い

貧乏に我慢強さを仕込まれる

いい雨も三日続けば飽きられる

八尾市 村 上 ミツ子

妻の愚痴はいはいと受け流す

大好きでとつても恐いひとがいる

壁に耳ときどき口もだしてくる

朝まで数え羊足りなくなってくる

ガラス玉 愛がダイヤにしてしまふ

横浜市 川 島 良 子

新盆へ和尚ベントで現れる

赴任地へ釣りバカ日誌ついてゆく

八合目あたりで膝が笑いだす

内定が決まり単位に慌てだす

留守電が早口メモをとり損ね

出過ぎたる杭は打たれぬ世の習い

人三人寄れば派閥が二つ出来

八月の川は悲しみ忘れない

よく動く尻尾でご機嫌伺いに

静岡市 小 木 久 子

テレビ見て笑って一人佗しいね

そっくりに撮れた写真でもの足りぬ

ちぐはぐでさっぱり紐がつながらぬ

耳へこしょこしょ孫に約束させられる

高槻市 乙 倉 武 史

米屋からお盆休みを言うて来る

趣味としてやれば楽しい土いじり

何もかも計算づくで情がない

八月になると戦記を出して読む

旭川市 朝 倉 大 柏

灯がつくと何でも話しやすくなる

ふるさとはいいな呼んでる声がする

いい話している居間は開け放し

孫の手が痒くないとこ搔いてくれ

尼崎市 森 安 夢之助

輪が歪み一人ぼっちのお茶を飲む

有頂天になると広がる鼻の穴

金がない腕力が無い知恵もない

昔むかしの映画愉しく見るテレビ

和歌山市 武本 碧

マイペース若葉マークをつけたきり
押入れに昨日をたたみしまいだむ

水を得た魚が跳ねる趣味の道
簡素化へやはり物言う包装紙

秋田県 湊 修 水

生の肉食べた悪夢にうなされる
二年目の仮設炎熱生き地獄

被害地にぬくい政治の手がほしい
座敷にも蒲団にも砂 海の家

大阪市 立 蔵 信 子

海遊館ふきげんそうな人気ザメ
カジュアルな言葉Tシャツ知っている

つらくてもいつものように米洗う
恋をして価値観をまた変えている

羽曳野市 川 田 晋

目の上の瘤が今日から夏休み
別れ話出てうろたえるのは男

世の移り婦唱夫随の家がふえ
国会へ納税拒否の手を挙げる

和歌山県 尾 田 綾 子

頼られて頼って母と娘の祈り
年毎の梅干しがある母の性

夏草の愚痴は言うまい稲の伸び
大腸菌平和の隙を突いてくる

札幌市 三 浦 強 一

ふるさとへ来て邪魔になる標準語
前略で突然刃突き付ける

生きている実感を飲む大ジョッキ
寿限無寿限無長寿に福祉追いつけず

米子市 池 尾 保 子

コーヒーが中毒になりどうしよう
人間は毒がいちばん好きらしい

主婦業も週休二日もらいたい
たばこ買いた父はどこまでいったやら

尼崎市 尾 宮 弘 治

児の投げたゆるいボールが捕りきれぬ
下駄と靴履いた夫婦でよく転ぶ

戸締りが気になりだしたバスツアー
母だけが秘めてる負けて勝つ力

高知県 百 田 幸

爆弾を抱いてるような一人っ子
老夫婦ふたりに今は二度来ない

ひとことをのんで同居の灯が丸い
換気扇 今日 献立洩れてゆく

堺市 桜 井 莊 次

信用と言う財産を子に賭ける
すべらした口がびっくりする波紋

後味が欲しがっている口直し
隙のない話如何にも窮屈だ

鳥取県 高尾 京

松江市 松浦 登志子

朝顔の花が眠気を吹きとばす
平和行進 猛暑に耐えて続く道
花々に残暑見舞いの水をや
御仏の相乗り給う精霊舟

大阪市 一本 勇太

香川県 神保 坊太郎

終章はお前と俺の絵で飾る
のれん酒 洗いざらいの裏話
半音が狂う炎天父の戯画
ケロイドの絶叫 八月の日照り

鳥取市 岸本 孝子

島根県 森 茂美

珍しく農継ぐ嫁が来るという
いいことがあると振舞う癖がある
湯の街を宿の看板着て歩く
狂わない電気時計が味気ない

鳥取市 富山 雄幸

倉吉市 高多 博丈

グッツアン祝儀まるまるもらいたい
行く雲に仏の道を問うてみる
核実験反核の火に牙をむく
奥歯噛み忍の積木が揺れている

鳥取市 福永 ひかり

和歌山市 山根 めぐみ

善い人で話がみんな筒拔ける
目で取った皿持て余すバイキング
結果論わたしにだって言えること
孫の守り無傷で渡しホッとする

ひとりごとといはじめると危ないな
ふるさととはとにかく眠り満たすところ
わけへだてせずに育てたつもりだが
他人よりライバル視する兄おとと
薬にも毒にもなれず忘れられ
みどり児に女房半分持つてかれ
秀才が阿呆になれる阿波おどり
脱税が出来るほどではない暮らし
蛸が忙しく鳴いて寝ておれず
夕焼けの空へ明日の色を足す
ダムの碑に野花供えて盆の月
そわそわと選挙近づく音がする
0157好きな刺身も我慢する
目の鱗取れた思いで法話聞く
睡蓮の咲く沼の底極楽か
中元に熨斗紙替えた跡がある
夢さめて西瓜たのしむ横ずわり
御意見無用スイスイスイと鬼ヤンマ
開けっぱなし鍵はかけないキリギリス
生きる自信殿様蛙あわてない

転んでも只では起きん妻と住む
老いてなお似たもの夫婦よく眠る
草団子母の匂いのする土産
長生きはしたくはないが薬のむ

尼崎市 中澤 向西

岸和田市 亀井 皎月

お隣は秋刀魚ですよと風が告げ
此処だけの話がとても面白い
万札が予定の外へ行きたがる
元軍人威張って負けて何だった

弘前市 櫻庭 順三

ねぶたサはねる羅漢がはねる鬼はねる
ねぶたサはねる縄文の血がはねている
どっこい懺悔 津軽の風を知っている
緑青の湧くほど夫婦やっている

成田市 斎藤 房子

したたる汗ぬぐい元氣と書く便り
ダイヤよりイミテーションの似合う指
過密都市かるいジョークも枯れてゆく
緑蔭を拾って帰る市場籠

八尾市 山本 宏

朝顔が目覚めぬうちにする散歩
嘆くこと忘れるほどに元氣です
少子化に檜山節が流れ出す
左向き右を向いたらもう忘れ

横浜市 保田 絹子

言い訳の無沙汰仏も聞いている
読経止み施餓鬼供養に蟬しきり
晴耕雨読の日 夫は眠りこけ
どっしりと構えのんびり福を待ち

鳥取市 杉本 孝男

へそくりを太らせ老いの準備する
ゆずられた椅子の温みが身にしみる
さよならと素直に言えず乗り遅れ
大切な一人の親をもてあます

横浜市 豊田 羊子

残り火に細き生命の綱渡り
暖かい風に逢いたい回道
三途の川越さずに済んでからの幸
どじな蚊が干からびた血を吸って行き

今治市 渡辺 南奉

ネックレスピアス女々しくなる男
日の丸を立てぬ自由もああ平和
生きすぎたのかなあちこち軋み出す
しがらみがいやで中間色守る

松江市 浦辺 静江

くだらない話でお茶が不味くなり
流行を追っても冴えぬ年となり
冷房に嫌われぬよう厚着する
体操を終え朝顔の機嫌とり

河内長野市 大西文次

夫婦別姓これでしやすくなる離婚
からっぽの頭で思案してみても
七年も待てず浮気をしてしまふ

奥様の笑顔も添えて売る花屋

和歌山市 森口美羽

四捨五入切り捨てられたのは私

無為無策手を拱いている私

垢抜けもせず生きて来た女です

群れの中ひとりはみ出る天の邪鬼

尼崎市 的場十四郎

逆らえば雨も斜めに降りしきる

雨傘も日傘になって旅終る

夏バテをゲートボールで乗り越える

一病は息災なんだと励まされ

今治市 野村清美

病んでより爪の色見る癖がつく

朝毎に挨拶かわす庭の花

夏バテを防ぐカレーで活を入れ

一円は誰も拾わぬ大通り

綾部市 藤田芳郎

預かったポチが立場をわきまえぬ

葬儀屋の言い値で回る水車

火葬場の自動ドアに迎えられ

霊園の坂に渋柿実をつける

十和田市 阿部喜久江

人間の驕りに自然怒り出し
先輩に叱られどうし五月病
いい事があっておいしい今日の酒

定年がこつこつ励む趣味の道

尼崎市 軸丸勝巳

ボール蹴るただそれだけに酔うている

にんげんの笑顔泣き顔アトラクタ

八月に買う一冊に戦記もの

ガン手術 自慢の如く見せる風呂

今治市 塩路よしみ

饒舌な夾竹桃は夏が好き

賞味期限過ぎても未練まだ残り

窓際で開きななおっている眼鏡

シンクロナイズ堪能させる万華鏡

日立市 加藤権悟

八月の空に御巢鷹山が泣く

強い子になれよと父の肩車

会う度に大きくなって来る帽子

辞令一枚 納得をする外はなし

海南市 谷口義男

あのひとの誘い舟なら乗って見る

絶頂の時は気付かぬ落し穴

終点が見えて来たから走らない

音信はないがどっこい生きている

熊本県 増田 一 乗

動く歩道かのホームレス今いずこ
バス止めて大道闊歩 阿蘇の牛
ボーナスの初穂を親へ届けられ
ゲートボール昨日の敵討ちに行く

大阪府 平井 露 芳

手配書この手の顔は署にも居り
飼主の散歩に犬がおつき合い
洗濯機一度くぐった免許証
復興も見ずに寅さん永遠の旅

愛媛県 中居 善 信

煽てたら男はタラの木に登る
労りの言葉へ妻がすぐ甘え
マイナスの計算ばかり畑を打つ
とまり木へ僕専用と書いておく

寝屋川市 太田 とし子

生きているか十来年の消費税
膝崩す猪口は素顔の方がいい
鬼の顔にならぬと母を置いてけず
蟬が鳴く盆はいやだと言うて鳴く

和泉市 横山 捷 也

会釈したようにも見える孫の癖
長話 簡単ですがとしめくくる
新築に親だけ住んでいる広さ
一寸待て 言えぬゲームに腹をたて

横浜市 近藤 道 子

度忘れの漢字多くて辞書笑う
ふるさとの友と話すときがえる
太陽を信じ農業しています
スイートンを美味しく食べる終戦日

八尾市 鷺 見 章

可能性信じりハビリ今日も耐え
宝石はイミテーションだが形見
丑の日と言うにわが家に来ぬ鰻
満天の星に小さな我想う

川崎市 和泉 見早子

期待値が少うしずれたまま夫婦
洪滞を覚悟故郷の夏に会う
はた目には丁度よいのに瘦せたがり
流し目を覚えた猫が愛おしい

今治市 渡邊 伊津志

優しさの中に棘持つ柚子の花
燕尾服まだ着こなせぬ燕の子
はばたいてみようこんな広い海
雑魚は雑魚広い海には出たがらぬ

和歌山県 杉山 精 子

リトマス紙 嘘はとつくにばれていて
少し破調な夫の歌に慣らされる
ワープロと喧嘩をする夫の指
追伸の一行 夜が長くなる

高槻市 小林 一 完

ジリ貧は動く歩道を抜けられず

何だろーう脳細胞の減る音か

リストラがなくて役所は住みやすい

まだピザの出前を取ったことがない

徳島県 安 宅 美代子

けっぱくを主張している冷やつこ

コンビニへ噂話をかいにゆく

つじつまを合わすと寒い風がふく

紙コップその場かぎりのことを言う

益田市 岡 田 竹 夫

蹟いて世間ようやく見えてくる

友の訃を聞いて眠れぬ暑い夜

笑ったら笑い返してくれる妻

湧水で畔を刈る鎌研いでいる

鳥取県 山 内 芳 江

檜山へ平気で送る世が怖い

借りた金けじめ忘れている地獄

今言うとすべてが水の泡になる

無事暮らす呪文毎日欠かせない

伊丹市 延寿庵 野 鶴

あつあつのご飯が好きな仏さん

知恵の輪が一つはずれて愚痴も消え

カイワレが夢に出てくる朝の膳

自販機の米で食べてる米屋さん

砂川市 武 田 正 美

長居する貧乏神と妥協する

追求をするどの道も深い霧

正直に生きてお金に薄い縁

鳥取市 山 本 益 子

夏バテをトマトジュースで乗り切ろう

置き手紙なぜか不吉な予感する

核心に触れるとひらり話題変え

八尾市 村 上 剛 治

用意どん何もわからぬまま走る

ペン牝豚が近頃あくびばかりする

ライバルがまむしドリンク飲んでいる

横浜市 秋 元 和歌子

少しかだけ悪をブレンドした魅力

真ん中は要領の良い子に育ち

モビールの魚てんでに向きを変え

鳥取市 山 口 しげる

ファッションを選ぶ女房の目を借りる

留守電へ他人行儀のメッセージ

詫びようとする鼻先へきついジャブ

堺 市 たにひらころ

膨らんだパン迷わずに幸せか

逃げたのにだあれも追って来てくれぬ

気が合ってしまつて面をはずせない

大阪市 川内 咲

笛太鼓 祭りの後に過疎の風

食中毒 思わぬとこに飛び火する

薬害に責任の人員になり

横浜市 後藤 早智

形見分け亡母の心を持ち帰る

キャリア持ちすっかり愛も手にしてる

流行のサンダル町を闊歩する

和歌山市 水田 秀男

ごみの山やがて日本は沈むかも

優しさに何を返そう蒼い空

スタンスを狭められれば楽だろう

兵庫県 円増 純子

確実視されたメダルが逃げてゆき

自己主張して不揃いの青りんご

天秤の上とは左右気づかない

大阪市 和田 和風

焼夷弾降った河原で見る花火

ひまわりが胸はっている休耕田

まだ生きているかと現況届来る

神戸市 向井 泰子

平和なら水平線も丸くみえ

マージャンをして来た晩は機嫌よい

親不幸いいよ本音で生きていこ

唐津市 松本 圭

万歩計日影の道を覚えてる

パチンコで遊ぶと金が飛んで行き

一人では何も出来ない砂時計

米子市 足立 由美子

少年は夢と夜明けの汽車にのる

どしゃ降りに負けない足を強くする

真相は森の梢が知っている

横浜市 金森 徳三

朝と夕 金魚の餌は忘れない

届け物来そうで家を空けられぬ

いつからか余命気になる死亡記事

横浜市 上野 天々

サミットに武器よさらばの知恵がない

ねずみ顔なのに子づくり怠けてる

暑すぎて花火昇天せず爆ぜる

横浜市 伊藤 ふみ

一匹の蚊へ全神経をとがらせる

冷房の身体を夏の陽にあてる

庭になる西瓜郵便屋にも見え

松江市 松本 知恵子

火の色でヒロシマに咲く夾竹桃

街に住み夕日に祈ること忘れ

病院の窓に聞こえる街の音

弘前市 今 生 恵 子

線路に石置いたカラスよ 逮捕する

いつまでも女でいたい舞扇

ゴーギャンもゴッホも生んだ江戸浮世

今治市 越 智 青 園

田圃道ジャズからタンゴになる蛙

風鈴へ風はお世辞を言いに来る

麦茶がぶがぶ汗を承知でのんでいる

島根県 菅 田 かつ子

親のすね齧り親より高くなり

そよ風のような人です気が和み

遊び回って戻ればほっとする我が家

島根県 松 本 聖 子

梅を干す苦勞子供に分かるまい

母の日の蘭です今も咲きつづけ

死亡欄の歳とわが歳ふと比べ

島根県 武 島 ちよえ

さわやかな目覚めやる気を起こさせる

向き替えてみたが暑さは変らない

寄りかかる柱のひずみふと見つけ

島根県 福 間 博 利

恐竜が亀呑みそうな秋の雲

老兵も君が代に泣くアトランタ

義母危篤お世話になったなとおもひ

吹田市 野 下 之 男

年毎に涙腺ゆるむ終戦日

天国に近い電話にご用心

街の灯が恋しいフェリー待っている

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

二人きり熱いおしほりだけ記憶

ゆつくりの象さんの歌 僕ねむる

蟬の声激しきほどの夏が好き

横浜市 山 下 省 子

給食のサラダ熱湯かけられる

お刺身も法度もしもが怖いから

ブティックの払い新札ばかり出し

横浜市 荒 井 広 和

長い脚組んでマンガの馬鹿笑い

日めくりをめくる一枚分の老い

親の膳 枕木にする子のレール

熊本県 高 野 宵 草

早寝癖 早起き癖がまだ出来ぬ

ひまわりやゴッホも暑かったろうなア

妻という吾が分身に叱られる

羽曳野市 徳 山 み つ こ

核実験 地球ガクンと齡をとる

母さんの目は潜望鏡 望遠鏡

一瞬にチェックすませた女の目

リング剥く手はダイエット聞き流し 物いっぱいゴミいっぱい夢の島 ストレスを捨てるゴミ箱探してる	暑い日を案じて届くカモメール 縁日は浴衣で参る下駄の音 ゆつくりと食べて歩いて休刊日	テトラポットにぶつかる波の反抗期 言うことを忘れたままの瓶の口 下駄の音 父が元気な頃の音	悔られまいとネクタイ締めてゆく 古里で儲けたひとの話きく 大文字の臍から京の鳥瞰図	建て替えに喜怒哀楽の塵の山 脚一本千切れて屑の蟹になり 核廃止叫べば蟬の大合唱	待つことに慣れて肥満の妻になり 観光地どのツアーにも主婦パワー 母親の愛がベストの効き薬
島根県	和歌山市	大阪府	八尾市	枚方市	
福岡	古久保	杉澤	神原	二宮	
雅子	和子	汀	まさと	紫鳳	

好物を覚えてくれたおもてなし 好きだけで上手の線は越えられぬ 手術室赤のランプはまだ消えぬ	みたままつり戦争知らぬ盆おどり 百日紅 高野詣でをなごませる 焼き栗を買って巴里に居る気分	周波数びったりさんが絡み合い サウナ風呂頑張っている太鼓腹 誤魔化しの効かぬビデオに裁かれる	焼き烏賊の匂いが登る関の松 風に耐えエアロビクスをする梢 ユーフォーを見たくて梢目指す蟻	心配はするな元氣だ金もある やがてまた元の二人になる夫婦 大声で呼んで小声の長話	シヨッピング宝石店は覗くだけ 人情と酒が任地を好きにさせ 住む街の歴史テレビに教えられ
堺市	吹田市	米子市	犬山市	大阪市	
志田	西岡	猪森	早川	小林	
千代	豊	スミエ	盛夫	周信	

憂きことを碎いて流す盆の波

静岡市 大村 正雄

札束が誘う議員の軽はずみ

辻褃の合わぬ話を聞いてやり

横浜市 宮村 ちよ路

夏雲の陰に若き日見えかくれ

テレビドラマの中で電話が鳴っている

娘も孫も良く手を洗う夏となり

高槻市 傍島 克治

風邪じゃない誰かがくさすこのクシャミ

金刀比羅の石段厳し老いの夏

風鈴の音色に秋を聴いている

寝屋川市 酒井 勇太郎

体罰禁止 熱血教師耐えている

幾つもの特技を持って職が無い

入院を檜山と言いい困らせる

倉吉市 山中 康子

信じ切る父の背中を守られる

意地をはり善人ぶってすみにいる

一喝を浴びせた後の負けいくさ

兵庫県 谷田 多美子

日曜日テレビマンガを付き合う日

ひまわりの花に座った亡母を見る

妊娠の兆し嫁より姑が知り

会うたびにひとついいこと拾わせる

米子市 小塩 智加恵

アトランタ女の力見せつける

嫁姑 法話を聞いた日は丸い

鳥取市 山宮 愛恵

夕立にこころの隅を洗われる

真夏日の訃報に朝の箸おとす

ふれ合った手と掌がからむ遠花火

豊中市 みき わきみ

妻あげ膳さげ膳は俺 古い二人

ちよっとした無理して風邪をひくも年

もう十年若かったらの日が続く

大阪狭山市 伊藤 尚子

彼よりも彼女誘って行く芝居

約束の切符今だに貰えない

外国へ行って日本の良さを知り

島根県 谷岡 ふみ

秋まつり孫と行くのに小銭持ち

姉妹が揃う楽しみ秋の旅

夏からのひる寝のくせや病母の部屋

鳥取市 石上 悦子

ピーポーの音に家族の現在地

ポーナスで新築しますポチの家

世渡りの景色楽しむ縄電車

大阪市 池田 一男

四季移る節目節目に喝をいれ
飼い主を引きずる犬の自己主張
ダンジリを動かしている渋谷扇

富山県 増田 紗弓

この先の蛇行を知らぬ木の葉舟
草を刈る機械わたしは首を撫で
お中元うまくはがれたセロテープ

箕面市 木村 天弘

別姓で束縛されぬ夫婦です
縛るのが好きな真珠のネックレス
ラッシュアワー日々縛られにゆく社員

和歌山県 中村 君枝

貧乏性いつも日の出を待ちわびる
小心で野心も裏もない暮らし
二の矢まで飛んできました落ち目どき

鳥取県 国森 武子

粧うてみても一人じゃつまらない
水のようにさらさら暮らしたいものだ
如露ほどの水でもよいと葱あえぐ

島根県 三代 朝子

お嫁さん笑い袋をさげて来る
板の間を素足で歩く心地よさ
メルヘンの世界に浸る星まつり

八尾市 高橋 明子

もう少し寿命がほしい蟬が啼く
安全なプール入るも気にかかる
さすが夏蟻も暑から緑の下

大阪府 奥野 義夫

僧侶のバイク風きる盆の昼
困るでしよう妻が教える炊飯器
水すまし生命は水に任すだけ

羽曳野市 森田 四三郎

言うまいと思えど愚痴も出る暑さ
生前墓碑 無邪気に孫も手を合せ
矢印のとおりに行けば募金箱

交野市 山川 日出子

忠実な兵士身替わり戦死する
まりつきは軍歌だったと語り草
古布がパッチワークで生き返る

和歌山県 村中 悦男

祝賀会 叙勲の主は疲れてる
犬よだけほえるな用があつて来た
愚痴話炎暑を倍に感じます

和歌山県 藤井 春子

夏の宵ムード二人のためにある
幸せの彩だけ見える向う岸
ストレスを森林浴に助けられ

静岡市 増田扶美

足癒えて試歩にまぶしい夏の海

動き回る孫を囲んで話題増え

努力だと言わず運よと人は言う

和歌山市 津村武春

聞く耳のないのに論す気の疲れ

ファックスに叱られている長電話

無言劇の夫婦を覗く隙間風

寝屋川市 井上すみれ

うろ覚えばかりで値打ち下げ候

見学会スタスタ急ぐ友という

呆けた真似 出来なくなった齢となり

大阪府 大家風太

季はめぐる老境の日々砂時計

菊一輪妻よ私の気持です

臍ピアス何をするものなのですか

兵庫県 西山八重子

錆びたネジ磨いて夫婦灯をとます

寄る歳に勝たねばならぬ花手桶

衣食住足りて仏に手を合わす

兵庫県 高見末野

鈴虫が考え事の邪魔をする

ミシン踏む夜なべの横に猫がいる

老いの身も一寸着替えておしやれして

柏市 上鈴木春枝

白無垢のスタート愛は疑わぬ

その次のひと言を待ついいムード

平熱が続く平行線の恋

和歌山市 木村初子

車椅子一会の旅の発車ベル

民主主義子とは親とは絆とは

記憶また曖昧になる孫の歳

鳥取市 植田一京

生意気なころには夢も持っていた

物色の果ての庭石見てあきず

あこがれの天には遠いかたつむり

鳥取県 奥谷彩子

野仏に母の安否を問うてみる

いい夢を発酵させる花薊

火消壺 愛消し切れぬ迷い道

和歌山市 福重美子

五十回忌昔のままの父がいる

二世帯になって荷物の中で寝る

鉢植のネギで間に合う老夫婦

河内長野市 水谷笙子

孫の髪サラサラサラと指くぐる

思案する 女日傘を回しつつ

りハビリで隣よりまし勇氣出る

和歌山県 上岡正直

でっかい夢しばみしぼんで今がある

熱帯夜 月も暑かる冴えぬ顔

バツ一の伴侶選びに娘の好み

倉吉市 田中八太郎

スナックでもてているのはフトコロだ

俺様は只者でない安ものだ

妻という強い味方をいつも責め

尼崎市 河津正治

大国の面子が核が大手振る

一言を添えて新茶を仏前に

梅雨半ば猫も孤独か爪を研ぐ

尼崎市 向井末貞一

杖ついて進まぬ足がじれったい

好きな酒ほどほどにして今日がある

悪友におんぶされてる生きている

唐津市 江川青琴

雨々々野菜ばかりか気も腐る

缶ビール一個わたしの健康法

夏バテを土用うなぎで防止する

寝屋川市 森茜

桔梗寺 苔の着さに溶けていく

土踏まず叩きストレスおびきだす

闇深く自我と自尊を閉じ込める

鳥取県 橋本多哥由

花も実も香る梅の木植えてみる

仲の良い夫婦で今日も木を植える

孫の書く森は童話が植えてある

横浜市 丹下智洋子

安眠を予約している大あくび

双方の弱み小出しにまとめ役

バナマ帽 亡父のロマンも捨てられる

富田林市 中井アキ

いろいろとあつて二人に星が降る

ブランドと無縁に歩き茶が旨い

信じます女は丸く眉を描く

高槻市 江原秀夫

たかが抜歯それでも入院しろと医者

手術前明るく振舞うのに疲れ

お若いと言われうれしくまた佗し

沖縄県 杉谷一栄

自分との約束歳を気にしない

皮肉なら一枚上と自負してる

お話ができて楽しい人と知る

寝屋川市 坂上高栄

気紛れな時雨が虹のロマン生む

核の傘平和約束出来まますか

季は巡る夾竹桃は咲き誇り

和歌山市 吉村 さち子

なまじ金持つて兄弟寄りつかず

叩かれた西瓜にもある自己主張

追憶がさめて八月十五日

島根県 岩田 三和

足あとは縄文人とおなじ形

青い鳥カゴに入れたら死にました

カッパ着て雨にぬれぬが汗にぬれ

鳥取市 福田 登美

夕立が止むまで客になります

酔う度に大きい話聞かされる

戦後史が納得いかぬ島にある

岡山県 富坂 志重

愛の手をもらうすき間を開けておく

忘れてた団扇の風の涼しさを

拾われた猫が此の頃威張ってる

富田林市 欄 智久

出張費僅かの差額コップ酒

極楽の余り風吹くアーケード

例会は無駄話して茶を濁し

鳥取市 田中 友子

子の歩く道に矢印つけたがる

停電のひととき家族対話する

お隣の電気今夜もついてない

姫路市 服部 一典

今日だけはご主人様のボーナス日

縁組を告げるともしび亡母ゆれる

数合わす新郎新婦招く客

東大阪市 松山 隆

歯車を合わせば明日の計がたつ

永い闇知ってる蟬の熱い声

河下りボルガのテンポなら乗れる

松江市 佐野 木みえ

札幌が近くになつて避暑の旅

オルゴール小樽の町にみせられて

オホーツク海かえれ領土と祈りこめ

岸和田市 磯崎 弘象

指定席頑固に守るタイガース

アトランタ見てたと顔に書いてある

夏休み大腸菌に奪われる

大阪市 亀井 円女

あと僅か哀れでならぬ蟬時雨

何があっても先に逝くぞと威張ってる

バイトした孫が千円くれました

鳴門市 八木 芳水

一服のお茶欲しい時妻は居ず

晩酌をまね薬ほど妻も酔い

妥協する握手片手に何を持つ

和歌山県 中後清史

肩書の未練が邪魔な二度の職

よどみなく流れる代理者の弔辞

しょんぼりと振られたらしく猫帰る

泉佐野市 稲葉 洋

同窓会所詮お里も歳も知れ

四季探しスーパ―にゆく俳諧師

大方は酒と歳とのせいにする

東京都 清原悦子

腹の立つ話が長居させたがる

納得をさせたが酒が苦くなり

指切りをさせられ財布軽くなり

高知県 細木子龍

高卒が女の顔になって秋

消化剤生れながらに丸い顔

土佐湾の夕日が明日に吠えている

徳島県 安宅美代子

乾杯の笑顔錯覚かも知れぬ

真実は誰か傷つく落し蓋

この人をこよなく思う塩こんぶ

豊中市 上田圭津子

ぬくぬくと夫の影に守られる

ゴルフ行く朝の夫は忍者めき

この汗に紙のおしぼりものたりぬ

大阪市 鈴木トヨ子

漂白剤夫婦のシミもとれたなら

小豆めし女になった母ごころ

子沢山 女盛りも知らぬまま

河内長野市 妹背 尽呂久

一病という逃げ持っている強み

窓際を蹴って一本道を行く

回天の奇策ばかりを追う落ち目

大阪市 中井正秀

これも癖 古い札から使います

パソコンがなくても生活困らない

大正も電話でデートしています

宝塚市 黒台伊佐武

艶話すこし疎遠になりました

仲の良い夫婦と他人は言うけれど

一度二度死んで残った付録です

米子市 永井三津子

鉦の音も馴染んで寂し七回忌

夫逝って家族の芯が狂いだす

パチンコと遊ぶ母待つ子の孤独

愛媛県 宮本末子

水打って月の出を待つ星祭り

無駄花は持たないことにしてるナス

保育所で笑いのこさず食べた昼

東大阪市 今岡 貞人

童心のままで亭主の夏休み

雑草で育ちおもねること知らず

最上川茂吉の歌を口ずさむ

河内長野市 印藤 智子

暑いから理由をつけてごろ寝する

真面目すぎ周りの者が疲れてる

豊中市 湯田 敦子

ほどほどにすれば良いのに祖母のぐち

墓掃除お隣さんの草も抜く 池田市 木村 一笛

俺こそが亭主閑白生き残り
赤提灯仏も鬼も呑んでいる

愛情は指の先までもっている

富田林市 山原 昭水
大阪府 澤田 和重

クレヨンに子供に夢がある

少しルーズになって余生を楽しもう

遠慮などするから後で愚痴が出る

熊本市 北川 一進

ゆうゆうと猫は素足を残す緑

夏休み町もあちこち派手な色

夕立に庭の木立も背伸びする

岡山県 国米 きくゑ

反戦歌 蟻が叫んでいる炎暑

ホスピス棟 声無い叫び満ちている

四コマの漫画真理を突いている

岡山県 土居 ひでの

三角も四角も抱いて丸い月

持ち主がなかなか来ない忘れ傘

ポケットの答小出しにして生きる

足元がよたよたしてる離婚沙汰
女ごころ会えば文句を言う甘え 大阪市 三浦 千津子

蛇皮線の哀調 島が揺れ続け
カラオケの絆で軽く手を叩く 和歌山市 和田 美寿子

Tシャツを着れば心も浮いてくる

医療費は無料となって病気せず

唐津市 宗弘

ギャンブルの招きに弱い倦怠期

鳴き果てて弥陀に還ったうつろ蟬

豊中市 岸田 知香子

庭石に漬物石が出世する

傷ついた小鳩元気に夏を越え

羽曳野市 山本 たけし

残照へ歩幅一杯とる余生

パレードは孫が振ってる銀の棒

大阪市 川久保 睦子

バランスが崩れて宙を舞っている
逆回りしている時計持ち歩く

大阪市 中 橋 恵美子

オープンカー笑顔疲れるメダリスト
サラダにも生の野菜が見当たらぬ

寝屋川市 瀧 本 八十八

お茶席で心のおしゃれ娘が競う
青い鳥求め寅さん永遠の旅

愛媛県 安 野 案山子

台風が雨をくれずに通り過ぎ
お酒では癒せぬものが妻にある

兵庫県 倉 垣 恵 美

草刈機までがわたしの音を出し
両方がいい人過ぎて損ばかり

兵庫県 中 野 とよ子

世渡りの下手なカラスの落ちこぼれ
正直の世渡りが行く石の橋

鳥取市 近 藤 秋 星

亡き人が植えた朝顔今朝も咲く
みんな帰って静かになった施設の盆

横浜市 長 島 亜希子

出来合いをしゃれた器に盛って出し
自立せぬ妻が夫に自立説く

唐津市 岩 崎 實

どこからか見られていそう風の音
飲み放題なかなか飲めぬこと悟り

東大阪市 北 村 賢 子

蟬しぐれ今朝もはよから元気やね
肉はよく焼いてカイワレ生だった

熊本県 岩 切 康 子

冷房で立読みさせる待合せ
台風へ深夜移動の植木鉢

鳥取県 奥 田 信 敬

夏椿 観賞止めて酒にする
氾濫の三途の川で生き返る

東京都 瀬 戸 きん子

乳飲み子に猫が添い寝のごさの上
建て変えたビルに燕が舞いもどる

新潟県 高 野 不 二

嘘少しませた話が面白い
七夕へ書いた心の底の底

鳥取市 森 明 美

猫のひたい程の田畑でケンカする
感心な人だと知らぬ人は言う

松江市 安 食 友 子

中年のその物あらわ海水着
つり銭が使い走りをさせる孫

居職する形のままに背も曲り

日本中寝不足にしたアトラクタ

岡山市 清水 金太郎
静岡市 中西 雅

母のような母になりたい遠い道

蟻の列夏バテもなく餌を運び

出雲市 川 島 和歌子

口先で勿体ないと使い捨て

熱帯夜クーラー効いてくしゃみ出る

鳥取県 藤 山 弘 子

土用干しの中に見つけた亡父のメモ

夕立が涼しさ運びほっとする

出雲市 加 藤 スズコ

平和です老いにカラオケ誘われる

一雨がほしいと雲に呼びかける

宝塚市 飯 西 ミサヲ

トイレふたつ今度の家はそうしてね

友達がいっぱい居るから生きられる

香川県 田 中 ふ み

老いの構図まあなく描いて丸く住む

スランプをバネに大師の遍路旅

鳥取市 宮 脇 道 子

老友が話飛ばして止まらない

砂の丘二人並んだ蜃気楼

孫くれたルーペ八十五の祝い
お位牌を命日毎に置き替える

泉佐野市 大工 静 子
北海道 中 里 つね一

解禁のあさかまびすしガンマニア

庭下駄の岩風呂までのこそばゆく

大阪府 団 野 恒

朝風に日毎の習い草むしり

虫の音の誘うまどろみ旅の夜

阪南市 正 橋 正

追い越しを掛けて血圧上げている

ハンドルを握れば君子豹変す

米子市 服 部 朗 子

やさしさは神様からのプレゼント

立て膝を叱ってくれたおばあちゃん

鳥取市 津 村 静 枝

父よりも倍近くまで生かされる

命日に詫びつつ愚痴も聞かせたり

広島県 森 川 抜 智

原子村もんじゅの知恵も及ばない

歌うたう寝言に罪はなかりけり

千葉県 大 川 晩 翠

蓮の花みんな元気で薬用酒

臍出しのキャンディー娘闊歩する

島根県 槻谷 仲子
ハイカラな帽子かぶって若返る
達筆の友へ電話ですましとく

枚方市 森本 節子
いろいろと思うことあり盆の月
モハメット・アリの存在アトラクタ

唐津市 山口 ふさ子
子や孫が見舞ってくれた笑顔見せ
入所したホーム極楽だと思ふ

高槻市 執行 稲子
つつましく縫い代残し生きてます
深夜ベルまさかまさかの計の知らせ

唐津市 林 公一朗
国会でわざわざ使う外国語
久しぶり寝不足さに孫が来る

池田市 藤井 計光
人生の寄り道嫌う頑固者
茶髪でも礼儀作法は心得る

大阪市 島崎 孝一
口ごたえされて気がつく孫の年
アルバムの数が教える親心

大阪市 宮本 奴夫
基地日本判るがここはごめんだぜ
小気味よしパントマイムの水中花

和歌山市 松本 三九
すっぱりと貴方の罫に嵌まろうか
酔い醒めのビールが苦い恋のあと

福岡県 本田 忠男
冬仕度 夏つつがなく蟻稼ぐ
年金のくらし逃がさぬ消費税

尼崎市 松下 比ろ志
信念が頑固の檻を出たがらず
夏祭り寝るまで団扇手放さず

出雲市 榎 ミツエ
朝露をはだしでふんでたしかめる
亡き兄の好きな演歌の琴を弾く

兵庫県 森脇 和子
輪の中の呼吸乱れて雨季に入る
小吉と出る平凡を羨まれ

出雲市 園山 かおる
減反に立って案山子が泣いている
神宿る出雲に生きて注連を縋う

羽曳野市 三好 専平
ネクタイとローンに首を締められて
報告書だけは立派なお役人

兵庫県 大谷 幸次郎
こぼれ種どっこい芽吹き陽を浴びる
一夜明け葉書訂正したくなる

羽曳野市 安芸田 泰子
終戦忌あの日と同じ夾竹桃
夏に負け孫の声さえうとましい

三重県 長野 恵美

夢一つみる幸せの汽車にのる
ラップして幸せ色に変えました

松江市 小西 素子

ベレー帽被って今日はどこへ行く

作業帽 夏草匂う風がある

鳥取市 山本 崇

米を食う田植稲刈り知らぬ虫
むし暑い急に散髪したくなる

滋賀県 中 宗明

あこがれのホールインワン夢心地

過疎の村 男盛りの影がない

前 月 分 鳥取県 橋本 多哥由

札幌に負けぬ自信は持っている

炎天の次に夕立欲しくなる

若者は身勝手ばかりして困る

お知らせ 古川柳「柳籠裏三篇研究」は九月号で

完結しました。平成九年一月号から新たに古川柳に

関する記事を掲載いたします。

(編集部)

川柳塔まつりについて

第二回川柳塔まつりを表紙裏掲載の要項により
実施いたします。

△ご参加について△ 今回の平成八年度同人総会
について、理事・参与の皆様には葉書でご案内を
差し上げましたが、今年は役員改選を行うことと
なっておりますので、一般の同人の方を含めて多
数ご参加をお願いいたします。

△新同人の皆様へ△平成七年十一月以降に同人
となられた方は、懇親会席上でご紹介申し上げ、
歓迎行事と記念品贈呈を行いますので、ぜひご参
加ください。

△ご宿泊について△川柳塔まつりの前夜および
当日のご宿泊を申し込まれた向きについては朝食
も含めて八〇〇〇円でご幹旋いたします。ツイン
・シングルは、本社へお任せください。

△川柳塔碑の参拝△川柳塔まつり翌日(10月20
日)の高野山大霊園内「川柳塔碑」へ参拝を希望
される方については、南海電鉄の特急券と昼食を
本社で手配いたします。経費は七〇〇〇円の予定
です。なお、十一月には物故者の新合祀を行うこ
ととなっています。

川柳塔社

平成八年度 路郎賞



うたかたの世や晩学の手暗がり

富山市

舟渡 杏花

吉岡 美房

うたかたの世や晩学の手暗がり
愕然と定期の齢をみつめたり
舟渡 杏花
玉置 重人

板尾 岳人

蚊を叩くとても小さな地獄絵図
理髪店出て世の中はまぶしいぞ
高瀬 霜石
桑原 道夫

小池 しげお

黙祷の目が一分で開かない
抽斗に空き箱のあるあたたかさ
柴田英千子
桑原 道夫

準優秀作 第一席

水族館の硝子に映る恋人よ

堺市 桑原 道夫

小島 蘭幸

準優秀作 第二席

この街が好きで

自転車漕いでいる

米子市 金山 夕子

河内 天笑

久びさに逢うて優しい人やさし
この街が好きで自転車漕いでいる
渡部さと美
金山 夕子

柳 歴

昭和五十年 川柳えんびつ
社入会

同五十二年 同 同人

同五十六年 川柳塔社誌友
同 同人

花 杏 舟 渡

私こと二年前に思いもよらぬ大手術をうけ、三途の川を往つたり来たり、果ては臨死体験までも……。それが神仏のおかげで甦り、この度の嬉しい賞を頂き、その言葉も見つからずただ万感胸に迫り、ああ生きていてよかった……。この上は、私に残されたくばくの余生を私らしく一生けんめい生きてゆきたいと思います。本当に有難うございました。

選後のことば

橘高 薫風

ここ数年の二賞の最優秀賞受賞者は、男性と女性お二人が交互に獲得されていて、今回も同じ形になった。

路郎賞の舟渡杏花さんは、先に受賞された林はつ絵さんの令妹で、姉妹揃っての榮譽を得られたことになる。病軀をおしての気魄ある句を寄せ続けられたたまものであろう。

平成八年度 川柳塔賞



洗うてもまた洗うても軍手なり

兵庫県 倉垣恵美

準優秀作 第一席

取り巻きになるには

骨が硬すぎる

推薦句

榎本吐来

準優秀作 第二席

困った子困った子だと自慢の子

大山市 早川盛夫

政見放送 住みよい国になりそう

困った子困った子だと自慢の子

小林 由多香

風みどり空気の軽さ身の軽さ
洗うてもまた洗うても軍手なり

三浦千津子
倉垣恵美

宮口笛生

健康がうれしい今日も腹が減る 岸本 宏章
齢の順には死なぬこの世はあみだくじ

石川 勝

川島 諷云児

吹き降りにやつぱり欲しい男傘 藤田 泰子
一匹で生きたる微罪を繰り返す 一本 勇太

福本英子

ここからがほんとの夫婦下り坂 藤田 泰子
取り巻きになるには骨が硬すぎる

一本 勇太

美 恵 垣 倉

「ええうそ、ほんまノ恥すかしいノ」。手にする受話器とともにびつくりです。毎月一回のささやかな川柳グループの集いに、ユーモアを交じえてご指導下さる遠山可住先生の声。拙い句ですのに。ここまで支えて下さった方々のお陰です。今、真っ白になった心で、ご恩返し
の精進をと思い居ります。よろしくご指導くださいませ。本当にありがとうございます。

柳 歴
昭和六十一年 玉水川柳講座
座人会

昭和六十三年 川柳塔社誌

友

受賞作品

弘前市 斉藤 岳

朝の電車で青春に囲まれる
軽音楽聴かせておこう種袋
川が澄んでいるこの街の身だしなみ
りんご園に脚立ある風景が好き
ふる里の山に落ち着く旅疲れ

評選をさせて頂くことの辛さ苦しさは、佳句に出会えるように
こびで打ち消され、感動したり、励まされたりの繰り返しでした。
最終の選をさせて頂くに当たり、じつくりと十二月を振り返り、
折る思いで対峙させて頂いた結果、お人柄の進む真摯な作風が心を
捉えて、斉藤岳さんの作品を平成八年度の渺湖賞と決めさせて頂き
ました。

準賞作品の水田暁風さんには、ご高齢でありながら、感性溢れる
個性的な作品で渺湖抄をお引き立てくださり、林荒介さんは昨年に
続く佳句を頂き、田中叶、西出楓葉、奥田みつ子、春城年代のみな
さんの作品は何時までも心に残るものでした。
(小出 智子)



斉藤 岳

仕事がどんなに忙しくても、毎月欠かさず投句すること
とを心がけてきました。この度、渺湖賞受賞という思わ
ぬ通知を頂き、ありがとうございます。川柳とは何か、
人間とは何かを探るとき、川柳の道は深く果てしないも
のがあります。これを励みにさらに勉強しなければと思
っています。今後とも、ご指導をよろしく願います。

準賞作品

宝塚市 水田 暁風

午前二時今は老いたる鬼の時間
割れる音をしっかりと抱いて冬の壺
鍋も皿も摺子木もある編集後記
けだものの気配を包む春の闇
影はふたつ黄昏れながら揺れながら

米子市 政岡 日枝子

薔の中の囁きが洩れてくる
窓あけて誤解に風を入れてみる

和歌山市 古久保 和子

少し波立つダム湖の底は秋祭り
めし茶碗はっこり持てるのを選ぶ

柳 歴

昭和五十八年 青森農業「川柳道
場」投句

昭和六十年 川柳塔社誌友
昭和六十二年 川柳塔社同人
平成三年 路郎賞受賞

受賞作品

西宮市 牧 渕 富喜子



牧 渕 富喜子

評 阪神大震災から二度目の盆を送って、茴香の花の作品を久しぶりに読み返してみますと、あれからの月日をどんな思いで生きて来られて、一途にそれぞれが句に書かせて書いてくださっていたかと、喉のあたりがつまってこみあげてきました。その中でも牧渕富喜子さんの一連の川柳は、真実があふれ、押しつけがましい感じはなく、面識のない方ですが、私は心底から納得して評価しました。信頼度の高い作家だと思います。良い句をいただけて嬉しい時間でした。

(八木 千代)

準賞作品

高 田 美代子

秋の天 思い違いはせぬように

何時のまにゆがんだのやらよろけ縞

本 間 満津子

あそびましょ言うているのはおぼはんたち

わたしが厭なことは他人も厭である

奥 田 みつ子

バラが咲くと思う必ず薔薇は咲く

春愁に自分の長所挙げてみる

春 城 年 代

この町のおんなも老いてしまいいけり

非常袋の中の季節が狂い出す

心身とも一つの節を迎えた、新居での夏に考えてい

た矢先、思わぬ受賞の報に接しました。震災後、落ち着

かぬ焦燥の中で今、中断すれば雪崩の如く押し流される

であろう姿が見え、ともかく今を書きとどめるべくお励

ましを頂きながらの日々でした。「本当に頂いて良いの

でしょうか？」を揺れる自分に言い聞かせております。

柳 歴

平成二年四月

平成七年三月

西宮北口川柳会入会

川柳塔社誌友

川柳塔社同人

受賞作品

和歌山市 山根 めぐみ

遅れても我が道をゆく蝸牛

準賞作品

米子市 林 荒介

屋上に話し足りない日が沈む

評 ひとつの目標に向かうと人間は強いものです。他人がお金をたんと貯めようと宝石で身を飾ろうと、気にならなくなるものです。この句に共感。(河内 月子)
トップでテープを切る走者はもとより讃えられるべきですが、先頭集団でなくとも自らのベストをつくして走るランナーの姿も美しいものです。コツコツと努力する人には、いつかは栄光が輝くでしょう。(田中 正坊)

候補作品

仮縫いのままであなたに嫁ぎます 門谷たず子

迎え傘この子も腕をすり抜ける 渡辺 南奉

合格を陰で喜ぶ百度石 川崎ひかり

凜として辞書は噂を寄せつけぬ 政岡日枝子

角砂糖溶けて結論話しだす 吉村さち子

きつと履く日の靴がある車椅子 野村 京子



山根 めぐみ

夢のような受賞のお報せ頂いた時、狐につままれたように暫くびっくりして動けませんでした。すばらしい先生方や先輩の方々のご指導を頂いたお陰と感謝一杯でございます。婦人活動やボランティア活動で翔んでおりまして、多事多忙の毎日ですが、精いっぱい素直に自分自身心の中心を自分の言葉で表現していきたいものと、またまた決意を新たにいたしました。今後ともよろしくお願いたします。有難うございました。感謝合掌

柳 歴

平成五年 三幸川柳教室入会
平成六年 川柳塔社誌友



新家 完司

受賞作品

鳥取県 新家 完司

安いのでいいよ最後に入る箱

準賞作品

西宮市 秋元 てる

一瞬に無くした物と得た絆

竹原市 小島 史子

一つずつ見つける友のいいところ

評 何れ皆箱に入れられるのだけれど、他者を思いやる優しさだけは失いたくないものです。(宮園射月芳)
飾らない語り口の完司さん。震災体験のてるさん。蘭幸・史子さん親子。皆さんおめでとう。(奥田みつ子)
人生最後の祭典、有名人でも葬儀を省略する時、人に迷惑をかけたくない気持を表現ズバリ。(春城武庫坊)

候補作品

滝の音誰も責めてはおりません 小島 蘭幸

一位泣き二位さばさと表彰台 井上つよし

ゆっくりと噛んで頭に叩きこむ 北山 悟郎

罪消してみても修正液の白 山田 高夫

十年日記いくたり人とわかれしか 田中 正坊

この世のことはこの世で終る日記帳 西出 楓楽

遅い子に合わせてくれる縄電車 林 はつ絵

柳歴

昭和五十九年 川柳塔社同人
昭和六十年 川柳展望会員
平成元年 句集「平成元年」発刊
平成五年 句集「平成五年」発刊
平成八年 川柳大学会員

各地柳壇に掲載された膨大な句の中から選ばれたことは正に僥倖そのもので、恐縮いたしております。鳥取県には二十七の地域川柳会があり、それぞれが月例会を開いていますが、私が出席しているのはせいぜい四つくらいです。今後とも義理やおつきあいで出かけるのではなく、真剣勝負の心構えを忘れず、楽しく交流を続けさせていただきます。

水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

川端 一步

子を叱る私を嚇る血をしかる

藤田 芳郎

実にすばらしい句だと思えます。中七にも

及ばない私は、下五に震えました。人生経験

を積んだ人でないと作れない秀句。

驚いた蟻に二割の怠け者

川田 晋

働きものでよく詠まれている蟻をリアルな

目でおもしろく観察。読者に大きなイメージ

を与えたと思います。

少しだけ力抜いてもいいですか

中井 アキ

上五の「少しだけ」という表現に人間の魅

力を感じます。読者はこの味わいの深い佳句

に多くの共感を得たことでしょう。

燃え尽きるまで縄をなう太くなう

渡辺 南奉

川柳をはじめたころ、「十七音字で人生の

機微などとても詠めるものでない」と思っていました。その不遜な考えに「ゴッソ」とお目玉をくらったような秀句。

常識が子とどうしても折り合わず

朝倉 大柏

そうなんです。親子で激論の末、「お父さんたちは古いんや」でチョン。永遠の課題を

とても素直にまとめて好感をもちました。

エリートが面子を伏せて二度の職

野瀬 昌子

下五の「二度の職」にどれだけの深い思いがあるか、それは経験者でないと分かりません。

パピルスとはるかな時を溯る

楠見 章子

パピルスに書かれているのは古代エジプトの絵地図でしようか。余計な詮索はロマンを壊します。スケールの大きさに脱帽。

無防備な微笑みふつとしてしまひ

上鈴木 春枝

日常ありふれた動作をうまく詠みこなすセンスのよき。川柳のエッセンスのよいなものを感じました。

風に遊ぶ綿毛へ少し嫉妬する

塩路 よしみ

風に遊ぶという玄妙の世界と下五のまとめ

が句姿を一層よいものに。蜘蛛が上昇気流に乗って遠くまで移動する情景が浮かびました。茶髪から席ゆずられて落ちつかぬ

水谷 笙子

四月から高校の授業を聴講していますが、茶髪の青年がいつも「今晩は」と挨拶をしてくれます。

顔のしわひとつすじ毎に増す魅力

伊藤 ふみ

美しく歳を重ねるという願望を見事に詠みあげ、しみじみとした味わいのある句。

秋ですよ蝶が耳打ちして回る

斎藤 房子

亡母はこおろぎの鳴き声を「さむなる、つずくれ」と鳴いていると教えてくれました。

夏の蝶は何とささやいて行つたのでしょうか。中七がとても美しい。

九条を明日の世界へ広げんか

山本 たけし

今日の平和の背骨に九条があります。世界平和への思いがとても嬉しくて……

6日の芯が怒りを許さない

森 明美

『ペン』は剣よりも強し』ということを死語にしてはならない警告の句と受けとめて。

沙湖抄

小出智子選

男ひとり枕の位置が定まらぬ
朝顔を咲かす男の独りのめし
爪噛んで捜すころの置きどころ
今だけしか言えぬ言葉が出てこない
木洩れ陽の路からヒント持ち帰る
音楽が聞こえる胸に顔を埋め
錆びた釘曲った釘のある旧家
誕生日今年も梅干が旨い
炎天下愛はもうさを見せはじめ
Uターンを喜んでいる地蔵さま
秋灯下妻の産毛を剃ってやる
辻褄をとにかく合わす午後六時
いつの日も舟を数えてから眠る
人老いて月夜にワープロを叩く
完熟を黙って柿と待っている
わたしかもしれぬ走っている蟻は
八月の雲よ勲章とは何ぞ
おだやかな海をもの足りなく思い
金の成る本は書棚に五六冊
雪隠の隅で死んでる黄金虫

藤井寺市	田中	透太
大阪市	西出	楓楽
米子市	林	荒介
弘前市	肥後和香子	
今治市	月原	宵明
弘前市	斉藤	嘉
和歌山市	堀畑	靖子
宇部市	平田	実男
尼崎市	田辺	鹿太
寝屋川市	籠島	恵子
鳥取県	鈴木	公弘
尼崎市	田中	薫
宝塚市	永田	暁風
和歌山市	木本	朱夏
岡山県	小林	妻子
鳥取県	西原	艶子
唐津市	宗	弘
鳥取県	新家	完司

新刊書本屋の風が入り乱れ
孫婦り風鈴の音だけになる
掌に葉害しのび寄るらしく
娘と話す心を写し合うように
職業は無職と書いてはばからず
母の写真とる口実が見つからぬ
空間を大切にしておい楽し
炎天のポストはピクリともしない
何も言うことなし黒は黒であり
農を継ぐひでり豪雨に泣きながら
地図にない岬回ってからの風
孤独ではないぞ郵便物届く
毒吞んでしばらくわたし美しい
どんぐりのひとりがいつも背のびする
黄昏の大和路をゆく今は旅人
慟哭を埋めた土が灼ける八月
朴訥へ書き足す妻の但し書き
定年と知らず目覚し鳴っている
アングルを変えても変らないあなた
一人あそび僕はえんぴつ妻は筆
メルヘンの里に今年も柿たわわ
茄子一つ実って妻がもて余す
レモン切る秋の言葉が洩れる朝
食進む大きな役が解けた朝
一筆で画いたダルマに睨まれる
一人になって涙あふれるままでよし

八尾市	高橋	夕花
富田林市	片岡智恵子	
尼崎市	春城	年代
八尾市	宮崎シマ子	
海南市	三宅	保州
鳥取市	美田	旋風
今治市	越智	一水
和歌山市	川上	大輪
島根県	松本	文子
唐津市	市丸	晴翠
西宮市	奥田みつ子	
松原市	玉置	重人
堺市	たにひらこ	
八尾市	宮西	弥生
東京都	瀬戸きん子	
川崎市	和泉見早子	
綾部市	藤田	芳郎
香川県	木村あきら	
堺市	宮本かりん	
豊中市	田中	正坊
和歌山市	宮口	克子
横浜市	金森	徳三
尼崎市	春城武庫坊	
和歌山市	田中	みね
横浜市	宮村ちよ路	
大阪市	稲本	凡子

子育ての杭は深目に打っておく
無口になった時から風の日が続く
夏日透明亡母の背さする墓さする
ユトリロの街で待たせてみたい人
散歩する花と心を通わせて
寂しさと呑気いつでも仲がよい
畳み皺 月日は容赦なく進む
こだわらぬ齢に厳しく咎められ
図書券で買う気のしない週刊誌
紙ヒコキ折って宇宙を泳がせる
泥水が澄み切るまでは黙秘権
致死量を心得喧嘩しています
峠まだ上り下りの坂つづく
咲く花に父の命日教えられ
連作をきらうトマトの自己主張
遺書をかく筆がなかなか見つからぬ
孫達の夏だ白い皿に変える
淋しくて七十歳の反抗期
エンドレステープをはなせない余生
花を折る花の信頼裏切つて
盃蘭盆の乱をおさめる稲光
蟬しぐれわたしもいまを生きている
行くあてがないのでゆっくりと泳ぐ
缶ビール横目に企画書などを読み
のぞみ号行く手は晴と決めている
弾みすぎ毬は塀から出てこない

倉吉市	淡路ゆり子	香川県	川崎ひかり	弘前市	佐治千加子	唐津市	久保 正剣	西宮市	西口いわゑ	八尾市	村上ミツ子	堺市	桜沢あかり	大阪市	本間満津子	弘前市	相馬 銀波	米子市	林 瑞枝	鳥取市	森 明美	和歌山市	川上 富湖	和歌山市	山田 高夫	松原市	小池しげお	米子市	寺沢みどり	西宮市	門谷たず子	吹田市	山本希久子	和歌山市	山根めぐみ	八尾市	村上 剛治	米子市	政岡日枝子	鳥取県	土橋 螢	八尾市	大内 朝子	藤井寺市	高田美代子	出雲市	竹治かし	国分寺市	山口 新子	米子市	澤田 千春
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	------	-------	-----	------	------	-------	-----	-------

ひと許す心のひだがたためない
母上と書いた息子の初便り
喧騒の夏が終わった無人駅
遠花火昔のことは話すまい
傘立てに傘下駄箱に靴がある
姉といて逆光線にいつも居る
美しい散り際はかり考える
五七五確かな今を書き記す
細々と昔気質で続く店
病母の記憶ブツンと切れて童女かな
二回目の盆やっぱり君を忘れない
風の音のひとつとこ涼し僧の鈴
心の奥知っていたのはポストだけ
迷いをば車軸の雨に押し流す
一人居の風呂を鏡に見つめられ
花菖蒲競うつもりはさらにな
インパクト強くて愛が育たない
置き石をするカラスにも一理あり
決断をするには腹が減っている
実母の余生いく度呼んで確かめる
ほどほどが薬です百歳の笑顔
老いらくのデートへ拍手おしまない
実直な親でいびつな円を描く
全身麻酔もう目覚めないかも知れぬ
占いに凝って出口のない迷路
二、三人聞き大衆の声とする

横濱市	近藤 道子	出雲市	吉岡きみえ	砂川市	大橋 政良	倉敷市	田辺 炎六	唐津市	松本 圭	岡山県	福原 悦子	出雲市	園山多賀子	米子市	永井三津子	横濱市	秋元和歌子	米子市	金山 夕子	鳥取県	さえきやえ	熊本県	高野 宵草	大阪市	鍛原 千里	寝屋川市	堀江 光子	和歌山市	松崎 幸子	仙台市	川村 映輝	和歌山市	細川 稚代	大山市	早川 盛夫	鳥取県	田村きみ子	米子市	白根 ふみ	枚方市	濱田 良知	米子市	小西 雄々	倉吉市	米田 幸子	高槻市	江原 秀夫	寝屋川市	坂上 高栄	旭川市	朝倉 大柏
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------

リハビリで一緒に歩いている日課
カタカナの渦に刃向かう辞書を買
輝いた一つ話をくり返す

妻のうたた寝顔はテレビを向いたまま

自販機が気にする米の氏素性

ボールペンの速さで今日を書き終る

訃報届き妻は黙ってリング割く

真心でくずせばこころ開かれる

名月を寝転んでみる老いふたり

親が言うから大学に通ってる

甲子園の土を宝にする息子

おじいちゃんだけが叱らぬ通知表

無人駅夏の帽子が乗りおくれ

あすの夢画ける若さ羨まし

忘れないうと泣く人がありありがたく

句の娘の輝きすこしもらっている

和歌の浦見晴らす墓に父母眠る

海の日夕陽に棧橋で染まる

自己嫌悪上手に折れただまし舟

しみじみと魚がおいしい日本海

段差ある言葉じっくり噛みしめる

老犬を叱れば共に悲しくて

六人を育てて強い鼻柱

あした咲く朝顔へやる甘い水

鶴を折るみんな少女の顔をして

ストレスをためて秘密を守ってる

河内長野市 植村 喜代

和歌山市 青枝 鉄治

倉吉市 野口 節子

寝屋川市 江口 度

弘前市 岡本 花匠

和歌山市 古久保和子

枚方市 前 たもつ

大阪府 榎山 隆

鳥取県 土橋 睦子

横浜市 菱田 満秋

鳥取県 土橋はるお

唐津市 浜本久仁於

横浜市 荒井 広和

岡山市 井上柳五郎

八戸市 島田 昭治

米子市 足立由美子

和歌山市 岩本美智子

大阪市 町田 達子

倉敷市 小野 克枝

米子市 中井 ゆき

大阪市 一本 勇太

池田市 岡本吉太郎

米子市 石垣 花子

和歌山市 吉村さち子

和歌山市 中山 雅城

弘前市 松尾柳石子

大阪市

五感から若さが散って行く憎さ

巣立つ子の背を見て亡母の心知る

眼鏡まで曇る心の貧しさに

妻や子の笑顔へ我慢増えてくる

ゴキブリを殺す仏を拝む手で

生きてゆくためなら惜しまない苦労

齢も秋まですは股引きはいて出る

久し振りに好きな白百合活けて待つ

草餅の香りの中に亡母がいる

もてた日を話せば孫も子も笑い

一人娘でない三分の一分けるはず

ブライドを捨ててバーゲン選っている

赤飯もバックで買ってきて来てひとり

入院の姉には夏が終わってる

着る人が着れば納得する鏡

裏の裏見すぎたタルマ目描けぬ

田中透太さんの句。「枕の位置が定まらぬ」と切実な心情を赤裸々に表現されて、それが嫌味なく読む者に伝わってくる。ひとりの暮らしをじっくりと見据えて生きておられる。西出楓楽さんの句。目まぐるしいばかりの身辺の出来事に振り回される一時期があり、ふと自身の足元を見詰めると、心の遣り場を失ってしまったことがある。林荒介さんの句。何の街にも力みもない。こんな自然なかたちで作品が書けることを素晴らしいと思う。肥後和香子さんの句。顔を埋めた人の胸から聞こえるのは音楽だというのが、それはきつと愛の鼓動に違いない。月原宵明さんの句。釘というもののイメージと重ねるとき、「旧家」という止め方が深い意味をもつ。

兵庫県 北川とみ子

横浜市 後藤 早智

唐津市 田口 虹汀

鳥取県 石谷美恵子

岡山県 江口有一朗

和歌山県 玉置 当代

横浜市 上野 天々

岸和田市 古野 ひで

今治市 中村 好恵

岡山県 矢内寿恵子

横浜市 丹下智洋子

東大阪市 安永 暁子

八尾市 生嶋ますみ

大阪市 藤田頂留子

横浜市 川島 良子

羽曳野市 芦田 絢子

大阪市 川久保睦子

苗香のむ

西出楓楽選

恰好の穴に出合えば落ちてみる

プラスマイナスいい按配がむずかしい

夕暮れは埴輪の口になだれ込む

まだ生きるつもり気軽に死の話

亡夫の打った釘もばつばつ錆び出した

幸せが続き用心深くなる

悔しいが負けて勝つのに慣れて来た

泣き顔をやはり見たくはない鏡

思い出が梢にぶらりかけてある

来るものは来るしっかり食べておく

杓子定規な風で落葉が溜り出す

よい答ワンバウンドして手の中へ

樹の下でやがて私も森になる

転んでは小さな宝掘んでる

どこにでも寝られるという武器を持ち

旬の話 聞いて私の耳洗う

猜疑心グサリ人參乱切りに

はんべんの白さに負けぬ意志すつく

腹の立つことばかり小魚食べている

米子市 寺沢みどり

米子市 白根 ふみ

和歌山市 福井 桂香

今治市 村上久美子

米子市 石垣 花子

和歌山市 吉村さち子

米子市 茂理 高代

鳥取県 岩崎みさ江

米子市 足立由美子

和歌山市 木本 朱夏

西宮市 牧淵富喜子

大阪市 三浦千津子

米子市 野坂 なみ

和泉市 中川 楓

寝屋川市 森 茜

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 川上 富湖

弘前市 肥後和香子

西宮市 奥田みつ子

四世代潜って背なもまるくなる

頼まれて神さん思案してばかり

そもそものが続いて渦がおさまらぬ

暑さには弱い私のコンバクト

罪を消すつもりアロエの苦さ飲む

塩辛い母のおにぎり甘かった

年金のふところ風も通り抜け

弁解の悔いをのこした長電話

どんぐりがコロコロ森もさわざ出す

天を拭く雑巾 毎日さしてます

しがらみもいつか流れる長い川

望郷へ祭り囃子が遠く鳴る

揚げ花火あなたにあげる心です

古稀という花のスタートきりました

そう言えはあの時だっと思ふ事

深追いはしないレモンという果実

冷静になって接着剤探す

現実には甘くなかった柿の渋

受け皿が欠けてうろたえてる私

真つすぐに歩いた道だ振り向かぬ

悪口を言ってる顔が楽しそう

わたしの影と幸せごっこして暮す

多少褪せてもやっぱり虹を追うてみる

夕顔に物想う刻貰いけり

達筆へ出すお見舞は十七字

出雲市 園山多賀子

大阪市 本間満津子

和歌山市 桜井 千秀

大阪市 鍛原 千里

和歌山市 山根めぐみ

鳥取市 坂田和歌子

寝屋川市 坂上 高栄

八尾市 高橋 夕花

今治市 野村 清美

寝屋川市 太田とし子

米子市 澤田 千春

鳥取県 石谷美恵子

西宮市 西口いわゑ

鳥取県 田村きみ子

和歌山市 田中 みね

和歌山市 宮口 克子

和歌山市 古久保和子

大阪市 日阪 秋子

和歌山市 堀畑 靖子

倉吉市 淡路ゆり子

芦屋市 黒田 能子

大阪市 稲本 凡子

米子市 政岡日枝子

鳥取市 森 明美

寝屋川市 平松かすみ

青春の林檎の味がなつかしい
不器用だが釘のいっぽんなら打てる

今年またかなわぬ願ひ短冊に

一本道歩き弥次郎兵衛になった

朝歩きして来てきたと朝寝する

広告に美人になると書いてある

恵まれた恩は背丈をとくに越え

子育てはこうだとつばめ軒で説く

背番号付けられそうな新世紀

墓場まで持つて行く気で惚れている

三十五度 都会の窓は冬のように

沈黙を守り通した石畳

受話器置けば新しい飢えが始まる

定位置になれて指紋がうすくなる

からませた小指が知った針の数

寡婦生きる世間の波が荒くなる

きゅうりもみ母の元気な朝がくる

草笛よ河童一匹踊らせる

湖にひたして心青くする

まだマスで計れるほどの苦勞です

星まつり天女もゆらり降りて舞う

隅に座しわたしの影が見当らぬ

漬物をゆとりの中であれこれと

秋耕の鍬どの田にも見当らず
夕立の下からも降るアスファルト

大阪市 三輪 式美
和歌山市 松原 寿子

横浜市 後藤 早智

米子市 林 瑞枝

大阪市 渡部さと美

寝屋川市 岸野あやめ

横浜市 伊藤 ふみ

今治市 越智 青園

横浜市 清水 潮華

堺市 山本 半銭

大阪市 神夏磯典子

和歌山市 田中 輝子

川崎市 和泉見早子

羽曳野市 吉川 寿美

横浜市 近藤 道子

香川県 山地マツエ

横浜市 宮村ちよ路

堺市 たにひろこ

鳥取県 松本 文子

鳥取県 さえきやえ

鳥取県 土橋 睦子

今治市 塩路よしみ

米子市 服部 朗子

守口市 結城 君子
寝屋川市 堀江 光子

他人の顔ばかりがふえる茄子の花
ブラウスの派手な色買う出来どころ

よく見える眼鏡にかえてから記憶力

人間が匂をまどわすので困る

一粒の種から百の夢探し

プラス思考であすのいのちを塗りかえる

終戦の風を知ってる夏帽子

あこがれが毀れぬように目を瞑る

本当の愛で仔猫は甘やかさぬ

怖いもの見たさ誘いに乗ろうかな

気がつけば合掌しない日が続き

エアコンの音が静かで落着かぬ

炎天の男作業着たのもしく

今治市 野村 京子
熊本市 永田 俊子

八尾市 宮西 弥生

米子市 中井 ゆき

岡山県 山本 玉恵

貝塚市 池田寿美子

弘前市 一戸 ツネ

鳥取市 植田 一京

富田林市 藤田 泰子

横浜市 丹下智洋子

鳥取県 西原 艶子

堺市 桜沢あかり

大阪市 松尾柳右子

寺沢みど里さん——「恰好の穴」とは含蓄のある表現だと思ふ。

毎日の暮しの中で、ふと興味を覚えた事柄に果敢に挑んでみる。

前向きで、しかも堅実な作者の人物がうかがえる。白根ふみさ

ん——例えば、ほんの少しの塩が甘味を強くするように、マイナ

スがプラスをより引立たせる場合がある。それを、冷静な目で

生き方に当てはめた、過不足のない表現が好ましい。福井桂香

さん——ばかりと空虚な塩輪の目と口が、ひどく人間味を帯びて

身近に迫ってくる。作者の感性の豊かさの、たまものであるう。

村上久美子さん——人間のエゴ、弱さが軽妙に詠まれている。遠

まわしではなく、直接ズバリと言った方が、題材によっては

このように効果が上がり小気味よい。

兄弟

藤田頂留子選



弟は兄の行動見て育つ
お下がり兄の威厳を背負い込み
兄思い弟思いが世を沸かす
兄弟で金銀嬉しアトラクタ
ももとは皆兄弟で地球人
不揃いに見えても兄弟似ています
マドンナの艶に群がる義兄弟
離れても兄弟同じ事おもつ
兄の樹の高さを飛べぬ竹とんぼ
子福者の二男三女はみな達者
賞めるより叱ってくれる兄がいる
ライバルは弟何時も横にいる
同じつる長男西瓜だけ太い
兄が家継ぐと限らぬ時勢来る
兄ちゃんが空を見ていた金魚の死
兄弟が一緒に泣ける墓がある
遅咲きのスターになった金と銀
どんぐりの兄弟会で長続き
次が出来太郎親指しゃぶりだす
ぞうすいで育てた兄弟母おもい
相続に素顔揃える異母兄弟
時どきは異母兄弟に乱気流

あきら 洛 醉 崇 清 芳 高 夫 ひ で 公 一 朗 好 恵 寿 美 隆 隆 久 美 子 タ ミ 悦 男 芳 郎 佳 雲 佳 子 鐵 治 清 史 芳 水 智 洋 子 子 龍

兄弟が違ふ期待を背負われ
兄だけが帰らなかった枕元
人類はみな兄弟でない兵器
遅咲きの兄弟に期す親の夢
兄弟の父を越えんとする野心
子沢山派閥に悩むお母さん
兄弟で守る父なき母の海
兄弟で一つの橋を架けている
兄弟で夕焼け空に母を待つ
甲子園めざして兄の後を継ぎ
兄弟の血を呼び戻す樹をゆする
つくものがつき兄弟の車間距離
兄弟が七人父のよき遺産
兄嫁がまぶしくなった濡れ枯梗
姉妹して兄を助ける菊畠
佳
兄弟と聞いて総てを納得す
賢兄の弟が抱く不発弾
兄弟でも想いは別の酒を酌む
森を出て兄と訣れた日の茜
究極の場で兄弟の許し合い
人
兄弟と思うからこそ腹が立つ
地
兄弟のはざまで揺れる指人形
天
兄弟で母の荷車押す峠
軸
兄弟は両の手みたいと頼りあい

艶 子 大 輪 花 匠 幸 子 俊 子 荒 介 豊 俊 路 京 子 勝 巳 美 代 子 虹 汀 登 美 あ ず ま 雄 幸 哲 子 玉 恵 高 栄 勇 太 浜 本 久 仁 於

待つ

板垣草丘選



話したいことを整えて待っている
攻めことは用意して待つ喫茶店
母親の童話を待つているパジャマ
大器晩成母は死ぬまで待つている
百点待つとは知らぬ千鳥足
遠洋の夫待つ間のレオタード
待つている男見てからルージュ引き
孫を待つ童話先読みしておこう
子の帰省待つ賑やかな台所
父さんを待ちくたびれた誕生日
朽ち果ててまだあの娘待つ村の橋
待った甲斐あって四十の岩田帯
行列を尻目にゆったり指定席
無にかえる日待つ彼岸花の朱
残り火が風の流れを待つている
待たされて一人手前で売り切れた
待つ人がある幸せを皿に盛り
子の錦待ちくたびれたさびた門
目撃の証人となる信号待ち
誘惑をちよっぴり期待夏帽子
来る来ない花びらむしり待ちばっけ
列車待ち里の母さんまだ降りぬ

艶 子 悦 男 正 雄 シ マ 子 芳 郎 正 剣 ま さ と 和 重 ち か し 典 子 恭 昌 久 美 子 吟 平 希 久 子 清 芳 喬 水 安 美 代 子 ア キ 哲 子 よ し み 和 枝 一 齋

定年の港に妻が待っていた
もつ少し待とう誤解もとけるなら
ヒントまだ待ってる妻の独り言

いい知らせはしくて花に水をやる
留守中の撒水頼まれ土産待つ
コンバイン磨いて秋を待っている

自家菜園はさみ待つて居るのです
持久戦はんとは焦つて居るのです
秋を待つ新しい画布買いにゆく

蠅の羽化息詰めて待つ夏の宵
点滴のリズムと夜明け待ちわびる
命大事に保険の満期待っている

思慕じつと埋めてあなたを待っている
バス十分待てば個性が動き出す
雑踏に他人の顔で待つ夫

待つだけで来てはくれないかぐや姫
青春の風に待ったは聞こえない
出番待つようにも見える有事論

待ち侘びて化石となった愛の記憶
待っているキープボトルのささやき
荒介

王子様いつまで待ってもあらわれず
箸置きで位置で生涯待ちつづけ
地 主

縄文の壺で咲く日を持った種
天 寿恵子
軸 海老池 洋

待つほどにまつたけ山に雨が降り

珍 しい

森井菁居選



珍しい事故偶然がふたつ三つ
珍しく折れる頑固をふと案じ
珍しく父が酔つてゐる祝い酒

愛しているなんて言うから雨になる
珍しい石を拾つてからの運
珍しくヤングに席をゆずられる

百姓がネクタイするとか何がある
岩を割り前世を今も探している
珍しく父が怒つたから怖い

珍しく父が漫画を読んでいる
珍しく父がやぶどうに種がありました
珍しきだけで終らぬ野茂の意地

珍しい話は野山越えてくる
珍しいものがなくなる食文化
忘れてた人とバツタリ夢で逢う

母の部屋まだ生きていた鯨尺
初物が仏壇にある一周忌
珍しがりやでグルメの旅が好き

ひと夏を珍種の菌がかきまわす
自画自賛して珍しい菊の出来
白光子

珍しい土器少年が掘り当てる
地 弘
潮 華

珍しく夫がほめる夏帽子
天 正雄
軸 相馬 銀波

外人の瞳に風習が珍しい

ただし

高 夫

好 恵

さ 子

剛 治

宵 明

荒 介

芳 水

た 子

宏 章

老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ねやがわ

江口

度報

大掻きでそろそろ渡る趣味の海
趣味三昧妻の冷たい眼が刺さる
あくせくの中でピカリと光る趣味
趣味という一緒にとべる空がある
無風状態になる彼女が去ってから
風向きがどうあろうとも俺は俺
風向きを読んで男の血が騒ぐ
いい噂流してくれる風が好き
風鈴を振って一個の音を買う
どんな風吹こうとこの手放さない
階段のいけず地下鉄まで迷う
八十路まだおとこが残るから迷う
ぜんざいの甘さ迷わす塩加減
潮の香へ瞬化した亀は迷わない
迷うよりベスト尽くせと夏の蟻
毎朝のスタート妻が笛を吹く
スタートは茶碗一つの立志伝
初めから頑張り過ぎて息が切れ
更生のスタート昔には触れず

冬葉 朝子 源 亜成 静江 恵子 良知 一風 頂留子 黎之助 シマ子 洋 吉之助 ルイ子 文秋 光子

屋台からスタートしたという老舗
仏壇を開けると今日のヨードン
引越しをするほど詰めてゆくキャン
傭前焼作家に会って欲しくなり
子供には子供の派閥金が必要
ハハハの笑いフツと受けるお茶にする
尽しても尽されても差し向い
泳ぐ娘が発光体になる浜辺
夏休み返上したい恐妻家
忘れたいの海の日になる誕生日
ノッポビル見上げ屋台を曳く初日

川柳高知

川竹

松風報

人波をかき分けてゆく特売日
三猿を演じ波風立たせない
荒波をかぶり男が出来上がり
毒だみ茶飲んで頭を空にする
口座から引かれ実感ない支出
悪友の善意を無下に断れず
紫のふくさ悲しみつつみ込み
定年がやと昼寝をさせてくれ
バランスのとれた軒をかく昼寝
似なくともいい癖とった息子が一人
七癖がすべて気になる倦怠期
吠える癖あいつはきつと弱虫だ
七癖の一つ二つは親ゆずり

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

庸佑 高栄 博泉 三郎 三峰 とし子 小路 時弘 波留吉 たもつ 功 快風 孝雄 有佳 春枝 竹萌 菊野 典雄 子龍 幸 圭風 松風 まさ

良い話聞き耳たてる地獄耳
落ち込んだ日には海鳴り聞いている
ホップステップジャンプが出来ぬかつむり
青蛙ここが極楽八つ手の葉
父の日に値札のついたままの靴
市役所の扉ソフトでは出来ぬ事
空出張役所ならでは出来ぬ事
黙々と団扇の風を送る母
薄給もやりくり上手な妻の腕
やりくりを隠す微笑み深いしわ
やりくりの世帯と知らぬドラ息子
やりくりをつけに故郷の土を踏む
一生の仕上げと蟬が声を上げ

川柳藤井寺

高田美代子報

0157 謎が未だに解らない
診察室へ呼ばれドキドキひどくなる
化物にあってたらどきどきするやろな
出番ですどきどきしてる胸の内
信号の赤へどきどき遅刻の児
救急車どきどきさせる初免許
後から靴音迫り来る夜道
五分前もつぐ遅い人がある
男女平等 余生宜しく願います
たゆまない努力と運で差がついた
育毛剤 差が出て来たぞつけたとこ
平等に生まれたはずが出来不出来
七つ違いは七つ違いのまま老いる
夏祭り働く人と遊ぶ人

六浦 正治 勇次郎 弘治 夢之助 向西 鹿太 江美 末貞一 十四郎 紫香 恒雄 悦子 宗一 キミニ 利武 鐘造 史郎 絹郎 三郎 かなめ 桂子 一屯 昭和 昭水

男と女 神様がまず差をつけた
もう少し差をつけてやるてんこ盛り
差を埋める読書いっばやっています
浅はかな読みで段差を踏み外す

星占い母とおんなじ男運
星空から敵機が消えた平和な日
星の数 僕の嫁さん見つからず

もう一押しすればよかった星月夜
星空に逢いたい人がひとり居る
あの星が水子の霊と決めている

皺ふえてきはった星の王子様
嫁がせてしみじみと見るお星さま
まだ女待つてる星の王子様

願ひ事は一番星にきめている
星占い少し信じて手を洗う

川柳大阪

坊農

柳弘報

いっぺんにあれこれできず苦労する

中² 主

蟬取りをせがんで父の肩車
あれこれと言つてゐる時が花だろ

ひとこまに幼い頃の肩車
額の中若い私がそこにいる

肩車しても届かぬ軒の羽根
肩車首のぬくもり子の重さ

掛け値なし額面通りいい人だ
勲章も額も倉庫で威儀ただし

遠い日の父の温もり肩車
秋祭り亡父の思い出肩車

0157孫も生物口にせず

正一 しげお

アキ 美代子

花梢 修六

昭子 志洋

敦子 かつみ

六点 扶美代

美房 智久

和樹

隆司

かよこ

和子

叭笑

太元

酔舟

河南子

美す

英太

信醉

須賀夫

上

上手には泳げないのが誇りです
夕焼けに染まって帰る肩車
一徹さ額のしわの一文子

決め技はダイナミックに肩車
穏やかさ残して父の肩車
お渡りが見えた見えたと肩車

血の通う話が旨い缶ビール
何ひとつ自慢にならぬ趣味の数
善人にサイズが合わぬ鬼の額

あれこれと苦労を知った妻の留守
人間の勝手良い雨悪い雨
遠い日の空広かった肩車

泳げないプール恨めし下痢の街
荒波を泳ぎ切ったぞ無位無官
あれこれと迷いの橋が揺れている

デボチンの広さ善人だと思ふ
盆おどりおかめひよつこ肩車

川柳塔唐津支部

久保

亡師の声聞きたくて行く盂蘭盆会
夏バテを土用うなぎで防止する
自己嫌悪過去の汚点を振り落す

狭庭とて花々話しかけてくる
デパートの地下でグルメのつまみ食い
かあさんの心奪った憎い人

紫陽花のくす玉せめぐ垣根越し
説得力利口な妻を領かせ
陶工の心が炎える登り窯

颯爽と散歩追い越す万歩計

美花 青道

柳昌 まつお

洛醉 一步

雅巢 しげお

希久志 鉄心

本蔭棒 ダン吉

美津留 金太

笑風 重人

柳弘

正刻報

ふさ子 青琴

治幸 ちよ

高主

タミ 虹江

四郎

台風に遭つて未だに恐怖症
閻魔王嘔吐き議員舌抜かず
路地裏に入ると風はを恋つ

数値目標メダルにもある開催地
カンナ燃ゆ玉音涙で聞いた日よ
兄弟へ峠の風は母の声

要領よい風は裏門から抜ける

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

他人面が良くて気を揉む台所
面食いがあげくのはてに今の妻
鉢合わせいつもの面がはずれてた

ひよつここの面の下には雄魚の顔
面と一本とった覚えのない竹刀
善人の仮面はいつも持ち歩く

他人面が良くて気を揉む台所
面食いがあげくのはてに今の妻
鉢合わせいつもの面がはずれてた

ひよつここの面の下には雄魚の顔
面と一本とった覚えのない竹刀
善人の仮面はいつも持ち歩く

他人面が良くて気を揉む台所
面食いがあげくのはてに今の妻
鉢合わせいつもの面がはずれてた

ひよつここの面の下には雄魚の顔
面と一本とった覚えのない竹刀
善人の仮面はいつも持ち歩く

佳句地十選(9月号から)

赤川 菊

野

信念は変えぬお経を聞きながら
夫婦別姓ボンボン船が浜を発つ

わたしは私簡単には変えられぬ
耐えぬいた明治の父の灯が消える

加速する老いに決心する同居
たまに来て尽くす嫁には誉めちぎり

病人を騙しつづけている笑顔
落書きのようなサインを拝んでる

人間をモデルに猿は汗を拭く
八月の約束鶴はまだ折れぬ

人間をモデルに猿は汗を拭く
八月の約束鶴はまだ折れぬ

人間をモデルに猿は汗を拭く
八月の約束鶴はまだ折れぬ

あき 公一朗

弘 晴翠

幸夫 久仁於

正剣

ちよ路 徳三

早智 羊子

天々 見早子

泰 希久子

みつ子 美津留

ルイ子 美代子

美智子 純子

桂子 花子

恵みある大地が核で汚される
恵まれた自然を壊す人のエゴ
恵まれた子に戦争の飢餓遠い
めぐり逢いを神の恵みと手を合わせ
やっと降るでんでん虫が動き出す
検診を魚となつて順を待つ
恵まれた容姿群が甘い異
相合傘恵みの雨に肩を寄せ
恵まれた生命 今年も終戦日
亡母からの教え日までに生きてくる
目くばせで用事済ませる間柄
目に入れて痛くはないが目に余る
嘘ついた目を母親に見抜かれる
他人の目盗んで孫に用足たせ
能面のような化粧で老い隠し
戦争の写真怯える子供の目
大空の青さ失意の目にはない

ほたる川柳同好会

井上 直次報

道子 昭和 絹子 省子 由美子 ふみ 良子 トヨ子 あらた 智洋子 サト子 純子 政勝 亜希子 マサ子 和歌子 満秋

贈る者受ける者あり世は動く
やんわりとなだめて楽にしてあげる
やんわりとカーブに沿ってゆく八十路
やんわりと違反説いてるねずみ捕り
やんわりと昨日の行状責められる
ごつい手でやんわり握る嫁く娘の掌
やんわりと値切る熟女の二枚腰
わだかまりやんわり融けてゆくつき日
古里の母に弱音は聞かせない
お家芸弱くなったと首捻る
本番に弱い日本のアトランタ
弱気の虫なだめすかし生きてる

京都塔の会

松川 杜的報

キヨ子 明光 明光 祥風 正安 よしろう つよし 保子 直次 馬洗 方郎 桂子 波留吉 百合子 紫雲児 瀧小 磯女 芳子 武庫坊 葉子 白溪子 圭坊 杜的 求芽

むき出しで済まぬと嫁がお小遣い
欲望をむき出しにする遺産分け
飲みすぎて本音むき出し夏祭り
名工のノミに閃く観音像
閃いた点から線に結べない
鯉船海のめぐみを一ぱいに
嫁の来ぬ島へ連絡船が着く
淡々と静かに回る母の独楽
中心にもう席がないお父さん
中心を少し離れてのぞく裏
中心に置いてあるのは父の椅子
中心に亡母の写真が笑う
中心からずれて世間に置き去られ
中心にサイコロ一つ置いてある
もんしろ蝶その他大ぜいとは思つてず

岸和田川柳会

田中 文時報

吉之助 源一 英一 英一 英一 庸佑 正坊 飛鳥 友照 てる 笑女 達子 美穂 年代 春蘭 水客 弘象 苑子 文時 基 敏光 一齋 白光子 盛之 甚一 さよ子 路子

免許証が生きた証になる暮し
定年で俄か農夫に仮免許

昭二 洋

ホッペから口まで西瓜になった子等
いらいらのお蔭流しがピツカピカ

キク子 みつ子

恋はゆらゆら昨日うすめる白ワイン
ペルモコ 白亜 白バラ 白い帽

智恵子 薫風

免許更新ばかりしてる恋の道
裏にまで免許が書いてある名刺

信博 辰郎

夏休み来たたら西瓜を一個買つ
石仏が亡父に似ているいかり肩

哲子 トミエ

両の手がふさがっている旅帰
減塩の料理に慣れて恙なし

純子 恵美

目次見て内容解つた顔を見せ
目次だけ見て本文読んでない

浪速子 朝一

確執もなつかし亡姑の単帯
西瓜切るみんながワツと寄ってくる

澄子 まさお

両方がいい人だから損をする
弱虫がいつしか傘寿通り越し

芳乃 美智子

母からの免許が光る梅の味
歴史書の目次はじめは卑弥呼から

東雲 朝一

我が海の子歌った友が眠る海
時かぬ種思いもよらぬしたたかさ

武庫坊 年代

傘だけが取り残されて終電車
ごゆっくり言うてもらうがお茶も出す

多美子 すず子

人生の花を咲かせる目次選る
母からの免許が光る梅の味

狸村 萬的

泣けるのは少し余裕があるからだ
夏祭土産の西瓜井戸で待つ

民平 君子

新婚の頃にはあつた迎え傘
油断だと責められている手術台

末野 市三

万の免許が光る梅の味
歴史書の目次はじめは卑弥呼から

萬的 狸村

泣けるのは少し余裕があるからだ
夏祭土産の西瓜井戸で待つ

義子 君子

油断だと責められている手術台
ゆっくりと歩くこの町母の里

八重子 素水

免許証が生きた証になる暮し
定年で俄か農夫に仮免許

好榮 ちよえ

ホッペから口まで西瓜になった子等
いらいらのお蔭流しがピツカピカ

智子 千代

両の手がふさがっている旅帰
減塩の料理に慣れて恙なし

とみ子 つや子

免許更新ばかりしてる恋の道
裏にまで免許が書いてある名刺

英子 はるみ

確執もなつかし亡姑の単帯
西瓜切るみんながワツと寄ってくる

正坊 楓楽

両方がいい人だから損をする
弱虫がいつしか傘寿通り越し

和子 富美

目次見て内容解つた顔を見せ
目次だけ見て本文読んでない

鈴江 民子

我が海の子歌った友が眠る海
時かぬ種思いもよらぬしたたかさ

希久子 喜美子

傘だけが取り残されて終電車
ごゆっくり言うてもらうがお茶も出す

可住 靖子

人生の花を咲かせる目次選る
母からの免許が光る梅の味

かつ子 聖子

泣けるのは少し余裕があるからだ
夏祭土産の西瓜井戸で待つ

あかずき みつ子

新婚の頃にはあつた迎え傘
油断だと責められている手術台

義江 春蘭

免許証が生きた証になる暮し
定年で俄か農夫に仮免許

博利 清泉

確執もなつかし亡姑の単帯
西瓜切るみんながワツと寄ってくる

あかずき みつ子

両の手がふさがっている旅帰
減塩の料理に慣れて恙なし

義江 春蘭

免許更新ばかりしてる恋の道
裏にまで免許が書いてある名刺

白汀 白汀

我が海の子歌った友が眠る海
時かぬ種思いもよらぬしたたかさ

あかずき みつ子

傘だけが取り残されて終電車
ごゆっくり言うてもらうがお茶も出す

義江 春蘭

目次見て内容解つた顔を見せ
目次だけ見て本文読んでない

白汀 白汀

泣けるのは少し余裕があるからだ
夏祭土産の西瓜井戸で待つ

あかずき みつ子

新婚の頃にはあつた迎え傘
油断だと責められている手術台

義江 春蘭

人生の花を咲かせる目次選る
母からの免許が光る梅の味

白汀 白汀

泣けるのは少し余裕があるからだ
夏祭土産の西瓜井戸で待つ

あかずき みつ子

傘だけが取り残されて終電車
ごゆっくり言うてもらうがお茶も出す

義江 春蘭

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

サークル樟樫

小林 一夫報

城北川柳会

吐田 公一報

ローズ川柳会

山崎 君子報

ミサラ てる

夏椿いもつと白くさまよえり
波乗りにもつと白くさまよえり

房子 薫

恋はゆらゆら昨日うすめる白ワイン
ペルモコ 白亜 白バラ 白い帽

史風

スパーで主婦真剣に思案顔
うちのポチそろそろ何か嗅ぎ付けた
木偶の首風の吹きよで横に振る
ひとり身の時季を逃した花菖蒲
相談にストローが止まる小さい声
潮時とそろそろ本音出してくる
飢えたところ法話でしばし潤す
そろそろの試歩見守つてくれる病友
緑陰に犬も一緒に昼餉どき
梅雨しぐれ旅する人の身を案じ
訃報記事先ず享年に目が走る
裏表ない人柄だからまだ続く
手付金納めて来てまだまだ思案
子が撮ったカメラに俺の首がない
ほとぼりが冷める時待つちぎれ雲
観音の首に煩惱かけにゆく
底ついた思案へ神の鈴を振る
マンネリを見直す眼鏡かけ直し
次の風待ちつつ今朝も紅をさす
逃げ言葉妻に相談してみます
すぐそこに頂上見える井の蛙
愛が未だ去ってはいない骨拾つ
要らぬ草取らねばならぬ田と畑
鈍行で総て事足るかたつむり
夏休み孫が期待の渡米熱

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

千尋 政子 高栄 美代子 とし子 久留美 一枝 あい子 八重 登美子 秀夫 トヨ子 白峰 扇帆 純子 典子 達子 満津子 睦子 倫子 昭子 静子 寿美子 ただし 公一

五楽庵 銀波

手術後の水の味よキスの味
交番が妻の駆け込み寺である
奥さんも代役をする村交番
悪口をろ過して通すボケの耳
太陽の死角で悪の芽が伸びる
交番も手話で答える治安国
朝顔の線の細さに阿弥陀経
氷点で冬の蛍を眠らせる
交番の巡査にいまは髭がない
不景気をますます煽る消費税
偽証した夜を寝返りばかり打つ
この夏も朝顔想う亡母憶う
抜け道でアイスバーンが牙を研ぐ
花水瘦せても祝辞まだ続き
嘘ひとつ悪い涙が土おおう

川柳塔鹿野みか月

土橋

和香子 和香子 井蛙 柳々 岳水 生恵子 ツネ アサ 雅城 花匠 北歩 順三 花峯 螢報 武子 喜与志 幸枝 隆風 かつ乃 汲香 睦子 節子 和枝 節子 智恵子 節子

大阪の街で拾ってきたロマン
夜のとりロマンチックな夢を詰め
海底の遺跡ロマンを掻き立てる
老いにまだロマンチストの夢は持つ
わたくしのロマンボストは知っていた
哀しみを隠すあしたに化粧する
粧えば寡婦にうわさの風が吹く
約束を待つ粧いに雨が降る
究極のハート粧う愛がある
ふり返るほどに粧うて欲しい
鼻の日の鼻がすこうしてそばゆい
鼻水が出る0157じやないか知ら
父のコピー鼻のかたちも裏切らず
鼻筋が通っていると孫を褒め
涙紙で拭って低い鼻熱れる
鼻歌が朝の空気によく響く
鼻筋が通って詐欺師には見えぬ
鼻垂れ小僧が戦争に征つてきた

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

みさ子 八重子 実満 くに子 きみ子 宣子 房子 よしえ 茂 孔美子 秋女 三千代 富久江 はるお 風人 盛桜 久枝 盛桜 美羽 稚代 鉄治 保博 正博 柳宏子 英子 美子 紫香

奥の院までみどりに染まる石仏

萬 的

一度手を染めれば足が洗えない

正 淳太郎

髪を染め爪をそめてもしわ笑う

射月芳

爪染めて女は徐々に脱皮する

利 治

茶に染めた髪も日本の血が流れ

さち子

頑なな心を染める手の温み

豊 太

蛇行しながら時間の流れ縫い合わす

和 重

聞き流すことに耳が慣れてくる

誠 子

ストレスをその日に流すビール党

千寿子

一瞬の命信じてする流転

武 春

傷ついた翼矢鴨の悲鳴聴く

紀久子

翼も羽もいらぬ我が家で足りている

泰 子

翼ある鳥は一生飛ぶ運命

寿 子

冷え切った翼いたわる眼がぬくい

輝 子

息抜きの翼水平線にある

精 子

十六夜へ翼下さい一度だけ

三枝子

翼ひろげ女はたせぬ夢を追う

富美子

チャレンジに目覚め翼を弾ませる

めぐみ

ときに女翼ひろげて森を出る

克 子

いらっしやいませ鬼も仏も輪の中へ

八尾市民川柳会

富崎シマ子報

お月様亡母の童話をしてくれる

洋

いつせいに亀の子旅に出る月夜

ますみ

肩をくむチャンスくれたおぼろ月

頂留子

不登校今夜も月とたわむれる

美津留

不信任ばかりが溜まる昼の月

欣 之

十五夜はよいさいいはなおさらに

シマ子

赤信号携帯電話命取り

柳 弘

初めての画帖へ少女赤を塗る

泰 信博

献血も寄る年波でことわられ

柳 伸

糠床をまぜる老舗の赤い爪

宏

赤かぶのやさしさ訪ね飛騨路ゆく

朝 子

白い靴はいて余音を弾んでいる

三 男

日焼けせぬ子が増えている夏休み

和 子

適当に焼いたお肌は魅力的

祥 一

マザコンの姑世話を焼きに来る

いつみ

手を焼いた子が一番の親思い

隆

備長炭で焼くこだわりの料理人

柳宏子

ジョンソンの涙綺麗だなどと思う

賢 子

わだかまり洗い流して青い空

弘 直

流れゆく雲にあしたの夢のせる

一 風

聞き流す顔にはほえみ忘れない

元 紀

孟蘭盆会亡母の流した涙追う

夕 花

流されて流れて愛が乾ききる

東 雲

ペア組めど好きな相手は他の人

たもつ

ペアアルクの案山子に雀よってくる

恒 明

生れ変ってもペアになりたいあな

とみを

姑のお気に召さないペアアルク

半蔵門

哲学の道をペアアルクで歩く

森 子

もつす恋にワイングラスがふたつある

度

ペアで行く同窓会が増えてくる

柳柳塔まつえ吟社

川柳塔まつえ吟社

恒 松

金魚売りあの売り声は何処へやら

米 子

右往左往金魚はこども待っている

畔

愚痴一つひっかかっている金魚草

れいじ

Tシャツの胸で金魚が泳いでる

鶴 丸

初恋のふたりを金魚知っている

午 朗

出目金にブライドという身のくねり

鳳 笙

定年後待ってたように冷える妻

友 子

古里との気象予報にある不信

すみこ

冷夏との冷える無残な話聞く

多賀子

心まで冷える無残な話聞く

静 恵

冷えきれたぬ女の意地へ流れ星

芳 枝

山あいの冷えを求める夏休み

ひふみ

思い出を夜景のなかに一つ置き

知恵子

旅の恥かいた夜景を忘れない

与根一

対岸の夜景が寝せぬ揚げ花火

房 子

醜いところで美しい夜景みる

螢

愛一つ捨てた夜景が明かすぎる

きみ子

シナリオとロマン夜景の中で住む

かおる

沈む日へ今日をポケットから捨てる

太 泡

また明日会えると信じみる夕日

登志子

昏れる陽へ新党構想美らない

美 良

愛不信揺れる心で夕日みる

雄 々

明日もまた待てつづきそう夕日

早 苗

窓ごしの夕日そうつめき茹でながら

清 子

公園の塵を黙って拾う人

茂 美

公園の踊り上手と声自慢

きみえ

公園で老いのアベック多くなり

静 江

公園のベンチが聞いたたっこいしょ

桂 子

公園の蟬が子供を呼び止める

文 子

平和公園平和惚けた人ばかり

叮 紅

溝口町川柳会

小西 雄々報

夕立が涼しさ運びほつとする

弘 子

夕立のあとへくつきり虹の橋
心地よい夕立の風よく眠り
夕立に段取り狂う野良仕事
神様の怒りのような夕立だ
夕立が百日草を薙ぎ倒す
ぬれねずみ虹のかけ橋渡れない
森みどり夕立浴びて彩を増す
火の酒をあおり夕立雲を待つ

竹原川柳会

時広

一路報

静江 鈴枝 久子 智恵子 信敬 康女 豊枝 雄々

考えるポーズ中身は寝てござる
考えてポストの底の音を聞く
考える目をしてコーヒー飲む男
考えを変えたかメダカ向きをかせ
適当に許すことばを考える
なあ蟻よお前の考え知ってるぞ

三幸川柳教室

三宅

保州報

笹舟 喜美子 臣子 一 枝 一 路

厳格な亡父にもあった艶話
ネクタイをはずせば僕の父になる
鈍牛と呼ばれた父の目を見たか
父の日の父を日本一に描く
何時までも串本節は父の唄
甘えたら弱い父だと知っている
父の帽子はまだまだ青い夢をみる
ひまそうな父と短い会話する
父よりも高く飛びたい竹トンボ

南大阪川柳会

金井

文秋報

みね 美子 朱夏 高夫 よし子 さち子 章子 貞子 和子

夕立が夏を運んでくるのかな
毛だらけの犬も猫も暑そうだ
考えているとひとりになっていた
極上の風をいただき昼寝する
夏の夜はビールで一杯涼をとる
夜店でて子供いらだつ七夕祭
晩酌は月とたのしむ夜の窓
子の熱へ長いながい夜が白み
蜚来いの呼び声聞けぬ夜は更ける
運命のように路郎の句と出会う
寒翁が馬だと思ふ運不運
さりげない気付きへ運が向いて来た
小さな運つかむと神経痛が出る
中位の運を大事に生きのびる
時は金なり運など当てにしてません
成金で運を開いた歩の誇り
幸運の使者は頑張り屋がお好き
考える子も成人で適齢期
段々と小さくなって行くプラン

高史子 中千枝 蘭幸 比呂子 夏喜 千年枝 規代 房子 蝸牛 静風 榮恵 貞子 静佳 笑子 節夫 菁居 喜久恵 美佐雄

年金の範囲で渡る舟を買う
よろけつつピエロは綱を渡りきる
渡り切る向こう岸にも鬼が棲む
結論は橋を渡ってから決める
七転び八起きで渡る処世術
ゆうべのことまだ許せないフグの顔
いつまでも雑魚ではないと子の野望
歯ぎしりの雑魚を束ねて乱を待つ
一言が喉に刺さった魚の骨
出世魚ひたすら泳ぐほかはない
秋刀魚定食 煙の中で待たされる
顔のない魚に慣れて絵が画けぬ
終章はやがてやがてと先送り
黒髪はやがて薄れていく命
満月もやがては欠ける世の無情
ロボットもやがて看護をまかされる
千金を夢見てやがて地面這う
やがて実を結ぶ花芽と子を信じ
盛者にもやがては夕日平家蟹
ローレライやがて波間に消える恋
まっすぐな父の背中に山を見る

親路 秀男 武春 鉄治 満洲子 孝子 和代 利治 美智子 保州 伸二 町子 初子 嘉平 千秀 百合子 正雄 桂香 ツタエ

石庭と向かう素直になれるまで
天の橋立みんな素直にまたのぞき
返事だけ良いが素直に動かない
気負うほど素直になれぬ昼の月
素直だが覇気のないのがもの足らぬ
素直さに教える方も力入れ
必勝を素直に信じ散った戦友
野球拳女は笑いながら脱ぐ
脱ぎっぷり男の方が目を逸らし
脱ぎ去れぬ夢を引きずるかたつむり
良妻と言われ仮面が脱げませぬ
法くぐる罪を足場にのし上がり
罪深き人が祈りが長すぎる
政治家の私有財産問うたとて
仏さまは愚問などとおっしゃらず
愚問にもちゃんと答えてくれる医師
突込みの愚問にばけが笑いまき
愚問一つ笑われてよし知恵を借る

楓楽 庸佑 千里 重人 文秋 久峰 萬的 柳宏子 頂留子 寿美 良 智久 秋子 智子 直子 信博 志華子

奥深い読みが愚問でさぐり入れ
汗さつと吹き出す愚問してしまつ
埒ないこと問わねば胸がおさまらぬ
愚問出て英語通訳つてある
寝たきりに触れず長寿をつらやまれ
写経して羨むことは何もない
羨望の極み挙式的美辞麗句
他人さまの健康羨む車椅子
羨望ヘカメラが囲むワイドショー
一着を羨み馬券紙吹雪

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

手習いの根気で上がる藤娘
根気よく一針ずつの愛を編む
ビリ走る根気に拍手惜しまない
今日もまた負けても行くぞ甲子園
根気よく核の悲劇を語りつぐ
民芸に賭けた根気の太い指
疑えば底なし沼にのめり込む
口笛を吹く少年は疑わず
ウインナーの赤へ疑い深くなる
疑問符が夫婦茶碗に盛つてある
疑つて一番前へきて座る
終の住みかやつと見つけた港町
海猫も暑さで港静かなり
遠い日の帰らぬ恋を待つ港
出船入船港が染まる茜色
手放して泣ける港に母がいる
笑つても泣いてもぬくい港の灯

悟郎 トミニ子 シメ子 白出子 日洋子 凡子 柳伸 章久 文江 三男 稲子 瀧小 紫香 秀夫 上志子 静江 英一 漢杏 艶子 武庫坊 しげお ルイ子 東雲 マツエ 庸佑 重人

酒も女も昔のまの港町
しつぱりと酒場のうたをきく港
ひたすらに生きて港の灯をともす
スランプは男の意地で踏み越える
才能の足りぬをスランプとしておこ
スランプを糸張る蜘蛛に救われる
ひまわりの辞書にスランプ見あたらぬ
スランプが続き彼女にも振られ
かと言ってやめてどうする当てもない
決断が鈍る七月の微熱
暑き夜の自動改札ふきげんに
だらしなく溶けゆく古稀の絵ロウソク

富柳会 池

波留吉 とし子 節子 あきら 求芽 高栄 惠美子 萬的 白溪子 茶の子 澄子 蕉 源一 森子報 紅月 紅紫朗 冬虹 文子 宗一 登子 アキ 鐘造 二二三子 絹子 昭水 智久 伊勇

嘘ひとつ川の流れが濁り出す
前言は甘く弾を込めている
子が濁ることを許さぬ父と母
八月の愛が点滅し始める
久世川柳クラブ 二宗 吟平報
他人はどうすくなくても行く生家
梅雨明けのさわやか風を部屋へ入れ
台本に無い人生に四季めぐる
三猿になって老後を丸く生き
曾孫までうれしい言葉かけてくれ
うれしきは百倍孫の贈り物
うれしさがまわりを春にしていまい
譲られた席がうれしい手を合わせ
いたわり合つて夫婦で登る傘寿の坂
老夫婦だけの自由に生きる家
お互いの肩よせ合つて老夫婦
夫婦連れ五十二年夢と過ぎ
かけてきた夫婦茶碗にある歴史
古希すぎた夫婦の絆固うなり
夫婦げんか絶えぬがほんとは仲がいい
恙無く似た者夫婦共白髪
夫婦とは長い月日がドラマのよう

川柳東大阪 森下 愛論報

花梢 柳太 欣子 森子 千代女 久子 志重 禅心 秀香 旭泉 すみれ 吟平 伊久栄 美恵子 知世 楽山 富士野 種子 善代 光水 のぶ子 シマ子 猪太郎 源一 治也

猛進の若い力に期待かけ

若者の損得抜きをつぶの汗

優先席を占領してる長い足

若者の肩で弾んでるみこし

かあさんとおだてて上手があつたかい

へまな奴おだてに乗ってよく弾む

おだてれば象も逆立ちやつてのけ

ため息の残る家計簿見たくない

携帯電話残す会話は不快感

折鶴が虹を見つけて翺びたがる

虹を見た日から安らぐ凡夫婦

いい便りやつと心に虹がさす

少女の日胸に刻んだ里の虹

むらさきの虹の余韻へ明日の詩

川柳クラブわたの花 吉村

血税と浜の真砂は闇に消え

計算の欲があるから惚けてない

大川へ天神さんもうさ流し

ギラギラの浜でメラメラ燃える恋

何度乗っても体重計にそむかれる

澄んだ水と緑が産んだあまご釣る

平成の姑は嫁に尽くしてる

全力を尽くした負けをはめてやる

夜毎鳴る何時か吾が身の救急車

ただ数字ならべるだけの大蔵省

ピアノホール彼女二杯目僕半分

算数は出来ないけれど電卓通

流し目が似合わないのににんまりと

庸 佑

たもつ

孤 舟

頂留子

朝 子

潔 度

太 一

東 雲

雅 文

湖 風

恭 昌

賢 子

愛 論

一風報

美津留

隆

友 甫

朝 子

ますみ

幸 子

トシエ

まさと

明 子

けいこ

逸 史

知佐子

美代子

人情に涙を流す子に育つ

鬱の日はクシャミの数も気にしてる

数えても殖えないお金数えてる

アトラクタ メタルの数が囁かれ

ダイエット一喜一憂する目盛

口数が増えてはちばち疎まれる

見えてきた余生が数字を強くする

浜からのエール臉に船出する

食べ尽くす桑に蚕の質のよさ

麻雀の時だけ呼んでくれる友

川柳塔おつぱこ吟社 木村あきら報

短冊の願いが重い笹の揺れ

繁栄の陰には女の力あり

罪深い話だ他社のボーナス日

栄転の辞令半分妻のもの

静いの議場を後にバラを買う

老母に逢う幸せそうな顔をして

かも知れぬが一言欲しい老い一人

十代の特技一生活ちつづけ

栄転も一人ポッチじゃチト惨め

ピカピカの車に乗ってゴミをポイ

花鏢クシャミで半分飛んでった

一人住み明日の予定練り直す

栄えする店は品良し愛想よし

栄光を手にした国は孤独噛みしめる

大昔栄えた国も今は土

老いて子に歯車合わせついでゆく

独り呑む酒の肴は夜の月

宏

剛 治

ミツ子

道 子

君 江

春 子

幸 枝

一 風

シマ子

鬼 遊

坊太郎

吟 笑

ひかり

あきら

治

マツエ

ふ み

チカエ

よしみ

正 雪

放 任

いさむ

治 延

くに子

中なみ子

文 仙

はつ恵

胎動の知らせに弾む毛糸玉

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

別々に想い出夢を見る枕

切り札の手が掴まえてる尻尾

尾を見せて開き直った消費税

掴まれる尻尾もなくて素寒貧

尾を振れば手の鳴る方へ流される

角度変え写してみても古希は古希

モノクロの写真に父の威厳みる

旅先で撮った写真は妻ばかり

先生の癖まで写し取る手本

少年の目に写つたり私をためししてる

消したりついたり私をためししてる

川柳後楽吟社

健一報

うつくしき誤解もありぬさくら貝

夏のヤードに今日の日本がある

父の鱗がひと雨ごとに剥けてくる

言い訳はよそう男が軽くなる

逃げるなど朝のコーヒーに諭される

子の視野に亡母の幻生き続け

遅咲きのバラが私に夢を売る

のびのびと育つ雑草の逞しさ

北の窓今も干して亡母の足袋

重ねあう地図に明日が見えてくる

降りかかる火の粉の中で知る孤独

食い違ふ話に無口な酒となる

俺に似たか田植機までも曲り植え

かおり

清 芳

慶 子

田実子

喜美子

欣史子

シマ子

弘 直

香 住

能 子

あずき

留 吉

桃 風

拓 治

義 親

忠 成

道 博

邦 季

正 秀

信 善

まさお

幸 子

吉 則

青 銅

佐加恵

ゴミ拾い地球にやさしい人ばかり
趣味の会嬉しい鞭にたたかれる
私にも定価をつける妻子たち
計を聞くも元氣な顔が目につく
六十のもう初老かも知みつく
孤独との戦いに負けて旅に出る
肩書は外そう豊かな夏の海
突つ張ると空気がもれてくる弱氣
親の背なじつとみている子供の目
さよならのときが近いか風さわぐ
逆流をはじめる新月の血潮

倉吉川柳会

谷口

次男報

方角は南が吉と神の告げ
方言を聞く鈍行のあたたかさ
あこがれていいのか妻子ある方に
方言で肩を叩かれバリ楽しむ
副作用ない薬の方は効かないようだ
切符買う方法知らぬ不精者
遊ぼうと海の方から声がする
袋破れば蜘蛛の子百方へ飛ぶ
南西の方に不吉な雲がある
六道の辻で方向間違える
おのおの方花火はデカイ方が良い
若返る方法論はつまみ食い
処方箋煙草止めとは書いてない
方法は問わぬ金さえ儲ければ
首を吊る方法知らず生きている
露天商粹なばんばりぶらさげる

哲郎 敏明 金吾 吟平 美智子 博友 進 健一 草風 秀峰 秋女 明美 ゆり子 御前 睦子 完司 苦句 蛸 よしえ 和歌子 石花菜 かつみ 次男 和枝 一夫

川柳塔おとしり

上田

俊路報

イベントにばんばりの灯も酔いしれる
ばんばりを消して時間を止めておく
ばんばりの陰から捨てた人が呼ぶ
ばんばりへ風化はしないお下げ髪
ばんばりの寄付だけとて名が見えぬ
ばんばりへ星のまたたき気付かない
ばんばりを消せば話が密になり
七癖をかくして深い笑い皺
思案投げ首貧乏ゆすり癖が出る
借りた金すぐに忘れる癖があり
ライバルの癖も少しは知っておく
癖の字が親しみを増す年賀状
七癖を私の色にして生きる
屋上に珍し蟬の声を追う
珍しいテレビやクルマない暮らし
珍しく農継ぐ嫁が来ると言う
珍しく恋の方程式解けず
珍しい客が家計をくるわせる
珍しく母が寝ているはやり風邪
背の孫が看板みては指図する
この頃は看板娘おりません
看板が泣いて斜めに立っている
看板が目印知らぬ町に行く
看板を飾って苦勞歩き出す
看板の重い老舗が戸を閉める
エリートコースの看板外し農に生き
看板を倉にたたんで背広着る

智子 日枝子 天雀 黙光 柳風 雄々 喜美子 みさお 崇 舍人 風花 宏章 和子 清子 真一 孝子 雄々 銀嶺 由多香 道子 余志身 登美 小生 敬之助 野草 千秋 艶子

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

看板の重みゆるがす不況風
九条の看板隠せる世を恐れ
これ以上のショックなかつた八月十五日
血糖値痛くも痒くもないショック
蟬しぐれショックショックと聞こえます
祖母正座腹の底まで見抜かれる
老い腹に長男長女の皺がある
自己主張捨てて落ち着く腹の虫
自己叙伝を辿れば向かい風ばかり
夏が来て今年も辿る鎮魂譜
貧しさを辿れば窓の百日紅
辿るとは生きることなり修羅いくつ
自分史を辿れば亡母のここかしこ
辿る道妻の差し出す茶が旨い
夾竹桃を辿れば八月の怒り
泳がせたピエロ引つ掻き癖を持つ
呼ぶ程に遠のく白い連絡船
欲をみな捨てて涼しい夏にする
風鈴の風が夫婦にあり和む
念のため小鳥の傍線を引いて置く
絵の中で木鳥になつて私
膨んだ怒りのかたちパン焼ける
十指皆腕と離れてジャズピアノ
コルベールが死んだ夕刊の隅っこで
孫が来て皆を家来にして帰る
ビール一氣に女にはない喉仏
ペランタに夏はここぞと蟬しぐれ

俊路 黙光 義芳 瀧小 歌子 紫香 夢之助 年代 鹿太 ころ 武庫坊 杜的 弘治 水聲 伊三郎

名月を出し惜しみる窓の雲
またとばけられて浮気が掴めない
縫い針が自問自答をくりかえす

翠洋会

藤井

正雄報

正治
白溪子
ハツエ

いずも川柳会

園山多賀子報

鬼遊

過去形になってしまった遠花火
あゝ花火やっぱり星には叶わない

新党の仕掛け花火に貌がない
散り際の傷がうすい花火人もまた

遠花火の昔の傷がうすく出ず
思いきり手足伸ばしている花火

人妻の後ろ姿がままならぬ
よいことがありそう後ろの手が温い

三歩後ろ妻が歩いている安堵
後ろ指さされ女の背が淋し

軽い嘘後ろ氣にする帰り道
寅さんの後ろ姿はもう見えぬ

しっかりと後ろ姿を子に見せる
後ろから味方の弾が来る修羅場

急成長後ろ操る黒い影
輪を抜けて自適の部屋にある安堵

未成の土手のカボチャに似た自適
低金利自適の水がちと足らず

一合が二合自適と言う気まま
年金で悠々自適の日が終り

年金の自適の暮し他人の目
しまい風呂明日のプランを浮かばせる

計画の通りにいかぬ砂の城
計画通り月が出るとは限らない

計画の狂った靴が重くなる
日本の猛暑にキノコ雲の傷

鬼遊

多喜
芙佐子
あきら
陽子
蘭水
肇
義良
多輝子
義弘
明子
しま子
清子
ひろし
茂美
きよし
満江
草丘
寿美
ちえ
勝水
おしえ
多賀子
昭一
篤子
裕
ちかし

君が代はいつも猛暑の終戦日
人も樹も猛暑に水恋うビール恋う
約束が出来た猛暑も稲の出来
猛暑避け朝夕農婦の光る鎌

川柳後楽吟社

從野

健一報

手弁当妻と私の鎖です
父の星探す独りの夕涼み

御仏の顔で鼻薬をかがす
文箱の底に昔の愛がある

コーヒを飲んでゆっくり風をよむ
晒し首のように西瓜が並べられ

愚直に走る貨車に明日がある
幸せな日も変貌に身構える

クーラー付けっ放して夏を狭くする
有り難や烏鷺へ五徳の友があり

月下美人一夜の花を披露する
器には盛れぬ水のまの夢

仏壇へわが家で咲かす花供え
点滴をする腕冷房にも弱い

人生の年輪うかぶ芸術品
ボロ舟がもやい解かれて老いふたり

一線に並ぶと風が強くなる
一人来て母のお墓をひとり占め

父さんの染みが氣になる齢になる
歯止めに向こうにつづく廃止線

蟬しぐれせい一杯に生きる声
パチンコの玉が人間振り回す

夏祭り母も娘も同じ顔

文子
きみえ
れいじ
房子
桃風
秋月
美智子
義親
健一
哲郎
道博
たけ志
忠成
吟平
金吾
吉則
柳五郎
博友
敏明
拓路
正秀
まさお
進
佐加恵
邦季
信善

谷底の帽子はどこへ行ったのか
柱の影で泣いていたのは男
真実をかくす鱗は大きすぎ

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

三代の笑い絶えない屋根の下
瓦一枚小さい祈り寄進する
屋根裏の詩人ひねもす無口なり
地震越え屋根と亭主の軽量化
苔むした屋根が家族を見捨てない
屋根裏の極暑にたえた下宿部屋
岬から視野無限なり太平洋
ひと言を岬の風が消したまま
岬からエール送られてる小船
少年はいつも岬で雲にのる
波荒く燈台守のいる岬
聞き役が余計なことを喋りすぎ
姉老いて亡母そっくりの語り口
真実は語らぬ章に秘めてある
すいすいと解けて不安になつてくる
すいすいと出世する人出来ぬ人
勝算の歩幅すいすい広くなる
すいすいとごぼう抜きで救急車
酸欠の川ですいすい泳げない
すいすいと母の浮輪に泳ぎつく
八十年すいすい生きた訳でない
線路に石運ぶ鳥に森がない
宇治金時もつてきたとき汗はひき
伴走の妻が手綱を放さない

はるえ
草風
鮫虎狼

よし津
絹子
房子
まさお
澄子
江美
正坊
いわゑ
能子
求芽
紫香
柳宏子
英子
香子
富喜子
キク子
源一
道胤
透太
たず子
ひろ子
義子
楓云児

ほとけ様夫が無理を申します
そのわりに長生きをする母であり
夏帽子 老人達の小さい旅
メタル土産に人魚アトラクタあとに
八月の痛みを知っている暦
0157 ホットコーヒー 飲む二人

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

壘に鍵しかり締めて群れにいる
受験生エンピツ落ちても気にかかり
削られて禿びてあなたの役に立つ
カンニングする鉛筆はすぐ折れる
エンピツにまつわる謎を解いている
鉛筆の主張通らぬ公文書
筆談のあせりエンピツ芯疲れ
日本凱旋と書いた鉛筆持っている
原型のエンピツ書きが深くなり
エンピツの照る日曇る日流れる日
エンピツと二人三脚した月日
エンピツが尻尾にぎった顔をする
鉛筆の削りで違つて自己主張
何を残そうか夕暮れの鉛筆
エンピツのあと何本と物語
芯とがらすと鉛筆みように他人めく
鉛筆が失ると私まで失る
父さんのエンピツやっぱり太かった
エンピツがぐつろぎ過ぎて折れている
エンピツが勢揃いして試験待つ
引出しに残りたいエンピツのオアシス

しげお
泰子
射月芳
涼子
鹿太
武庫坊
春枝
八重子
恵子
保子
瑞枝
すみえ
花子
天雀
朗子
てい子
ゆき
蘭
寿々子
美世
富美子
千春
玲子
晶子
夕子
紫布
ふみ

削られるたび鉛筆はよみがえる
雲が湧いているエンピツの頭から
家風を乱す一本の赤えんぴつ

川柳塔打吹

奥谷

弘朗報

悟り切れずに煩惱を積んでいる
煩惱を突つかい棒にして暮らす
煩惱も断てた老いの淋しがり
煩惱を消えてぬ尼僧の般若湯
気持良く歩けることに感謝する
神様が順番きめる賽を振る
掛算九九を順番どおり諳んじた
育児日誌に今日は歩いた二歩三步
煩惱が法悦となる永遠の旅
投棄なし歩けと書いた処方箋
七十路ピチピチギヤルに手が出そう
掌の米が漏れる煩惱深すぎる
片隅で虫が見ている炎えきれぬ
龍宮へ旅立つ虫のよいはなし
飛ぶことが出来ず歩いているヒヨコ
目に見えぬ虫がイタズラする夜中
煩惱に見放されたら逝く覚悟
煩惱を捨てて人間らしくなる
かごめの輪みんな勝手な虫を飼う
煩惱に徹し楽しく生きてはる

岬川柳会

八田洞庵報

荒介
千代
日枝子
睦子
柳風
佳女
仙岳
玲泉
孝恵
季芳
早苗
よしえ
ひさ子
松盛
帆雀
雄々
螢
博丈
勝見
玲子
幸子
節子
弘朗
里子
鉄男

付き合いかせぎも父を追い越してうぬばれは無駄と鏡にさとされる

里の母ハッスル水泳始めたよ

交際も中味に迷う年となり

菜園でハッスル腰痛つい忘れ

作品展おほめの言葉期待する

手帳には会議ばかりの味けなさ

外余寒車内のミニで夏を見る

幸せの気味めくるポチと住み

連れ合いの定年を聞き舵握る

交際中すべてえくぼに見えてくる

ハッスルが空回りしてエラーする

交際を犠牲にしても狐を守る

子の心汲めず誤解を悔いる母

流されて最後は母の広い海

手をついてウイंक送る青蛙

オーデション水着で稼ぐ胸自慢

雷鳴に蜘蛛の子散らすゴルフ場

はびきの市民川柳会

榎本

吐來報

町会で嫌われているきれいい好き

増税が余生へ喝を入れるにくる

電話機の無礼N.T.Tは御存知か

笑顔で席譲ってくれた茶髪の娘

一日を感謝で終る歳となり

西瓜冷やして待った客が西瓜下げ

猛暑冷夏稲の育ちを案じさせ

カレンダー半分減って古稀近し

幸せは定年後に友多し

ヤエ

年子

よし子

幸子

庄六

龍弘

末吉

良平

みやこ

孝子

とみ

正勇

正美

悦子

みつ子

洞庵

みつこ

聡

みつこ

絢子

四三郎

えみこ

泰子

美喜

昭平

俊男

病棟の窓へ無名の寺の鐘

ささやかな旅閑空の客となる

やきもちの煙のこっている日記

程々にせよとやきもち窘める

政府官僚気合い入れた奴ばかり

もう舞合に抜いて歩こう老いの道

お見舞に気合も一緒に添えてくる

振り向けは構えた心くずれそう

フラッシュへ他人のような顔ばかり

アドバース素直に聞いてくれた春

母逝ってから効いてきたアドバース

芝居だと解っていても泣かされる

嫁姑芝居上手で仲がよい

一芝居打ったが親の目は確か

寂しくて一人芝居をしてしまふ

遠い日の心に残る紙芝居

笑わせてハンカチも要る新喜劇

母さんの目に見抜かれていた芝居

生活に疲れて打った一芝居

豊中もくせい川柳会 前月分 田中正坊報

賑々しい祭りマニアの打つ太鼓

長男に亡夫の浴衣縫いかえる

宵山へさそいを待っている浴衣

不器用な父を浴衣に包む母

沸騰する人気の裏に仕掛人

沸点に近づき神に試される

胸が沸く一度も勝ったことがない

猿沓

美代子

専平

ダン吉

庸佑

一屯

かつみ

扶美代

辰子

一壺

さとみ

吐来

志洋

敦子

晋

金太

昇

りつえ

重人

たけし

一笛

英子

武庫坊

明光

吉太郎

ただし

しげお

蔵に沸く唄も杜氏も地震に消え

怪しさを鏡の裏が見つめてる

車椅子揺れて記憶の橋渡る

寒木瓜が幼児の爪のようにつき

虹の橋たちまち消えて夢消える

こだわりのパン買いにゆく炎天下

ほとどの欲では前に進めない

保険証効かない猫の診察日

何事も無しと一行パリ祭

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

一番の種になろうと葱坊主

つつましく抱いた火種がまだ燃える

〇一五七 種もしかけもまだ不明

妻の留守何もできないことを知る

留守してる間に足をすくわれる

負けそうになると神さま仏さま

留守番のできる間が祖母も花

泊る気でトリスをさけて来た下宿

悪友を泊める座敷を掃いている

できるなら泊まってみたい天守閣

一泊が一泊になったいい話

チェックイン妻でないのに妻と書く

強火より弱火を守る車椅子

無人駅たった一人を見送りに

やんわりと断る術も娘に教える

ドンダの混迷の中背のびする

八月十五日 歩兵操典本箱に

素足の先に秋がちょっぴりまといつく

登代子

瀧小

つえ子

計光

慶子

きく子

悟郎

重人

博史

英子

瀧小

博史

慶子

吉太郎

重人

登代子

ただし

しげお

きく子

杜的

一笛

つえ子

明光

博子

悟郎

落児

武庫坊

■各地句会だより

川柳後楽吟社

花田 たけ志

行吉照路さんが体調不良で、私に句会だよりを書けと突然に依頼がありました。私より遙かに古い先輩がおられますので、大変困って再三お断り申し上げたのですが、是非にこのことでやむなくお引き受けしました。何分、一会員ですので駄句を出すだけで、世話役など一回もしたことがありませんから、会としての記録もなく困っています。

岡山の川柳後楽吟社は、私の記憶では多分、昭和四十年の春ごろ、今は亡くなっておりますが、浜田久米雄先生がお始めになったものと思います。現在の会員数は約四十名くらいと思いますが、月例会の出席者は大体十五名から多くて二十名ぐらいいです。JR現職の方が大分おられますので、勤務上これ以上の出席はなかなかむつかしいのでは思っております。

ます。

花見時や年末の月例会は大会にして、近くの名所・旧跡や公園等で実施し、披露後は会食、懇談をいたしております。

他の会でもおやりになっている所があるかも知れませんが、当会では本来の句会に先立ち昭和六十年ごろからと思いますが、時事川



柳の句会を実施しております。日ごとに起こる国内外の出来事について、常に関心を持っていないと句が出来ないので、社会人としての教養習得にも大いに役立つものと思っております。

何事も時代の流れに逆らうことはできませんが、最近の川柳には一読しただけでは何を言わんとしているのか、解しかねるものがあります。格調の高いものなら俳句がよいでしょうし、三字以上の字余りの句なら短歌にでもされた方がよいのでは、としばしば思うことがあります。

川柳歴の浅い私如きものが、批判めいたことを申し上げ、汗顔の至りです。掲載の写真は久米雄先生の、月例句会での風景を写したものです。各地区川柳会の、ますますのご発展をお祈りして、この稿を終わらせていただきます。

各地句会だよりについてお願い 本欄にはこれまで四十一句会(サークル)を取り上げてきましたが、まだ数句会が掲載されていませんので、句会代表者から編集部あてにこ一報ください。折り返し原稿依頼をさせていただきます。(編集部)

初歩教室

題 — 白

吐 田 公 一

川柳の一番の基本である十七音字(五七五)の作句が、殆どの投句に見られるようになってきたことは喜ばしい。

川柳は韻律詩の一つでリズムが大切。正直言つてご年配の方が多いだけに、このように素直に聞いて下さって、作句の姿勢を正されると思ひもよらなかつた次第。

私は添削句はできる限り、十七音字になるように、作句してきたつもりです。何事も基本が大事であり、基本をしつかりと身につけられてから、初めて応用(破調句)が生きるのであることを知っていただきたい。

添削句

○日焼けした男ビールの白い泡 登 美
日焼けよりこの場合、男の汗に対するビールの方が。(白い泡＝ビール)さあ一杯でこの意味が明白。着想はよい。
▽さあ一杯男の汗に白い泡

○白色に可能性などわからない 信 子

白色と可能性だけでは、何んのことか私もわからない。何がという具体性が欲しい。

▽画布の白夢が広がる可能性

○漂白剤夫婦のシミもとれたなら トヨ子

同じ願望でも強調が欲しかった。見付よし

▽漂白剤夫婦のシミもとつてはし

○白衣脱ぎナース巷の母が顔 隆

一般に白衣で医療関係と分かりナース不要

▽白衣脱ぎ鍵っ子思ふ母の顔

○見舞来ぬ日々白さにほだされる 多哥由

下五に「束縛される」の意味があるが一般的でなく、また中七との関連性が薄い。

▽お見舞も絶えて久しい白い日々

○事件記者黒だ白だと飛び回る 芳 水

飛び回るでは記者の苦悩が出ていない。

▽黒白のネタを追つてる事件記者

○白シャツの汚れ暮らしを覗かせる 智洋子

中七以下に何か生活を見下げた感じがする

▽白シャツの汚れはひとり暮しかも

○烏白と頑張る亡夫だった 伏 静 子

毎回述べているが、破調にならないよう

▽言い出せば烏も白という亡夫

○髪に白混じり来やと落付けり ふさ子

五七五にするための無理な表現がみられる

▽白髪が増えだしやと世間知る

○隠居の身白ワイシャツもご用済 哲 平

原句もいいが、一寸隠居の身がひっかかる

▽定退が白ワイシャツをもて余し

○真白な帽子靴干す六十路です 日出子

六十路で帽子と靴を干すでは刺戟がない。

▽真白な亡夫の帽子ある書齋

○炎天下白球追つ甲子園 宗 明

球児の球を追つ姿を連想する時、絶対勝つて見せるという若さを出して欲しかった。

▽汗と意気白球を追つ甲子園

○政治力黒い疑惑も白に変え 義 男

政治力、疑惑など句が堅い。

▽政党の都合で黒も白となる

○白が好きだれでも馴染む色だから 尚 子

折角白が好きと打ち出したのだから、自己をもつ少し強調されるとよかつたのでは

▽何にでも馴染む私の好きな白

○あきんどの父が貫く白は白 春 枝

商人だから白は白というのはひとりよがり

▽一徹な父で白黒つけたがり

○白黒のけじめつけると割れる仲 芳 江

「割れる仲」も面白い言葉遣いだ

▽白黒のけじめはつけず仲直り

○証人の主張は白と判で押し 勝 巳

主張は不要。下五は太鼓判の意味か?

▽冤罪と証人席が決めた白

○名譽棄損事実無根に白をきる 晩翠

名譽棄損や事実無根など、内容が読む人に分らない事象では、無実ですむのでは

▽せめてもに無実の証し白を着る

○颯爽と白衣の天使若くみえ よし子

颯爽若く見え同義 白衣の天使は表現が古い。ナースの働く姿に目を向けると

▽テキパキと白衣に自信のほどが見え

○染るなら白から赤へ燃えたいね 雄幸

上五と下五がつかない。

▽オパチャンが白から赤く燃える恋

○白衣着て福祉行する人となり 一乗

あなたの句を弾き返すと

▽リハビリへ白衣の肩の温かさ

○戦争中白いお握りほしかった 崇

単に追憶の説明句。添削句もよくないが

▽銀シャリを夢にまで見た戦時中

○筆不精の父で白紙のままの遺書 ますみ

変った着想だが、白紙の遺書は作りすぎ

▽財産もなくて白紙に近い遺書

○白すぎる紙で絵の具にきらわれる 幸次郎

きらわれるよりこの場合、負けたが本音

▽白すぎる紙に絵筆が負けている

○頼むぞと娘手渡す白い道 天々

バージンロードは赤色 原句と異なるが

▽結婚のリングが縛る白い指

○余白いっぱい未練残した恋日記 絢子

いい出来ですが、上七を添削すると

▽未練ある余白が語る恋日記

○白梅の香に包まれて夫の試歩 恒

俳句調。川柳ではこの場合、試歩が大事で、その内容を詠んで欲しかった。

▽一步ずつ白衣にすがる試歩の朝

○B29が作った雲も白かった 睦子

字余りの句を作らなくても、視点を変えれば五七五に収まるのでは

▽エノラゲイあの日の白いキノコ雲

○耐えた銅笑顔に映える歯の白さ 馬洗

佳吟の中に同想句あり。三句を作ること

○白い傘明治の美人乳母車 宏

上五中七下五バラバラで内容がない。多くを詠み込もうとするから駄目になる。

▽色白に育てと母のさす日傘

○子を守るための白旗さつと出す ミツ子

原句の発想はユニーク。この姿勢が大切

▽白旗を出してしっかと子を守る

○白黒がつく迄掃宅させないぞ 省子

喧嘩の説明句に終っている。

▽白黒も夫が折れる齢となり

○健康美輝く白い歯並びが

白い歯健康美では句にならない。

▽白い歯も嫁ぐ時代のコマシヤル

○ふるさとのもう戻らない冬景色 早智

冬景色即雪景色とは限らない。ひとり合点

▽古里を捨てた思いの雪景色

○エプロンの白に生きてる母が好き 八重子

類想句が佳句にあり。毎回のご投句を、

佳句

空白の日記に秘めた青春譜

銅メダル自分をほめた白い歯

綿雲の流れる過疎に母独り

拗ねた子が白紙で出した答案紙

安堵して見る真白い娘のドレス

(素直に育った娘さんへの愛情)

白薔薇の座り心地を亡姑に聞く

英会話通う夫婦の白い髪

(老いてなお勤勉。ほのぼのした温かさ)

白球が遠い故郷連れてくる

ぼろぼろだけと亡母のエプロン真つ白い

(身を粉にした母への追憶)

真つ白な紙に子供が未来描く

明日はどの彩に染めよう白い画布

私の句 碧

カンバスの白さに勝てぬ絵筆おく

◆

題「窓」 10月15日締切(12月号発表)

添削を受ける句(3句)は、川柳塔用箋に

書き、事務所へお送りください。

本社 九月句会

九月九日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

昼頃から降り出した雨は、夕方にはかなり激しい雨足となった九日、一〇四名の出席により、九月句会は定刻開催された。

会は、八月に亡くなった同人櫻谷寿馬さんへの黙祷からはじまる。

お話は藤井一二三氏。秋の彼岸に因んで巡礼と遍路について。巡礼には西国三十三所、秩父巡礼、奥州巡礼等があるが、遍路は四国八十八所めぐりのみを指す。どちらもおよそ千年の歴史を持つ。信仰と旅を兼ねて上文化を吸収しようとしたのが西国三十三所巡りのはじまりとされる。

四国八十八所の寺をもれなく、弘法大師と同行二人で巡るのが遍路の意味であると言ふ。初出席は、後藤正一、坂上高栄、高橋夕花、野村タホネ、嵯峨根保子、谷口義さんの六名。月間賞は、樹本路児さん(大阪市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―月子・弥生)
(受付―美房・あやめ・ルイ子)

席題「物知り」

津守柳伸選

物知りが知らない妻の誕生日
博学が静かに闇の夜を照らす
辞書などはいらぬ漢字は俺に聞け
物知りの電話はいつも話し中
物知りも即答できぬカタカナ語
飲むほどに知恵者の味が転び出る
物知りにいつも煙草の火を借りる
物知りの大家長屋をかきまわす
物知りを担ぐ一揆のむしろ旗
パソコンのことは知らない生字引
博識な彼を尊敬してしまふ
エンゲル係数上手にはじくうちの嫁
宇宙からみれば物知りしれたもの
物知りにまたでたためを教えられ
もの知りの行く図書館を知っている
物知りの猿は紋付着せられる
方角をとやかく言うてきられる
物知りの眉間にあった向う傷
物知りに聞かんと後でうるさいぞ
物知りのくせに謙遜ばかりする
町内のことなら妻にかなわない
物知りは大きな耳を持っている
物知りと言われるまでの恥の数
潮時を見て物知りが消えている
物知りの母さんパソコンは苦手
物知りの妻にその場を助けられ
博識のわりに出世に遠くいる

正坊 森子 昭雄 保子 一風 しげお 絹子 市子 楓楽 金太 桂香 かすみ 天笑 凡子 英千子 かすみ しげお 寿美子 二南 保州 典子 美洋 美羽 茜 白漢子 諷云児

物知りに酒の量だけ勝っている
物知りがいつもにこにこしています
知った振りしない物知り親しまれ
物知りに依存金魚の糞でいる
物知りの自負が男を強くする
物知りの顔で聞き耳立てている
物知りの帽子に赤とんぼがとまる
物知りがうなずいたので信じてる
知ったか振り男に隙間風が吹く
物知りもわからぬカイワレの罪よ
物知りも秋の淋しさには勝てぬ
物知りも恋の手順へ四苦八苦
物知りの上に掃除も上手です
寝たきりの姑に何でも聞きにゆく
物知りにされ先生の顔になる
兼題「ふところ」 池 森子選
ふところへ抱いて帰ってから家族
母さんのふところはよくの玉手箱
秋口のふところにいる弱い鬼
ふところが浅くて本音頭出し
ふところの指で勘定してる奴
ふところに男は土俵もっている
ふところの深さ広さを計る湖

いわゑ 路児 庸佑 歌子 澄子 シマ子 薫 いわゑ 萬的 絹子 みつ子 朝子 あやめ 三男 柳伸 柳子 和子 柳弘 友熙 武庫坊 紫香 保子 鹿太

ふところの野心時どきなだめてる
 ふところの鬼と仏がよく騒ぐ
 ふところを見せるとみんな居なくなる
 ふところにあつた天下を取る秘訣
 ふところの殺意を抱いたまま狂う
 ふところが寒くてだれも寄せつけず
 本当は空しいのだよふところ手
 大島を着るとふところ広くなる
 ふところに眠らせている冬銀河
 ふところのバラには水をたやさない
 ふところに切札入れている余裕
 ふところも哀しいのです雨期乾期
 ふところの深き男の貌にする
 母のふところで眠っている情話
 ふところは母は翔べない鳩を抱く
 ふところは海です方向見失う
 挽歌ほろほろレモン一つをふところに
 ふところの小銭が寒いことを言う
 ふところと同じ深き秋の闇
 ふところいつもピストル抱えている
 負けは負けふところの聖者たち
 重陽の菊ふところに舞いおさめ
 ふところに飛び込む勇氣蟻の列
 懷剣を忍ばせている赤い花
 ふところ疑問符一つ風化する

佳

一風 武庫坊 楓 富湖 美代子 月子 勇太 露児 茜 朝子 庸佑 鹿太 射月芳 保州 楓云児 寿子 美代子 楓云児 楓 楽 白兎 桂香 保州 大輪 夕花 文秋 しげお

受胎して山ふところを出る清水
 ふところの父は鬼なり仏なり
 人
 ふところの地図はいまでも白いまま
 地
 月も寡黙になりふところも寡黙
 天
 ふところにバラと銀河と鉛筆と
 軸
 消化不良の昨日がふところに沈む
 兼題「策」 田中 薫選
 いい策はないかと眼鏡拭いている
 ええ策がないので尻尾振っておく
 策がないから末席をあたためる
 策もなく出たとこ勝負しています
 策あつてボキヤブラリーを貯える
 ショッピングわたしの老化防止策
 どう策を練つても勝てる敵でない
 逃げるのが秘策とは知らなんだ
 策のない男一番よく喋り
 策略を見ぬいた妻のうす笑い
 万策が尽きて唱えるお念仏
 類笑みを見せて背中を討ちに来る
 先輩の策にはかびが生えている
 母さんは無策の策で乗り越える
 歯を磨きながらデートの策を練る
 策尽きて首無し地蔵と相対す
 策のない顔して歩く新世界

義子 弥生 みつ子 白兎 天笑 森子 萬的 重人 金太 義子 楓 楽 ますみ 白漢子 白兎 正一 ますみ 満州 洞庵 度 保州 武庫坊 紫香

策のない男先頭走っている
 紙コップで囲んだ策は知れている
 練る策が裏目うら目に秋の暮れ
 策のない強み母さん笑っている
 策のない男と思う大厭
 ジョーカーを握つたらしい無表情
 小細工をしない男の眼がきれい
 策もなくただぼんやりと花時計
 国策にそい九人の子を生みし
 きりぎりすあきらめて日々無策なり
 策のない男ビアスの穴をあけ
 自らの策に沈んでゆく背広
 あなたの首からわたしの首へ策つくる
 佳
 乗せられて見るか窮余の策らしい
 策練つているなと酒をさげてる
 おんな一人の無策をカラス笑つて
 無為無策ただすたすたと歩くのみ
 策のない前頭葉を叩いてる
 人
 一計を案じバセリに徹しきる
 地
 蜘蛛の策風が吹くまでぶら下がる
 天
 雨の日は策もなければ傘をさす
 軸
 電車つぎつき通過する策なきわれに

楓 楽 美代子 歌子 ダン吉 大輪 いわゑ 一風 弘直 千歩 希久子 千梢 天笑 天笑 勇太 月子 保子 寿美子 月子 澄子 しげお 智子 薫

兼題「火」

富園 射月芳選

三男

将来に悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

核の火に地球だんだん病んで来る

萬的

燃え上がる種火は今も持っている
時々頭擡げる私の火

富湖

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

核の火は日本の土に馴染まない
古日記練れば火の章風の章

洞庵

わが余生残り火ひとつ恵まれる
僕に火を点けたえんやこらせのひとこと

あやめ

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

火の道であらうと僕は行くつもり
ポケットに火を溜めていた少年期

たす子

火の鳥になつてあなたに逢いに行く
残り火があつて三味線稽古する

天笑

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

火の鳥になつてあなたに逢いに行く
残り火があつて三味線稽古する

鹿太

火の鳥の行方は追わぬことにする
火の女打算はちゃんとつけてある

正坊

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

火の鳥の行方は追わぬことにする
火の女打算はちゃんとつけてある

千秀

火の女打算はちゃんとつけてある
火だるまになれる目標持っている

稚代

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

火だるまになれる目標持っている
再会の日までとろ火のままでいる

たもつ

再会の日までとろ火のままでいる
腹決めて火の粉をかぶることにする

金太

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

腹決めて火の粉をかぶることにする
百円ライターの軽さで一日が暮れる

蓼云児

百円ライターの軽さで一日が暮れる
根気よくとろとろ燃やすわたしの火

隆盛

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

根気よくとろとろ燃やすわたしの火
射月芳

天

射月芳

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

天

天

義子

将来は悔い残すまい今日生きる
産声にもう考えている保険

朝子

一代の職人末を語らない

人

私達の塔だ天まで伸ばさんか

地

将来を語れば核に突き当たる

天

将来へ真つ直ぐ走れ一輪車

軸

入社時は大志たしかに持っていた

兼題「女」

橋高薫風選

女とはやさしきものよ五目めし

それからは女は口の中で言い

レモンの香させて女がまだ独り

指輪を指にさすとき女だと思つ

受胎告知 妻が極めて美しい

子を抱けば女の中にマリイ様

歳時記をしつかりと持つ京女

女には男のズボンがはけるのに

生き残るために女は輝いて

世紀末女の力瘤を見る

腕相撲負けた女と暮しける

冷奴 女の記憶浮いてくる

子を連れて戻つて女威張りだす

たいへんたいへん封筒の女文字

夢にまで捨てた女が逢いに来る

座禪くむ ふつふつ女攻めてくる

変幻自在女は進化し続ける

真剣に言つたら女とりあわず

一步

天笑

富湖

洋

千梢

友熙

二三

澄子

智子

いわゑ

富湖

楓楽

夕ホネ

弥生

美代子

ダン吉

勇太

英子

かすみ

愛論

とし子

大輪

隆盛

おんなを誘い銀河鉄道へ逃げる

いい男に尽くされている夢の中

美男子の歯医者で口が開けにくい

うまいもの食べに着飾る熟女たち

何やかや言うて長生きする女

おんなからはみ出しお婆ちゃんになる

さあ今日も女を生きたる古稀の箸

被害者はみな妙齢の美女にする

卑弥呼から先へは進めない日本

いっしょにいても一人という女

女です上手に泣いて踊れます

パレットに三原色を出す女

終電車 女はどこで降りるやら

ほろ酔いや銀河に美女を泳がせる

佳

びっくり箱から何時も飛び出すのは女

臍繰った後も女はへそくれる

平成の女だてらは死語になる

なりゆきで女は妻になることも

女という終身刑を負っている

人

あの時に見たのは天女かも知れぬ

地

女かと念を押された事がある

天

女優だから女演じるのがこわい

軸

雪月花女いてこそ匂立ち

桂香

正一

保子

月子

保州

桂香

吐来

正坊

大輪

白兔

稚代

森子

鬼遊

天笑

美代子

美房

隆盛

夕花

保州

正坊

歌子

落児

薫風

第四十六回

富田林市民川柳大会

とき 11月2日(土) 午前11時開場

ところ 富田林市中央公民館2F

(近鉄南大阪線富田林駅下車、右方向へ徒歩3分)

兼題と選者

「苦手」 池 森子選

「予感」 奥田みつ子選

「鳩尾」 久保田元紀選

「友達」 川島颯云児選

「味方」 田中新一選

「眩暈」 住田英比古選

「晩成」 橋高薫風選

*各題2句 午後零時半締切

会費 1000円

懇親会 3000円

主催 富田林市教育委員会

後援 富柳会

(清記—希久子—)

句集紹介

『吐来の川柳研究室』

うしろのき

塩満 敏

『吐来の川柳研究室』が発刊されました。

『吐来の川柳初歩教室』の時は、「編集後記」を書きましたが、今回は、「編集後記」なしで発刊してしまいました。本社編集部から「吐来 of 川柳研究室の書評を」との連絡を受けました。ご好意に感謝しながら筆をとりました。自画自賛をお許し下さい。

本社の許可を得て、発行所は川柳塔社となっています。裏表紙には川柳塔社のマークを入れました。表紙には、西田柳宏子理事長の麗筆による「吐来 of 川柳研究室」の題字が光っています。

『吐来 of 川柳研究室』は、第一部と第二部にわかれています。

第一部は「川柳はびきの」誌上に一九八九年十月から九三年十一月まで四年二か月間、五十回、発表されたものを収録しました。

橋高薫風主幹の序文に「句の鑑賞や添削だけでなく、毎回の巻頭のエッセイの吐来さんの蘊蓄は柳論にはじまる文学論、社会時評からの政治批判、また銀行マンの経歴を生かした経済観、そして書評にまで幅広く及んでいる」とあるように、エッセイだけでも一冊の本にしたい魅力を持っています。

なお、ご指導ご援助をいただいた鈴木昶・徳永正憲の両氏に花を添えていただきました。毎回、「題」を出し、応募されて来た作品を添削するのですが、添削の難しさを体験し苦しんでいる吐来さんの姿を見ていて、研究室を企画した敏は自責にかられてばかりでした。しかし、その苦勞が吹っ飛ぶような嬉しいこともありました。

応募された作家のその後の活躍を目にし、耳にした時です。その度に乾杯する吐来と敏でした。

各課題の参考句・引用句も五百を越えました。路郎師をはじめとしたその句主の一覧表を第一部の末尾に記しました。

第二部には、吐来さんの作品三百句があります。前回の『吐来 of 川柳初歩教室』に収めたいと思って谷垣史好・高杉鬼遊のお二人に吐来さんの入選句数万の中から選んでもらったものに最新の吐来さんの入選句をプラスし

たものです。

一九九三年十月、天国の句座に入門した谷垣史好さんは、本社の編集部として、赤ペンを握り、橋高薫風編集長の良きパートナーとして奮闘されました。

現本社副主幹の高杉鬼遊さんは、吐来さんの長いライバルです。長い間、本社会計を務めた鬼遊さんの後任として吐来さんが現在、本社の会計を務めています。

吐来さんの現住所のそばにある羽曳野病院で発会した「どんぐり川柳会」時代の史好・鬼遊・吐来 of 三氏は、川柳界では「どんぐりの三羽鳥」と言われた好作家でした。

吐来さんの句は、吟味した平易な語を使つての句だけに誰にでもわかります。

毎年、羽曳野市で開催されるふれあい祭りの「川柳コーナー」を見る市民間で話題になるのが吐来さんの句です。

三百句が「男・女」「世相あれこれ」「夫婦」「いのちの酒」「自然と共に」「生きる」と六つの章にわけてありますが、吐来さんの句は、幅が広くてそして面白い。

康子夫人のカットが目と和ませています。

吐来さんの希望とミヤケプランニングのご好意で安価にしました。読んで決して損をしない本です。

宮口笛生句集

『でいいち』

松川 杜 的

宮口笛生さんが句集『でいいち』を発行された。柳歴四十八年という彼にとつては遅すぎた感じがしないでもない。

笛生さんとの出会いは定かではないが、旧国鉄時代に同じ釜の飯を食べた仲間で、職場こそ違っていたが、川柳の集いでは度々顔を合わせた親しい柳人であった。

薫風主幹の序文ではじまる句集は、立派の一語に尽きる。彼の人柄などについては、諸先生方が詳しく書いておられるので、今さら私が書くこともない。

少しこじつけのようだが、彼は奈良の薬師寺、私は京都の東寺の近くに住んでいるというだけでも何か親近感を覚える。そんな彼が五十年近い川柳生活から五百句近い句を選んだの句集、心からおめでとを申し上げたい。

句集の名D51は、元国鉄マンとして最もふさわしく懐かしい名で、何か郷愁じみた感じさえ与えてくれる。SLの写真も見事だし、色紙・短冊の達筆もつれしい。

句集を拝見してまず目につくのは、やっぱり酒の句であらう。

阿呆やった阿呆やったと二日酔

長生きの薬を酒と決めている

自転車で飲酒運転して帰る

酒うまくなりて候秋深む

まだ死ぬぬ酒もビールもおいしくて

次に目につくのは

機関士の顔がするどい発車ベル

SLの重さを知っているレール

三十分停車側線で摘むつくし

機関車に俺の指紋が残る車庫

笛生さんらしい句

空襲はもうない家の明るい灯

あるだけの椅子を持ち出し夕涼み
お月さん見てるやないのつねられる

座布団の長さで足りる子がねむり
怖かった墓地の横まで家が建ち
松の木に一日止まる植木職
老夫婦さみしい話で寝てしまい
死んだらしい精進上げをして帰り

さらに記憶をたどると国鉄部内に大鉄川柳会というのがあり、毎月、部内の何所かの部屋を借りて句会を開いていた時代があり、彼もちよいちよい顔を出してくれた。きちんと制服を着け、制帽まで被って出席してくれたものである。

句集紹介に縁遠いことまで書いてしまい、失礼しました。お許しください。何はともあれ是非一度、笛生さん句集『でいいち』(D51)をご覧になってください。

『吐來の川柳研究室』の購読希望者は川柳塔社事務所へお申込みください。頒価は送料とも二千元です。

宮口笛生川柳句集『でいいち』は頒価千円で、著者(奈良市七条町一―二六―四)へお申込みください。

柳界展望

★第4回風のまち川柳大賞
がこのほど発表されたが、

今回の応募句数は一四、五
六六句で、大賞次のとおり。

大声のかあちゃんがいる
風のまち 故郷 作太郎

なお、本社同人の江口明
光・政岡日枝子両氏が秀逸
に入選した。

★第20回名人賞川柳大会は
8月25日、ホテル・モナー

ク鳥取で開かれた。各題天
位句次のとおり。

今日のため朝飯だけは欠
かさな 林 荒介

泣きばくろ 女の河に浮
いている 藤原 鬼桜

長い手紙付けて送った盆
の仏 石垣 花子

健やかに生き荷くずれの

無い軌道 山本 玉恵

大声がとつても好きな日
本海 小池しげお

句の絵が枯れる蜜のいな
い夏 徳田ひろ子

男の名 二重に線を引い
て消す 原 みさを

★句集『正本水客とその仲
間』発刊記念誌上句会の入

選句がこのほど決まった。
各題秀逸句は次のとおり。

タブレット持つと威張っ
て走る汽車 久保 正剣

SLのプームの蔭で釜を
焚く 金森 徳三

雄叫びで負けた日本を牽
いた汽車 高野 宵草

野良仕事の昼時を知る汽
車が行く 山口 美穂

錯覚に駒子が映る汽車の
窓 松川 杜的

チキキトク電報抱いて乗
る夜汽車 住谷 石舟

浮き雲も有縁の絆抱いて
いる 小林 一完

避難所で水分けおつてか

らの縁 岩原 隆子

道幅を広げて縁深くする
西原 艶子

不思議な縁或る日或る時
或る出合い 本間満津子

同じ部屋の空気を吸って
る深い縁 新家 完司

思いがけず亡妻の逸話を
聞くも縁 堀端 三男

二人きりになると夫は眠
たがり 菱田 満秋

あまり先のことは考えて
ない二人 小出 智子

二人しておんなじ薬飲ん
でます 松川 杜的

二人からどちらを引いて
も零になる 吉川 寿美

笑いながら二人で書いた
遺言書 山本 義子

★財団法人全日本川柳協会
会長の仲川たけし氏の傘寿

を記念して伊予市に句碑が
建立され、それを記念して

同市立図書館に全国柳人の
協力により川柳文庫が新設

された。

新同人紹介

植 田 一 京
— 洋々・螢・完司推薦 —

倉 益 一 瑤
— 洋々・螢・完司推薦 —

杉 本 孝 男
— 洋々・螢・完司推薦 —

坂 田 和 歌 子
— 薫風・公一・帆雀推薦 —

永 井 三 津 子
— 洋々・螢・完司推薦 —

今 生 恵 子
— 薫風・甲吉・五葉庵推薦 —

★平成8年度北海道川柳大賞

賞は落合敏子、同準賞は石橋哲各氏が受賞、川柳功労賞には大橋政良、柳沢花王子の両氏が選ばれた。

★全国鉄道川柳人連盟の第33回年度賞は土田欣之氏が受賞した。

★第48回西日本川柳大会が9月1日、久米南町中央公民館で開かれたが、本社同人の小島蘭幸氏がNHK岡山放送局長賞を受賞した。

★第51回尼崎市文芸大会が9月1日、同市立中央公民館で開かれたが、川柳部門では本社同人の田辺鹿太氏が四席、江口明光・川崎ひかり・門谷たず子・田中正坊・山地マツエの各氏が佳作に入選した。

芸のない漬もの石にある
重み 田辺 鹿太

★平和のための戦争展で募集した川柳は次のとおり各賞が決定した。

〈戦争展大賞〉

通天閣の灯は平和のメッ
セージ 芦田 絢子
〈朝日新聞社賞〉
九条の勇氣世界に広めた
い 岩佐 興輝

〈オール川柳社賞〉
核戦争逃げていくところあ
りますか 高須賀金太

★産経新聞社後援・大阪川柳の会は10月2日午後5時からサンケイビル本館322号室で開かれる。宿題と選者は、菊Ⅱ天根夢草Ⅲテ
ープⅣ高杉鬼遊Ⅴ絵の具Ⅵ
森中恵美子Ⅶ縫るⅧ磯野い
さむ(各題2句、午後6時締切)、会費500円

▽出 版△

■宮口笛生川柳句集『でこ
いち』(B6判上製本・2
06頁・頒価1000円・

葉文館出版) 橘高薫風・東
野大八・片岡つとむ序文・
昭和22年から平成7年まで
の約五百句を取録

■川柳と小咄『愛の玉手箱』

(須郷井蛙著・B6判16
6頁・弘前路上社刊・価1
200円) 工藤寿久序文
■川柳句集『正本水客とそ
の仲間』(B6判・252
頁・正本水客とその仲間刊
行委員会刊) 橘高薫風・八
木千代序文、水客氏の約八
〇〇句と仲間(句集協賛者)
の約六〇〇句を取録

ゴムバンドはめたままな
る妻の手よ 正本 水客
▼計 報▲

■櫻谷寿馬(伊丹市・同人
元常任理事) 8月18日、多
発性骨髄腫により伊丹市立
病院で死去、78歳。同20日
吹田市千里会館で告別式が
行われた。法名、常照院真
誉寿光居士

▼訂 正▲

■9月号P3(目次) 8
行目「赤川・菊野」↓「吉村
一風」▽P77上段5行目
「田中正坊」↓「田中正坊」

櫻庭 順三

— 薫風・甲吉・五楽庵推薦

高橋 岳水

— 甲吉・五楽庵推薦

岩切 康子

— 薫風・紫香・芳仙・俊子推薦

高野 宵草

— 薫風・紫香・芳仙・俊子推薦

木村 春枝

— 薫風・荒介・瑞枝推薦

西村 哲夫

— 薫風・天笑推薦

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(69)

橘 高 薫 風

三月下旬、朝鮮満洲の川柳行脚を終えた路郎先生は四月五日には上京して「きやり十五周年記念句会」に出席、二十二日には川柳雑誌社四国支部連合会主催の「四国川柳大会」へ。その間に観桜句会と相変わらず精力的だ。

夜桜と動物句会

天王寺動物園が拡張されて東洋一の偉容を誇っています。夜桜の観賞旁々御出席下さい

日時 四月十四日(土) 午後六時半

場所 天王寺動物園

講演 「川柳と動物」 林 園長

兼題 「リタ嬢」三句 麻生 路郎選

「夜 桜」三句 福田山雨楼選

会費 金参 拾 銭(入場券進呈)

(幹事) 鶴峰、里十九、夕鐘、冬光

主催 川 柳 雑 誌 社

右の項が枠組に広告されている。

朝日会館での「川柳の夕」をはじめ、若草山の山焼きに協賛しての川柳と花火大会、あやめ池遊園地での園遊会的催しなど、川柳の社会化のため種々の試みに挑戦するのが常で

あった。これらの催しのあと雑誌の面には、前田雀郎卿「袂の塵 脇起歌仙という珍しい記事、林佐市動物園長の「リタ嬢について」また岡田某人の「川柳動物園」など前後に関連記事掲載、読物としても興味深い雑誌への尽力を惜しまない。執筆者も豊富、編集人も橋本緑雨、福田山雨楼、麻生霞乃、楊井二南、住田乱耽の諸氏で充実にしていた。

夜桜と動物の句の一部を記す。

桜散るキリンの首へ三片

仲のよいキリン揃えの寝巻着て

アドバルンキリンに遠くのかかなり

ネクタイが欲しい姿でキリン立ち

夜桜の子供一枝ほしいなり

夜桜へ救世軍は嫌われる、

夜桜の灯へ立って国の事

夜桜へ一丁先のキネマ街

夜桜も更けて大学生の唄

夜桜を三階から見るハーマニカ

夜桜に愛人の足棒になり

小松園

禿 山

司 郎

路 郎

雀踊子

春 光

言 人

乱 耽

黙 平

四呂平

豆 秋

山雨楼

リタ嬢に安心をして帰る嫁 白柳子
リタ嬢は不良少女と云うかたち 夕 鐘
リタ嬢はいくら稼いだかは知らず 溪 々
路郎先生の席題「キリン」の軸吟が一番概念的であるのがおかしい。それは「うがち」の大切さを無言で教示されているような気がしてならない。路郎先生の秀句にはこの概念的内容を盛り込んだものが多い。「俺に似よ」も「寝転べば」も「酒とろり」もそうだ。表現力の卓抜き、リズム感の高揚が凡庸から救っているのだと思う。概念こそ大切だ。路郎先生の近作二月号からのを並記する。

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子

子沢山僕の枕は何処へいた

止むを得ずした孝行をもてはやし

庭の広さが老境をおもわせる

春の寺香具師見ただけで通り抜け

パンとミルク株が上った顔になり

酒か欠伸か人生の悠久さ

慰藉料で養子をもらうことになり

一升提げて邪魔をしにゆく

悼 緑雨夫人

時計がとまった淋しさですよ僕等にも
後年出版の句集「旅人」には、この句の下
句は「僕にも」と推敲、掲載されている。



木谷寿馬さん さようなら

遊鬼 高杉

畏友、木谷寿馬（かずま）氏逝く。彼と最後に会ったのは今年の六月四日であった。所

は伊丹第一ホテルの一室だった。橘高薫風主幹、宮園射月芳、私の三名が招かれた。それは、寿馬氏句集発刊についての顔合せであった。車椅子の寿馬氏に付き添って、郁子夫人と古林家へ嫁がれた令嬢が同席して下さった。彼は至極元気で、「自分は九十四歳まで生きるのだ。今度入院したら徹底的に病気を治す」と、自信満々だった。

彼を知ったのは昭和四十九年の末だった。

子の鬼も居るだろ甘い豆を混ぜ 漫柳

最初の雅号は漫柳だった。川柳塔誌「水煙抄」の秀句鑑賞欄で、この句を採りあげたのが縁であったようだ。昭和五十一年四月には同人になり、同年十月の八尾市文化祭川柳大会に出席、西村芳川選「会う」で、

会ってみてやっぱりと知る血のこわさが秀句に入選した。

どこでどう気が合ったのか、機会ある度にはや機会をつくってよく会った。誘うのは彼の方で、私はそれに応じていたように思う。すべてに対して積極的で、二歳年長の彼は、兄貴分としての貫禄十分だった。

昭和五十四年「川柳友の会」を発刊、その編集を頼まれ、新聞に折り込みの広告をするやら、選者に時実新子氏、天根夢草氏を迎えるなど、彼の夢は斬新だった。

わが家における「おしゃべり庵」の常連であり、八尾から伊丹までの帰宅は何時も最終電車だったと憶う。その頃、大正生れの川柳人が寄り合い「たいしょうの会」を作り、大阪北区曽根崎のすきやき屋「入船」の二階で連句を競い、また、八尾の渡辺居で香道の会を催したりした。中尾藻介、寺尾俊平、光森良、鳥本泰、室田千尋、岩井三窓、森本夷一

郎、越智楨、橘高薫風、木谷寿馬の各氏と私の総勢十一人で、よく学びよく遊んだ。十一人の士と言っていたが、先に室田千尋氏が逝き、今寿馬氏も亡くなり、大正生れにとって寂しい限りである。

彼は川柳だけでなく、囲碁も楽しみ、川柳人による囲碁大会を催すなど常に何かを計画していた。ある日、自家製のどぶろくが出来たからと誘いがあり、彼の家で酒盛りをしたことも思い出す。

何時の日のことだったか、飲みながら、私を通った大阪港区（現大正区）三軒家第一尋常小学校の話をしたところ、彼も同じ小学校の二年先輩だったことを知った。それも彼の縁の一つだったと思われる。

平成八年八月十八日午前三時五分、多発性骨髄腫により七十八歳の生涯を閉じられた。どれだけ句集『銀海』を待たれたことか、任された私にとって慙愧に堪えない。ゴツゴツとした感じながら繊細であたたかい感触を持っていた彼の柩の傍で、想いは千々に砕けて言葉もない。霊柩車静かに動き出す。一六一番のバックナンバーは何時までも脳裡に離れない。

常照院真譽寿光居士

合掌

岸和田市文化祭参加 岸和田市民川柳大会

と き 10月12日(土) 正午開場

ところ 岸和田市民会館地下会議室

おはなし 阿 萬 萬 的

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

「魅力」 牛尾緑良選

「ジックス」 河内月子選

「後味」 中田たつお選

「ひっそり」 小出智子選

「足音」 西田柳宏子選

「誇り」 橘高薫風選

席題 当日1題発表 松本初太郎選

会費 1500円(記念品・大会誌呈と軽食)

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞ほか

主催 岸和田市教育委員会

参加団体 岸和田川柳会

共催 岸和田市文化祭実行委員会

第23回 堺まつり協賛 堺市民川柳の会

と き 10月5日(土) 午後1時開場

ところ 堺総合福祉会館5F大研修室

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

「酒」 八十田洞庵選

「手紙」 松原寿子選

「整理」 坂元一登選

「妻」 板尾岳人選

「元気」 小出智子選

「拝む」 中田たつお選

「紳士」 波部白洋選

「宴」 河内天笑選

賞 各題秀句賞

会費 1500円(軽食・作品集)

連絡先 河内天笑

第47回文化祭協賛 西宮市川柳大会

と き 10月20日(日) 正午開場

ところ 西宮市立勤労会館4F8号室

(阪神西宮東口・JR西宮駅下車)

宿題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「伸びる」 浅雛美智子選

「足跡」 小山紀乃選

「麺類」 奥田みつ子選

「確かめる」 柿木英一選

「マンション」 福島直球選

「トンネル」 石井冬魚選

会費 700円(作品集郵送)

投句 10月5日までに80円切手5枚を
同封、12句連記して下記へ

〒662 西宮市城山12-8 水無瀬富久恵

西宮川柳同好会 西宮川柳会

共催 西宮北口川柳会 枝川川柳会

浜甲子園川柳同好会 学文川柳

東大阪市文化祭参加 東大阪市民川柳大会

と き 10月13日(日) 正午開場

ところ 東大阪市民社会教育センター3F

(東大阪市長堂1-17-29 近鉄布施駅北へ5分)

文化映画 「川柳史探訪」上映

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

「消える」 竹内良伸選

「風」 松本初太郎選

「未完」 池森子選

「地獄」 久保田半蔵門選

「期待」 川島諷云児選

「船」 波部白洋選

「ゆとり」 牧浦完次選

*各題秀句賞・記念品・発表誌呈

会費 1000円

主催 東大阪市文化連盟
東大阪市民川柳同好会

寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(祝) 正午開場
 ところ 寝屋川市総合センター 4 F
 (京阪寝屋川市駅からバス西①乗場)

兼題と選者 (各題2句・午後1時締切)
 「夫婦」 江口 度選
 「化粧」 津田 一江選
 「手品」 西田 柳宏子選
 「横」 中田 たつお選
 「年金」 阿 萬 萬 的選
 「裁く」 橘 高 薫 風選

会 費 1000円 (作品集・記念品)

賞 各題秀句に賞状と賞品

主 催 寝屋川市川柳協会

後 援 川 柳 ね や が わ

文化祭協賛

吹田市民川柳大会

と き 10月27日(日) 午前11時開場
 各題2句 出句締切午後1時
 ところ 吹田市文化会館メイシアター3階
 (阪急吹田駅西口前)

お 話 田 頭 良 子 氏
 宿 題 「器 用」 友田 茶の子選
 「揉める」 島 田 握 夢選
 「ほんま」 榎 本 信 治選
 「胸」 長 江 時 子選
 「口説く」 高 杉 鬼 遊選

席 題 1題 当日発表 川島 颯云児選

会 費 1,000円 秀吟賞・参加賞呈

《懇親会》 句会終了後4時から開催

会費 4,000円

参加ご希望の方は10月15日ま
 でに事務局へ

主 催 吹田市教育委員会

文化団体協議会

吹 田 川 柳 会

吹田川柳会事務局

文化芸術・芸能祭

八尾市川柳大会

と き 11月17日(日) 正午開場
 ところ 八尾文化会館 4 F 第1会議室
 (近鉄八尾駅下車)

宿題と選者 (各題2句・午後1時締切)
 「情け」 小 山 紀 乃選
 「開く」 田 中 新 一選
 「時 間」 波 部 白 洋選
 「嬉しい」 土 田 欣 之選
 「思 う」 杉 野 睦 朗選
 「叱 る」 赤 松 隆 男選
 「当 る」 西田 柳宏子選

会 費 2000円 (鉢植花・軽食)

懇親宴 3000円 (希望者のみ)

主 催 八 尾 市・八尾市教育委員会
 八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会

後 援 八 尾 市 民 川 柳 会
 川 柳 ク ラ ブ「わた の 花」

文化祭協賛

枚方市民川柳大会

と き 10月27日(日) 午後1時開場
 ところ 枚方市立枚方公園青少年センター
 (京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)

お 話 磯 野 い さ む 氏
 宿 題 「顔」 住田 英比古選
 「ポケット」 西 川 景 子選
 「芯」 北 沢 尚 子選
 「転がる」 松 本 初 次郎選
 「ごめん」 江 口 度選
 「とかげ」 田 中 新 一選

席題なし 各題2句 締切午後2時

参加費 500円 (発表誌呈)

賞 市長賞・市教育委員長賞・

市議会議長賞ほか

主 催 枚方くらわんか川柳会

後 援 枚方市・枚方市教育委員会

NHK全国川柳大会

と き 11月10日(日) 午前10時開場
 ところ く にたち市民芸術小ホール
 (JR矢川・谷保駅から徒歩10分)
 講 演 「俳句から見た川柳」
 俳人協会理事長 鷹羽狩行氏
 宿題と選者(事前投句・各題2句)
 「商」 橘高薫風選
 「中」 斎藤大雄選
 「蔵」 尾藤三柳選
 「箱」 森中恵美子選
 「保」 渡邊蓮夫選
 席題と選者(当日出題・各題2句)
 竹本瓢太郎 山田良行
 事前投句 10月1日締切
 投句料 2000円(作品集郵送)
 投句先 〒186-01国立市富士見台2-36
 NHK学園全国川柳大会事務局
 主 催 NHK学園・国立市

江原とみお追悼川柳大会

と き 10月13日(日) 午前10時開場
 ところ レストラン富士(倉吉駅前)
 とみおさんを偲んで(思い出を語る)
 奥谷弘朗・但見石花菜
 題と選者(各題2句・午前11時半締切)
 「酒」 橘高薫風選
 「笑う」 天根夢草選
 「若い」 小林由多香選
 「登る」 八木千代選
 「美しい」 野沢大漁選
 「男」 土橋螢選
 *開会午後1時 閉会同4時(予定)
 席題なし・欠席投句は拝辞します
 会 費 2000円(江原とみお川柳遺作集
 発表誌贈呈)

豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場
 ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
 (阪急宝塚線曽根駅東200m)
 会 費 1000円(記念品・発表誌進呈)
 おはなし すえひろ川柳会会長 小野楠曠氏
 席題(当日発表) 板野美子選
 宿題 「薬」 片岡湖風選
 「火」 桑田砂輝守選
 「音」 住田英比古選
 「涙」 西川景子選
 「光」 西出楓楽選
 「情」 西田柳宏子選
 「酒」 波部白洋選
 締切 午後1時(各題2句)
 賞 豊中市長賞ほか各題に進呈
 主 催 豊中川柳会
 豊中市立中央公民館

川柳塔鹿野みか月大会

と き 11月17日(日) 午前9時開場
 ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」
 *第1部=出席者のみ
 兼題と選者(各題2句・午前11時半締切)
 「朝」 橘高薫風選
 「ころ」 森中恵美子選
 「折々」 金築雨学選
 「脈」 小林妻子選
 「忘れる」 門脇かずお選
 「抜群」 武田帆雀選
 *第2部=出席者と欠席投句者=各2句
 「響く」 小林由多香選
 「乱」 土橋螢選
 「雑詠」1句 10月15日締切
 会 費 出席者二千円・投句料千円
 投句先 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町
 鹿野1279 中原諷人方

10月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 額・握る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	5日(土)午後1時から 堺市民川柳の会	堺市総合福祉会館 本号P114参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 まつえ	5日(土)午後1時から 夢・文化・物好き	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 損・古い・消える	豊中市立蜷池公民館 阪急宝塚線蜷池駅西へ150米 〒560 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から 裏・失う・コント・内気	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎マ子
岸和田 川柳会	12日(土) 正午から 岸和田市民川柳大会	岸和田市民会館地下会議室 本号P114参照 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市 川柳 同好会	13日(日) 正午から 東大阪市民川柳大会	東大阪市立社会教育センター 本号P114参照 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 遠い・祭・ジャンプ	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 説明・極める・ぱっかり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(水) 正午から 泣く・紙・つれづれ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川柳会	18日(金)午後6時から 平素・迷宮・エール・連続	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川柳 ねやがわ	20日(日) 正午から 例・意地・分け前・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	24日(木)予定・午後1時 袋・描く・めっきり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富柳会	24日(木)午後1時から そっと・叩く・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池森子
京都 塔の会	25日(金)午後1時から 絵・侮る・見当	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
はびきの 市川柳 会	27日(日)午後1時から しぶしぶ・手間・競う・ゲスト	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★昔、立命館大学総長の末川博氏が「人生三分法」を提唱された。昔と言っても一九六〇年代ごろであったと思う。人生六十年として、初めの二十年は人に育てられ教えられる期間、次の二十年は世のため人のために働く期間、そして終りの二十年は悠々自適、もっぱら自分のために生きようという考え方である。

★当時の平均寿命はたしか六十歳ぐらいだったから、これを現在の七十五歳にあてはめると、人の世話になるのは初めの二十五年、人のためにつくすのが次の二十五年、終りは五十歳からということになる。つまり死ぬまであくせくすることはないという訳だ。

★しかし、これを提唱した

末川博士は、私の知るところでは終生、働き続けられたから「三分法」はかなわぬ夢であつた。私自身はちょうど満二十歳で社会人となり、営々として働くこと四十年、やつと六十歳で定年退職した。これでも十年オーバーしているが、その後何やかや仕事と縁が切れずに今日に至った。

★それでもせめて七十歳に手を引きたいとひそかに願ひ、すこしは実行に移したが、全くゼロとはなっていない。「生涯現役」も結構だが、これでは自分のために生きる時間がないではないか。すんだことは仕方ないが、何としてでも一年後の七十五歳を最終ラインとしたい。あと何年生きるかは分からないが、それからがほんとうの余生だと思っている。(正)

ひとこと

風呂と川柳

作句にいきづまった時、私は風呂に入る。浴槽につかっている時、体を洗っている時、ヒヨイヒヨイと句が浮かぶ。課題句の場合が多いが、たいていは二句か三句があまり苦勞せずにできる。

浴室は密室で誰にもわずらわされない。入浴時間はおよそ十分から十五分間で、これが制限時間となる。入浴は血行を良くするから

脳の血めぐりもよくなる——と「理論化」してみたが、要は論より証拠である。

ただし、漫然と入浴したのでは駄目で、あらかじめ課題の言葉の意味や用例を調べておくという「仕込み」がいる。そして浮かんだものは消えやすいから、名刺大の厚紙に穴をあけ、短い鉛筆とセツトし、すぐ書きとめねばならない。

(三条 三吉)

☆近くの郵便局の窓口嬢が替わった。以前の愛くるしい丸顔の人から、少し年長りの知的な人になった。「丸顔さん」はとても愛想はよかったが、頼りないところが、頼りないところがあり、「知的さん」はあまり愛想のいい方ではないが、てきぱきと頼もしい。

☆人には、それぞれ持ち味がある。息子の中学時代のことであるが、学年末に担任と親たちとの学級懇談会があり、ある母親が来年度もこのままの担任持ち上がりを希望し、他の人々もそれに同調した。「そう言うて頂けるのは有難いが、私にもいい所もあるだろうけれど、悪い点もある。いい所はなかなか見えないし、影響されにくいのが、他人の悪い点がよく見え、しかもそれに染まりやすい。子供たちには担任が替わることでも大切」と話された担任の

声が、二十年経った今でも耳に残っている。

☆街に居て自然の動植物に疎い私は、ある夏の夜、ペランダの珍客に悲鳴をあげた。四センチ四角ほどのまっ黒い物がそのそ這っている。初めは枯れ葉かと思つたが、金色の小さな目が光っている。蝙蝠の赤やらんらしいが、結局、分からない。翌朝、探したがどこにも居なかった。(み)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（12月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

作品募集

川柳塔 (8句)
 水煙抄 (8句)
 澎湖抄 (3句)
 茴香の花 (3句)

高杉鬼遊風選
 小出智子選
 西出楓楽選
 山口三千子選
 森山盛桜選
 小島蘭幸選

課題吟 (3句)
 「追る」「やがて」「ぜろ」

吐田公一担当

12月号発表 (10月15日締切)

1月号

課題吟 「お 腕」「祝 う」「まぶしい」
 初歩教室 「朝」

大阪文化祭川柳大会

と き 11月16日 (土) 午後11時開場

ところ 大阪市中央公会堂

兼題と選者 (各題2句・午後1時締切)

「時事川柳」 柏原 幻四郎 選
 「似る」 山本 翠公 選
 「夜」 久保田 寿界 選
 「宴会」 山下 美津留 選
 「道化」 高橋 古啓 選
 「姿勢」 堀江 としお 選

席 題 当日2題発表します

会 費 1000円 (作品集代含む)

賞 各主催者名で「川柳賞」贈呈

主 催 大阪府・大阪府教育委員会
大阪市・大阪市教育委員会

本社11月句会 7日 (木) 予定

兼題 「贈る」「議論」「無駄」「奪う」「水面」

夜市川柳募集

第5回「錯覚」木野由紀子選

ハガキに3句 10月末締切

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課 題 「ライバル」 森中恵美子 選

ハガキに3句 10月10日締切

投句先 〒540-01 NHK大阪放送局

「文芸部」川柳係

発 表 10月26日 (土) 午前11時5分
からラジオ第1放送 (予定)

「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限ります。
- ②澎湖抄・茴香の花欄および一路集 (課題吟) への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

〒545

定価 六百元 (送料76円)
 半年分 四千元 (送料共)
 一年分 七千九百元 (同)
 平成八年十月一日発行
 編集兼 橋 高 薫
 発行人 橋 高 薫
 印刷所 美 研 ア 1 ト
 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 川柳塔社
 電話 (06) 691-1464
 振替 〇〇九八〇一五三三六八番

第四回 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる、「全日本川柳誌上大会」(日本財団補助事業)を昨年につづいて開催します。二十回の歴史を持つ全日本川柳大会、十一回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然間行事ですので、こそつてご参加ください。

課題と選者(各題2句・連記)

「ゆつくり」 開発 秋醉 鈴木柳太郎 共選
「晴れる」 関 水華 青木 晴嵐 共選
「橋」 野谷 竹路 小嶋 旬月 共選
「活気」 梶川雄次郎 川俣 喜猿 共選
「噂」 木野由紀子 辻 晚穂 共選

参加費

賞

2000円(投句料・平成柳多留)第4集代)
平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
経済広報センター会長賞・財全日本川柳協会
会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切

平成8年11月30日(土)

発表・表彰

平成9年6月・第21回全日本川柳三重大会

参加方法

所定用紙(二枚一組)に各題2句と雑詠1句を書き(各題の選者が二名のため同じもの二枚を書くこと)、参加費と共に左記へ(用紙は請求くだされば送ります)。

〒530

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX(06) 352-2210

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928